ISSN 1881-9184

Vol. 8 2014

The Bulletin of Kansai University of Health Sciences

関西医療大学紀要

関西医療大学

巻 頭 言

関西医療大学のオリジナリティーを発信しよう！

保健医療学部理学療法学科　学科長
大学院研究副科長
鈴木　俊明

関西医療大学は、鍼灸師、理学療法士、柔道整復師、看護師、臨床検査技師を養成する大学です。各々の資格には特徴がありますが、一人の患者さんを総合的に診る、ということでは共通している点をたくさん見つけることができます。

鍼灸学科単科の短期大学からスタートした私たちの大学ですが、当時からの大きな目標である「東西医学の融合」という志は、各学科で開講されている「東洋医学と西洋医学」「東洋医学と理学療法特論」「統合医療（代替医療）」「看護にいかす東洋医学」「看護にいかすツボ刺激」といった科目を通して、しっかりと受け継がれていると思います。

一方、研究活動では私が理学療法臨床で実践し、研究テーマのひとつにしている「経穴刺激理学療法」や、保健看護学科でのツボ刺激に関する研究も本学ならではの成果と言えるでしょう。これらは鍼灸学科、はり灸・スポーツトレーナー学科との連携が欠かせませんが、学科間の連携による研究という目標も、「東西医学の融合」という目標とともに、本学の特徴として重要ではないかと考えます。最近では、転倒予防の観点から、私とヘルスプロモーション整復学科との共同研究も始めることができました。平成25年4月に開設された臨床検査学科とも私の研究手法である、筋電図を用いて、何か新しいことができるのではないかと楽しみにしています。このように共同研究をさらに産みだし、発展させていくことは、メディカルプロフェッショナル総合大学としての本学のオリジナリティーであり、使命ではないかと考えます。

さてそこで、本誌「関西医療大学紀要」です。本誌は、本学に所属する研究者の成果である論文を主体として構成されています。しかし、どんな論文も採用されているわけではなく、ある一定レベル以上の論文でなければ掲載されないという厳しさがあります。本誌の発刊は、論文の著者だけでなく、ご指導いただいた先生方、編集に関与していただいた先生方の協力がなくてはできないことです。敬意をあらわしたいと思います。学部・大学院の学生のみなさんには、本誌より多くのことを学んでいただきたいと思います。また、本誌は多くの研究・教育機関の先生方にもお読みいただけます。そのため外部の皆さんにも本学の特徴的な研究を知っていただく良い機会になります。本誌を通して、関西医療大学の素晴らしさを多くの方々に知っていただきたいと思います。本学のオリジナリティーを発信するため、ともに努力していきましょう。

目　　次

巻 頭 言……鈴木　俊明

原　　著

中国古代「美」意識にみえる鍼灸美容の検討……王　　財源…… 1
改訂版「五臓スコア（Five Viscera Score）」の妥当性 ……戸村　多郎…… 12

研究報告

高齢者SP（Simulated Patient）養成の課題 ……鹿島　英子…… 20
成人の健康づくりへの関心と運動習慣確立の関連要因の検討……築田　　誠…… 27

平成25年度　関西医療大学大学院保健医療学科　保健医療学専攻修士論文 …… 34

平成25年度　関西医療大学附属保健医療施設の活動状況について …… 35

平成25年度　ユニット研究活動状況 …… 38

人文・自然科学ユニット研究活動状況…… 38
基礎医学ユニット研究活動状況…… 39
臨床医学ユニット研究活動状況…… 40
鍼灸学ユニット研究活動状況…… 48
スポーツトレーナー学ユニット研究活動状況…… 52
理学療法学ユニット研究活動状況…… 53
ヘルスプロモーション・整復学ユニット研究活動状況…… 60
臨床検査学ユニット研究活動状況…… 64
基礎看護学ユニット研究活動状況…… 66
臨床看護学ユニット研究活動状況…… 67
生涯発達看護学ユニット研究活動状況…… 69
地域・老年看護学ユニット研究活動状況…… 71

平成24年度　関西医療大学動物実験に関する現況調査票 …… 74

平成24年度　関西医療大学動物実験に関する自己点検・評価報告書 …… 76

CONTENTS

Foreword ……Toshiaki SUZUKI

Original Research

Awareness of Beauty in Ancient China: An Examination of Acupuncture and Moxibustion Beauty Treatments ……Zai gen OH …… 1

Validity of the revised Five Viscera Score ……Taro TOMURA …… 12

Study Report

Challenge of training the elderly SP (Simulated Patient) ……Hideko KASHIMA …… 20

Factual analysis for having interests in health promotion and habituation of physical exercising ……Makoto TSUKUDA …… 27

Department of Health Sciences, Graduate School of Health Sciences, Graduate School of Kansai University of Health Sciences in 2013 …… 34

Activity of Intergrative Medicine Clinic, Kansai University of Health Sciences in 2013 …… 35

Activity List of Kansai University of Health Sciences in 2013 …… 38

Kansai University of Health Sciences Questionnaire on the Present Situation Concerning Animal Experimentation 2012 …… 74

Kansai University of Health Sciences Report on the Self-Examination and Self-Assessment Concerning Animal Experimentation 2012 …… 76

原　著

中国古代「美」意識にみえる鍼灸美容の検討

王　財源[1)]

1）関西医療大学　保健医療学部自然科学ユニット

要　旨

伝統医学における鍼灸美容の「美」に対する本質的な概念を、中国古代文献から検討した。その結果、『論語』や『淮南子』『黄帝内経』『世説新語』等々を初めとする諸文献に、身体的な美の本質が、人間の精神的、心理的な要因が深く関与していることが考えられた。したがって、鍼灸美容に対する概念に、心と体の調和を図るための具体的な目標として、虚飾を取り除く精神内面における人間力の内実が、外表の容貌美に変化を与えると言う、内なる生命の輝きにこそ「美」の実像があることが示唆された。今後、鍼灸美容を進める上で、中国の伝統医学に脈打つ古来よりの思想、哲学観を含めた鍼灸の美容教育の推進が、鍼灸美容学の基礎理論を築く上で重要となろう。

キーワード　中医学、鍼灸、美容術

Ⅰ　序　論

皮下組織への物理的な鍼刺激が、顔面筋肉の血流を促して血行の改善につながることは誰しもが知るところである。その施術効果は顔面部のツヤ潤い、また、血色の変化による即効性が期待され、鍼灸師が安易に取り組みやすいといった利点もあって、多くの鍼灸師は「美容」をキーワードとしたさまざまな鍼灸施術を行っている。しかしながら、顔面への施術が血流量などの促進によって、肌への一定の美容効果があるとはいえ、本来、中国の伝統医学に脈打つ養性思想を根幹とした、身体の恒常性維持機能に裏打ちされた中医学の存在と結びついているのかという点については疑問が残る。2009年より筆者は鍼灸の美容教育を進める上で、「美」と「哲学」の関係を中国学の分野より検討を進め、古代中国哲学にみえる「美」に対する本質的な考え方の一部については明らかにしたが[1)]、未曾有の文献から、より深くそれらを結論づけるには至らなかった。そこで更に一歩踏み込んだ「美」への考察が必要と考え、伝統医学に根付く「美」の本質的な考え方について文献的研究を行ったので報告する。

Ⅱ　方　法

『荘子』『論語』『抱朴子』等々の思想、哲学書や、『黄帝内経』等々を始めとする医書を用いた。また、宮廷内部の様子を語る『御薬院方』（元）『太医院秘蔵膏丹丸散方剤』、『清朝宮廷秘方』（清）、化粧技術などの一般的な社会風俗の記録書である『世説新語』（六朝）『天工開物』（明）『事林広記』（宋）、人物をみる品評書として『人物誌』（魏）『挺経』（清）、和書は『古事記』『日本書紀』『万葉集』『医心方』などの文献を用いた。原文は日本内経医学会所蔵の明刊無名氏本『新刊黄帝内経霊枢』（内藤湖南旧蔵）を集録した『霊枢』（2006）と、『重広補注黄帝内経素問』四部叢刊子部（2004）を底本とし、校勘は篠原孝市監修、黄帝内経素問（下）『黄帝内経霊枢』ｵﾘｴﾝﾄ出版社（1985）を用いた。また、訓読には南京中医薬大学中医系篇著、原書『黄帝内経霊枢訳釈』上海科学技術出版社（1986）、石田秀実、白杉悦雄監訳『現代語訳・黄帝内経霊枢』（2007）と、石田秀実、島田隆司ほか訳『現代語訳・黄帝内経素問』（2006）、東洋学術出版社を参考にした。尚、検証方法を迅速化するために歴代漢方名作選（繁体字図文版・凱希メディアサービス）を用いて、皮毛、肌膚、気血などのキーワードで検索し、古典にみえる蔵府、気血が皮毛や肌膚に与える人

体上の生理的な働きについて抽出した。さらに史実上の思想背景との比較を行うことを目的に『諸子集成』中華書局香港分局（1978）や、文淵閣本『四庫全書』（電子版・漢字情報システム）を参考に、先秦から清代前半に至る「美」や「美容」と伝統医学との相関性を考察した。

Ⅲ　結果と考察

1．「美」の象徴「眉」と『黄帝内経』の関係を論じる

古代「美」の象徴である「眉」の厚薄や形状は、『黄帝内経』よりみると身体の健康度を映し出すバロメーターでもあった。しかしながら、先行文献を見る限り、眉と美顔がどのような関係で『黄帝内経』と結び付くかという論述はない。そこで『黄帝内経』にみえる気血が体表の肌膚や眉に反映するという文脈を調べた。先ず、その根拠となる医書に記された文脈を分析する。

『黄帝内経霊枢』巻第十八
陰陽二十五人第六十四
「足太陽之上、血気盛則美眉、眉有毫毛。血多気少則悪眉、面多少理。血少気多則面多肉、血気和則美色」[2]。

足の太陽の上、血気盛んなれば則ち美眉にして、眉に毫毛あり。血多く気少なければ則ち悪眉にして、面に少（小）理多し、血少なく気多ければ則ち面に肉多し。血気和すれば則ち美色あり。

（上部を順行する足の苔経脈に、血気が充足していれば、眉毛は麗しく長く、眉の中に毫毛が生えてくる。血が多くて気が少なければ、眉毛は枯れて憔悴し、顔に細やかなシワが多く現れ。血が少なく気が多ければ、顔面部の肌肉は豊満である。気血が調和していれば、顔面がきれいになる）[3]。

「美眉者、足太陽之脉、氣血多。悪眉者、血氣少。其肥而澤者、血氣有餘。肥而不澤者、氣有餘、血不足。瘦而無澤者、氣血俱不足。審察其形氣有餘不足而調之、可以知逆順矣」[4]。

美しき眉は、足の太陽の脉、氣血多し。悪しき眉は、血氣少なし。其の肥えて澤うは、血氣に餘り有り。肥えて澤わざるは、氣に餘り有り、血足らず。瘦せて澤いなきは、氣血俱に足らず。審らかに其の形氣の餘り有ると足らざるとを察てこれを調うれば、以て逆順を知るべし。

（眉が秀麗であれば、足の太陽経脈の気血が充足しています。眉毛がまばらで美しくないのは、気血がともに足りないからです。からだの肌肉が豊満で潤沢なのは、気血に余りがあります。肥えていて潤沢でないのは、気に余りがあり血が足りません。痩せていて潤沢でないのは、気血がともに不足しています。身体外部に現れた表現と体内の気血の有余不足に基づいて、疾病の虚実、病勢の順逆を知ることができます）[5]。

これら両者の文脈を見る限り、「美」という文字が明らかに記載され、眉の美しさと気血との関わりについて論じられているのは興味深い。

したがって、気血が「美」の文化に影響を与え、美顔法の一つとして結び付いていることが『黄帝内経』にもある。さらにそれらを象徴するかのように眉の「美」と美顔が結び付いていた文献的根拠が、日本の古典書にも載ることに注目する。

『古事記』
「中つ土をかぶつく、真火には当てず、眉画き、濃に画き垂れ」[6]。

『万葉集』
「振りさけて若月見れば一目見し人の眉引き思ほゆるかも」[7]。

当時、日常的にある「眉画き」「眉引き」という文化を考えても、眉を整形する「美」意識が一般的であったことがわかる。

このように眉が「美」の象徴であるという古代中国の「美」意識が日本に伝えられという文献的根拠を挙げて置く。

『詩経』
衛風　碩人
「手如柔荑、膚如凝脂、領如蝤蠐。齒如瓠犀、螓首蛾眉、巧笑倩兮、美目盼兮」[8]。

手は柔かき荑（つばな）の如く、膚は凝りたる脂の如し、領（うなじ）は蝤蠐（すくもむし）の如く、歯は瓠犀（ふくべ）の如し。螓首蛾眉、巧笑倩たり、美目盼たり。

（その手は柔かき荑（つばな）の如く、膚は凝りし脂の如し、領（うなじ）は白き蝤蠐（すくもむし）・瓠（ふくべ）の子のような歯並びのよさ、広く整った首（ひたい）に蛾の眉毛、にこやかに笑う口もとの美しさ、美しい目もとのすずやかさ）[9]。

即ち、「膚は白くつやつやとし、・・・額は方形で広くて色が白く、眉は長い弧を画く蛾眉であり、笑顔は口もとに愛嬌があり、まなざしも落ち着きのある」ことが美人の要素とされた。

ここにも眉の美がみえる。村澤氏は唐の玄宗黄帝が画工に『十眉図』を作らせたが[10]、現在確認することが難しいが、しかし、眉に対する美意識は無視できない（『美人進化論』東京書籍、19-22頁）」という。つまり、眉の形成には気血が関与することから、美しい眉の状態が健康的な肉体を映し出し、美貌を表す形容詞でもあった。したがって『霊枢』陰陽二十五人篇の文脈には、「美」を形成する要件の一つに、正常な「気」と「血」の活動が体内に宿しているという「美」意識の象徴が随所にみえ、経絡との繋がりについても医書にも記されているので気血と経脈を創出される「美」について分析した。

『黄帝内経霊枢経』巻第五

経脈第十

「手少陰気**絶**、則脉不通。少陰者、心脉也。心者、脉之合也。脉不通、則血不流。血不流、則髦色不澤」[11]。

手の少陰の気**絶**すれば、則ち脉通ぜず。少陰なる者は、心脉なり。心なる者は、脉の合なり。脉通ぜざれば、則ち血流れず。血流れざれば、則ち髦色澤（ぼううるお）わず。

（手の少陰心経の脈気がつきると、脈道が通じなくなる。手の少陰心経は心蔵の経脈である。心と血脈は相互に配合している。もし脈道が通じなくなると、血がなめらかに巡らない。血がなめらかに巡らなければ、顔色が潤沢でなくなる。だから顔色が薄黒く光沢がなくなるのは、それは血脈がまず枯渇した徴候なのである）[12]

「足太陰気**絶**者、則脉不榮肌肉。唇舌者、肌肉之本也。脉不榮、則肌肉**軟**。肌肉**軟**、則舌萎、人中滿。人中滿、則唇反。唇反者、肉先死」[13]。

足の太陰の気**絶**する者は、則ち脉、肌肉を榮（やしな）わず。唇舌なる者は、肌肉の本なり。脉榮わざれば、則ち肌肉軟かし。肌肉軟かければ、則ち舌萎え、人中滿つ。人中滿つれば、則ち唇反る。唇反る者は、肉先ず死す。

（足の太陰脾経の脈気がつきると、経脈は水穀の精微を輸送配布して肌肉を栄養することができない。唇舌は、肌肉の本である。経脈が栄養を輸送配布することができないと、肌肉が軟らかくなってしまう。肌肉が軟らかくなってしまうと舌体は萎縮し、人中部に腫満すると、唇が外に反り返るのは、肌肉がまず衰え萎縮した徴候である）[14]

ここに記載されたことから鑑みることは、経絡が全身の肌膚に気力と血色を与えることで、肌膚の潤いや美しいし肌を形成する。そこには気血の有無が形体に与える影響と、その血気を養い調えることの基本が描かれている。当然、『黄帝内経』は美容の文献ではない。むしろ養性による健康の促進が軸足となっていることはいうまでもない。しかし、不老長寿による若返りの法則が『黄帝内経』において同じ土俵の上に位置していることには興味深い。それら養性観の中心部を貫通する思想こそが「真人」であり、『黄帝内経』に所収の上古天真論には、養性を軸足に置いた、若返りによる健康についての考え方が載る。注目すべきは「天真」の二文字に『黄帝内経』の真意があることである。

「天真」という用語が上古天真論篇のみに収められているだけではなく、陰陽應象大論篇、六節藏象論篇、異法方宜論篇、平人気象論、三部九**候**論篇、奇病論篇、天元紀大論篇、六元正紀大論篇、至真要大論篇、疏五過論篇、陰陽類論篇の注釈文に繰り返し用いられていることだ。

唐代の医家、孫思邈も『千金要方』や『千金翼方』、『銀解精微』にも「天真」という用語がみえ、さらに外丹養性書である陶弘景著『真誥』にも「真」の一文字が使われ、不老長寿を会得した者のみが知り得る永遠普遍の若返りの法則がある。つまり、「真」は、宇宙と自然界を指す「天」の法則と、身体に宿す「真」との共生による養性が主になることを論じ、不老長寿の肉体と、若さと美しさを保つ能力を手に入れることを『黄帝内経』でも主張されている。

『重広補注黄帝内経素問』巻第一

上古天真論第一

「恬惔虚无、真気従之、精神内守、病安従來」[15]

恬惔虚無なれば、真気之に従い、精神内に守る、病安んぞ従い来らんや。

（心がけは安らかで静かであるべきで、貪欲であったり、妄想したりしてはならない。そうすれば真気が調和し、精神もまた内を守ってすりへり散じることはない）[16]。

ここには「恬惔虚无」と言う『老子』の思想が、底

辺で医書『黄帝内経』と結びついていることがわかる。

2．六朝時代にみる「美」への考察

六朝時代の民衆の風俗習慣を色濃く描き出した『世説新語』には[17]、当時の美貌や容貌についての大衆の考え方が詳細に網羅されている。興味深いことに『世説新語』の特色が、荀子以来からの相貌や品評より、人の禍福や命運をみる習慣があり、劉邵の『人物志』[18]や劉義慶の『世説新語』、また、曽国藩の『挺経』は[19]、人物評価のための品評書とされ、そこにみる人物像は容、声、色、神、儀の方向から詳細な論述が行われていることである[20]。つまり、才能や情感を重んじ、思想哲学を崇め、容貌（容姿や美貌）などの各方向より、それぞれの人間像を観察している[21]。それらを証明するものに今村与志雄訳、魯迅『中国小説史略』がある[22]。ここには漢代末期の知識人が、特に人物の品評を重要だと認めていた為か、名声の成否は、断片的な評価により定めたとある[23]。とりわけ容貌に対する「美」意識については『世説新語』巻五の容止第十四に当時の「美」意識がみえる[24]。ここにみる容貌や風采の話しを鑑みても、六朝時代には男女の容貌が重んじられていたことがわかる。

その様子を物語る文脈がある。

「何平叔美姿儀、面至白。魏明帝疑其傅粉、正夏月、與熱湯餅。既噉。大汗出。以朱衣自拭。色轉皎然)」[25]

何平叔、姿儀美しく。面至って白し。魏の明帝、其の粉を傅くるかを疑ひ、正に夏月、熱湯餅を與ふ。大いに汗出で、朱衣を以て自ら拭ふに。色轉た皎然たり。

（何平叔（何晏）は姿うるわしく、顔はきわめて色が白かった。魏の明帝は、彼が白粉を付けているのではないかと疑い、真夏の日に、熱いうどんを食べさせた。何平叔は食べ終わると大汗をかき、朱衣で拭うと顔の色はいよいよ白く輝いた）[26]。

このことからも六朝時代の男性は、白粉を塗布していたことがわかる[27]。

丹波康頼（912-995）が、当時、203文献を基礎として篇纂した日本最古の医学書である『医心方』には、美白についての方法が載る[28]。たとえば「顔だけではなく身体をも同時に色白にする方法」や「ふくよかで色白の肌にする方法」等々がみえる。即ち、「色の白いは七難を隠す」ということばがあるように、古代より白い肌は美人の条件となっていた。

村澤氏は「白い肌を尊ぶ考え方はおそらく古代に中国大陸から伝わったもので、『日本書紀』の持統天皇六年（692年）に元興寺の僧侶である観成が中国の文献を基本にして鉛白粉を作り、当時の持統天皇から褒美を賜ったという史伝より考えても、唐代の風俗にならって白粉を塗る化粧法が日本でも流行していたことがわかる」[29]。この肌の白さが「美」の象徴とされている。つまり、これは男性の美醜について当時の価値観を現したものである。

日本でも、1686年に儒医の黒川道祐[30]が『雍州府志』という地誌をまとめている[31]。そこには天皇が男色を好み、寵愛する少年に化粧をさせたことから、貴族もそれに習って化粧をしたという記録が残る[32]。

しかし、女性における「美」については、肌の白さより、むしろ「徳」が女性に求められている。

『世説新語』

賢姫、第十九

「王司徒婦、鍾氏女、太傅曽孫。亦有俊才女徳」[33]。

王司徒の婦は、鍾氏の女にして、太傅の曽孫なり。亦俊才女徳有り。

（王司徒の妻は鍾氏の娘、太傅の曽孫であり、やはりすぐれた才と婦人の徳とそなえていた）[34]。

ここに載る俊才とは、傑出した才知のことで、女子の本来の美しさが、その人間的な聡明さや懸命さ、つまり「徳」に美の象徴があったという。

おそらく六朝期における、客観的な「美」の象徴には男女により異なった価値観があり、人間の内面に潜む本質的な「美」と、装飾などで飾れる外見上の「美」が異なっていた。そしてこれら内と外の関係性は、古代の中国文献に共通してみられる特徴でもある。興味深いことに『周礼』巻七、天官の冢宰治官之職に、古来より、婦人が備えるべき四つの徳として、婦徳、婦言、婦容、婦功（機織りなどの手仕事）を挙げている。これらは先人が重要とされる、「美」を求める女性たちの思想、才能、情感、知性に対する価値観を導き出すためのものである。日本にも自然のままの健康美、そして顔は心の反映だとする、すなわち精神美が山崎清『人間の顔』（読売新聞社、1955）によって提唱されている。

ここで「美」と象徴と関係する「色」についての語義を分析して置く。

中村元著『広説佛教語大辞典』（東京書籍、2010年）の「色」では、「色」のサンスクリットの原語をルーパとよび、これは色を意味するヴァルナとは区別されおり、「すがた・かたち・ありさま」などを意味する。「色」という文字は、一説では「人」と節の古い字体「卩」が合わさって構成されたものとされている。これは、人の心が顔色に符節して現れてくることから顔色を表しているとされ、それが現在、さまざまな色彩や姿・形という意味となったのであるという。

３．中国哲学と「美」の関係を明らかにする

中国古来よりの伝統美学の一部には「文質」「神韻」「中和」の「美」意識を枢軸として成り立っていることは、中国伝統医学においても欠かすことのできない美容の概念である[35]。そこで先人らのもつ哲学の中での「美」意識について考察を加えたい。

①文質の美

文質観については『論語』雍也、『韓非子』解老、『淮南子』本経訓、『説苑』修文、『太玄』などにみられ、文質についての概念は、先ずは『論語』に現れる。

『論語』雍也第六

「質勝文、則野。文勝質、則史。文質彬彬、然後君子」。

質[36]、文[37]に勝てば、則ち野。文、質に勝てば、則ち史[38]。文質彬彬[39]として、然る後に君子たり。

（人の実質さが文化的要素に過ぎた者はすなわち野（田舎びた者）であり、文飾、教養が、人の実質さより過ぎた者はすなわち史（物知りたが誠実さの欠けた者）である。人の実質と文飾、教養とが、みごとに調和したところが本当の君子である）[40]。

この文脈に対して加地伸行氏は次のような現代語訳を加えている[41]。「中身（内容・本音）が外見（形式・建て前）を越えると、むき出しで野卑。外見が中身以上であると。定型的で無味乾燥。内容と形式とがほどよくともに備わって、そうしてはじめて教養人である」と解釈している。孔子の文質彬彬の本義とは、「質」が人間の内面に存在する品徳の修養（善）であり[42]、「文」が外在にみる形（美）などを現し、これら「善」と「美」の結合を目指している。歴代の劉向、劉勰、王充なども「美」を「善」の角度から論じた文質観がある[43]。

また、古代道家哲学者である李栄の文質観は、儒家の考えよりさらに一歩踏み込んだ「美」に対する概念がみられる。彼は「質」の本質が「華」（儒家）を去らして「実」（道家）を求めることにあるという。

此処にみる「華」とは形や形式のことであり、「実」とは内容や本質のことを指す。つまり、「華」を求めるのではなく「実」を尊重する重要性を道家側では説く。さらに「質、真也」と[44]、「真」が「質」と通じて「美」を構築されるという。もし「質」が「真」とするならば、前掲した『黄帝内経』上古天真論などに見られる天真の「真」には「質」と通じ、「道」を究める道家思想と関係する[45]。

即ち、「大潔白之人」[46]とする李栄の質観は本来『論語』にみられる儒家哲学の概念より、より深く考察したものである。但し、李栄は儒家が唱える「質（仁）」は「華」にしかならず、未だ道家の「実（道徳）[47]」に達していないと言う。故に質（仁）の「華」を去らして徳（道）の「実」を得ることを提起している。つまり、李栄は「実」（道）を重んじて「華」（儒）を軽んじ、「華」を去らして「実」を取る。これが道家の立場を主張する李栄思想の核心であるとする[48]。

劉熙載著『藝概』では「孤質非文」の文を上げて、「質」は必ず「文」を用いて表現し、「質」と「文」のいずれに偏ってもならないとしている[49]。「質美」の効果は長い年月の積み重ねにより築かれるために、その効果は長く続くが、反対に「文美」の効果は一時的な装飾などで終わるために短命である。「質」を軸足とした「文」との結合により、長い美しさが保つことが出来るのである。

『抱朴子』外篇

刺驕

「求之以貌、責之以妍俗人、徒睹其外形之粗簡、不能察其精神之淵邈」[50]。

（之を求むるに貌を以ってし、之れを責むるに妍を以てす。俗人徒に其の外形の粗簡を睹、其の精神の淵邈を察する能わず）[51]。

外形の粗さに懸けても、内面（精神）より発露した容貌と比べることができないと、いくら着飾って、美しく装飾を加えても人間に内在する本質的なものは隠すことができないというのだ。ここには「美」に対する本質的な概念、即ち内面の「実美」が輝きを放つのである。

②神韻の美

『説文解字注』には、神についての記載があるので挙げて置く。

「天神、引出萬物者也」。

天神とは才識や品徳、精神などを指すとある（上海古籍出版社、1988年）。

つまり、才識や品徳を外部へと引き出す源泉がここにある。

潘顕一氏は葛洪の美学には「玄」、「一」、「徳」の概念が、『抱朴子』内篇「勤求」の大徳曰生の観点から来ると言う。これは老荘思想の道→美の思想の発展を意味し、道→美の概念が哲学へと転化した現れである。よって「道」は「玄」[52]を生じさせ、「玄」は「一」によって操作され、「美」を生む[53]。「玄」は宇宙萬物に対する呼び名である。また、「徳」は「生」、「生」即ち「美」は生命に対する呼び名であることを指摘する[54]。ここに葛洪の言う大徳、即ち、生美観があり、意識の上でも体験できる感覚としている。次に「韻」は『広雅』では韻、和也と和諧（調和）を現し、美しい音色の美的感覚を表現している。「神」の働きが「形（形体）」に与える作用は大きく、張景岳の『類経』針刺類にも無神則形不可活（神、無くんば則ち形、活ならざる）とある。

また、『荘子』の文脈を用いた同文が医書『類経』巻一にも載る。

『荘子注』巻五

天地第十二

「執道者徳全、徳全者形全、形全者神全、神全者聖人之道也」[55]。

道を執る者は徳全く、徳全き者は形全く、形全き者は神全し。神全き者は聖人の道なり。

（道を守るものは徳が完全だし、徳の完全なものは形体が完全だし、形体の完全なものは精神が完全である。精神が完全なのが聖人の道である）[56]。

ここで『荘子』は形神を兼ね備えた者を「聖人の徳」と表現していることから、『荘子』は人の精神が外見の容貌美となって現れ、人格美を形成する。すなわち中医美容に求められる「神形倶美」の概念にあたる。興味深いことに類似した考え方が山崎清氏によって述べられている。それは化粧という行為が、健康な身体と心の教養美が基盤とし併存し、単純に化粧に用いる顔料や装飾品、また、身体における加工方法の奇抜さに人々が引きつけられるのではないと言及し、化粧に対する意義について五段階に分類している[57]。氏の言う第五段階は一般的に考える化粧とは異なり、身体に施すものではなく、個人の内面を加工し、加工された心の影響があらわれた顔を意味していると言う。

③中和の美

『周礼』「天官」と「春官」で「和」に対する記述がある。鄭玄[58]の注釈には「和、不剛不柔」、「和、剛柔適也」と「和」は剛と柔のバランスが整ったものだとする。また、「和」の字源は2つあるという。

1つは「盉（か）」で飲食の調和を示し[59]、もう一つは「龢」で音楽の和諧を指す。すなわち飲食の調和と音楽の協和には共通点があるということがわかる。そのことは『国語』にもある。

『国語』鄭語

「是以和五味以調口[60]、剛四支以衛體、和六律以聰耳、正七體以役心・・・」[61]。

是を以て五味を和して以て口を調へ、四支を剛くして以て体を衛り、六律を和して耳を聰にす、七体を正して以て心を役み・・・。

（五つの味を調和させて口を整え、四肢を強くして身体を守り、六律を調和させて耳を聡くし、目耳口鼻の七体を正して心を営み・・・）[62]。

医書にも五味と六律が陰陽や十二経脈との関係を述べている。

『黄帝内経霊枢経』巻第六

経別第十一

「余聞人之合於天道也、內有五藏、以應五音、五色、五時、五味、五位也。外有六府、以応六律、六律建陰陽諸経、而合之十二月、十二辰、十二節、十二経水、十二時、十二経脈者」。

余聞く、人の天道に合するや、内に五蔵あり、以て五音、五色、五時五味、五位に応ずるなり。外に六府あり、以て六律に応じ、六律は陰陽の諸経を建てて、十二月、十二辰、十二節、十二経水、十二時、十二経脈に合する者なり[63]。

（私は以下のようなことを聞いたことがある。人体と自然は相応しており、人体の陰に属する五蔵は、五音、五色、五時、五味、五位に相応している。陽に属

する六府は、六律に相応しており、六律は六陰と六陽に分けられるので、人体の十二経に合致し、十二月、十二辰、十二節、十二経水、十二時、十二経脈に相応している）[64]。

後世では儒家における中庸の哲学観が加わる。

『中庸』
「中也者、天下之大本也。和也者、天下之達道也。致中和、天地位焉、萬物育焉」[65]。
中なる者は、天下の大本なり。和なる者は、天下の達道なり。中和を致して、天地位し、萬物育す。
（中こそは、天下（が秩序正しく治まるため）の大根本である。和こそは天下（に）あまねく（実現すべき）道である。（このようにして）中と和とを実現しつくせば、（人間世界ばかりでなく）全宇宙の秩序が、いささかのくるいもなくなり、ありとあらゆるものが、その生長をとげて（全宇宙が繁栄する）のである）[66]。

つまり、天下の萬物の均衡を調節する機能が「中和」という哲理である。

『荀子』修身
「治気養心之術。血気剛強、則柔之以調和」。
治気養心の術。血気剛強なれば、則ち之を柔ぐるに調和を以てし・・・。
（気を治め心を養う道。若し血気盛んで硬く強きに過ぎる人があれば、調った温和な気をもって柔らげて行かねばならず・・・）[67]。

前漢の儒学者、董仲舒はそこに中和を加え、「中和」が精神身体を養い寿命を延ばすことができるという。

『春秋繁露』巻十六
循天之道　第七十七
「能以中和養其身者、其寿極命」[68]。
能く中和を以て其の身を養う者は、其の寿命極むる。

竹林の七賢と称された嵇康も「和」に精通した考え方を明らかにしている。

『嵇中散集』巻三
養生論一首
「守之以一養之以和」
之を守るに一を以てし、之を養うに和を以てす。

これらの概念は医書にもみえる。

『重広補注黄帝内経素問』巻第二十二
至真要大論篇　第七十四
「必先五勝、疏其血気、令其調達、而致和平」[69]。
必ず五勝を先にし、その血気を疏し、それをして調達せしめ和平を致す。
（最初に先ず五気の中のどの気が勝気となっているのかを分析し、その後、血気を疏通させ、気が順調に循環するようにして、気の調和した状態に至らせるのである）[70]。

即ち、最初にまず五気の中の気が勝気となっているかを分析し、その後、血気を疏通させて、気が順調に循環するよう促し、気の調和、すなわち「和平」にした状態で、気を身体の四肢百骸に至らせるという考え方が、中国伝統医療文化における「美」を創出させるための基本である。

Ⅳ　結　論

鍼灸に求められる「美」には基準がなく、相手が変われば「美」は無限に存在し、個々の価値観によって「美」のモノサシは創出される。「美」は時代によって移り変わり、そこには女性たちの生き方が色濃く反映している。つまり、女性の生き方が変わると、「美」の基準も変わらざるを終えない。そしてこれらの背景には、中国伝統文化にみる先人らの「美」に対する卓越的な考え方がみえる。これらを踏まえて筆者は古代中国の文学、哲学観より書誌学的に、伝統的な美学を通じて考察を行った。その結果、底流に脈打つ思想には、中医学で言う人間の精神と大自然の営みとの中にある「気」[71]（生命力）と「徳」[47]（精神魂魄）の共生を主とした、「内なる宇宙との結合」にあると考える。このことが内面の変化を外面の美しさを表出させ、「人間の完全な内実」[72]による若々しい健康的な肉体を作り上げ、さらに個性や自我の発見より、美しい心身の容貌へとつながることが『論語』『荘子』『淮南子』『黄帝内経』『世説新語』等々の哲学、文学からの諸文献を通じて示唆された。故に、今後、鍼灸の美容教育でも、これら本質的な身体観への洞察力をもつ施術者の育成が、より深き伝統医学的な鍼灸美容の理論体系の構築へと還元できると考えられる。

文献・注釈

1）王財源、大形徹「鍼灸美容にみえる《美》意識についての考察――中国哲学を基盤とした《美》――」全日本鍼灸学会雑誌、Vol.63, No.2, 2013年123-131頁。
2）日本内経医学会、明刊無名氏本『新刊黄帝内経霊枢』（内藤湖南旧蔵）『霊枢』2006年79頁、18-6下。
3）石田秀実、白杉悦雄監訳『現代語訳・黄帝内経霊枢』（下）、東洋学術出版社、2007年、252-253頁。
4）日本内経医学会、明刊無名氏本『新刊黄帝内経霊枢』（内藤湖南旧蔵）『霊枢』2006年79頁、18-6下。
5）前出。『現代語訳・黄帝内経霊枢』（下）、255-257頁。
6）倉野憲司（校注）『古事記』岩波書店、1963年、142頁。
7）佐々木信綱（篇）『万葉集』上、岩波書店、1927年、240頁。
8）李学勤主篇『十三経注疎・毛詩正義』北京大学出版社、1999年、221-224頁。
9）石川忠久著、新釈漢文大系第110巻『詩経』（上）明治書院、1997年、159-160頁。
10）鴛鴦眉、小山眉、五岳眉、三峰眉、垂珠眉、月稜眉、分梢眉、涵烟眉、払雲眉、倒暈眉をいう。紀元前3000年には「一本眉」の婦人坐像がマリ（アフリカ）で出土され、眉が「美」の象徴であったことがわかる。古代ギリシアでは鼻の上で接近した眉を好んだ。現在では、中央アジアや中近東で、ウスマという植物の葉っぱから抽出した汁で左右の眉を一本につなげた化粧法が行われ、日本ではアイヌの人たちの間で存在していた。村澤博人著『美人進化論』東京書籍、東京、1987年、63-67頁。また、『詩経』の中に美人の象徴とされる螓首蛾眉が記され、螓首蛾眉（しんしゅうがび）の意味には、セミのような昆虫である螓の四角く広い額を指し、蛾眉は三日月形の眉を意味して螓首と呼ばれていた。しかし、日本において蛾眉と明確に記述される文献は、嵯峨天皇の勅命により篇纂された勅撰漢詩集『文華秀麗集』などにあり、多くは確認できないという。平松隆円著『化粧にみる日本文化』水曜社、2009年、94頁。
11）前出。『新刊黄帝内経霊枢』（内藤湖南旧蔵）、26頁、5-8下。
12）前出。『現代語訳・黄帝内経霊枢』（上）、234-235頁。
13）前出。『新刊黄帝内経霊枢』（内藤湖南旧蔵）、26頁、5-8下。
14）前出。『現代語訳・黄帝内経霊枢』（上）、235-236頁。
15）『正統道藏』洞真部、衆術類に所収の馬承禎撰「修眞精義雜論」愼忌論に同文が載る。
16）前出。『現代語訳・黄帝内経素問』（上）、32頁。
17）六朝宋代の臨川王、劉義慶（403-444）に『世説』八巻があり、それに梁の劉孝標がこれに注記を加えて十巻としたことが『隋志』に見える。また、1929年、日本人前田家尊経閣蔵北宋本の影印本『世説新語』三巻坿『世説序録』二巻が出、1956年5月。北京の文学古籍刊行社から、この北宋本影印本を用いて影印し、校勘記（王利器）をつけ、『唐写本世説新書残巻』を附印した『世説新語』が刊行された。今村与志雄訳、魯迅『中国小説史略』ちくま書房、1997年、378-379頁。
18）秦云侠訳『人物志』武漢出版社、2009年参照。
19）宋学海主篇、曾国藩著『挺経』雲南人民出版社、2011年参照。
20）潘顕一、李裴、申喜萍著『道教美学思想史研究』商務印書館、2010年、544-545頁。
21）李沢厚、劉綱紀『中国美学史』魏晋南北朝篇、安徽文芸出版社、1999年、56-100頁。また、『墨子』「魯問」には人物評価法として、個々の人物における具体的な行動を基準とするか、主観的な意志を基準とするのかを説いている。和田武司訳『墨子』徳間書店、1982年、294-295頁。
22）前出。魯迅『中国小説史略』110頁。
23）今村の注では原文を「品目」とする。品は等級で官吏の等級のこと、目は品題のこと。つまり、人物を評価して、その高下を定めるとある。
24）竹田晃、黒田真美子篇著『世説新語』明治書院、2006年、706頁には「容止」が威儀ある正しい姿や振る舞いという意味を持っていると考えるという。
25）蔣凡、李笑野、白振奎評注『全評新注世説新語』人民衛生出版社、2009年、729頁。
26）前出。『世説新語』706頁。
27）七世紀末には鉛からできた鉛白粉が日本に存在し、平安初期の制度を記録した『延喜式』（927）には「白粉」「胡粉」と記され、原料には鉛以外にもコメや粟などの穀物が用いられていた。十六世紀初頭に成立した『七十一番職人歌合』などに白粉売りや水銀掘りがみられることから、一説には白粉としての登場は室町時代以降とされる。前出。『美人進化論』32頁。
28）槇佐知子訳、丹波康頼著『医心方』巻四、「美容篇」、筑摩書房、1997年を参照。「眉の脱毛を治療して生やす方法」が89-94頁に載る。
29）江戸時代の初期に日本に伝わった中国の技術百科全書である宗応星著『天工開物』には白粉の製造法が載る。村澤氏は塩基性炭酸鉛を試薬として作り出して用いたという。前出。『美人進化論』32-34頁。また、1890年2月、順天堂医事研究会佐藤進会長は、慢性鉛中毒に似た症状が歌舞伎役者に多かった事実に触れ、その主たる原因が舞台で使用する白粉にあるのではないかと、「おしろいノ中毒症状二就テ」という研究発表が行われている。その後、無鉛白粉の開発と製造が試みたと言う。前出。『化粧にみる日本文化』149-152頁。
30）安芸国の医者で、京都の儒学者林羅山に学び、1686年に山城国についての最初の総合的・組織的な地誌を刊行した。そこには風俗行事や地理、また、遺跡や陵墓などについて記されている。立川美彦篇『訓読・雍州府志』臨川書店、1997年。
31）中国古代の首都である長安を含む州のことを「雍州」と言い、京都を含む山城国の雅称。
32）前出。『化粧にみる日本文化』97-98頁。
33）蔣凡、李笑野、白振奎評注『全評新注世説新語』人民文学出版社、2009年、829-830頁に載る。また、同篇では、婦人における四つの徳についての記述がある。「婦有四

徳、卿有其幾（婦に四徳有り、卿は其の幾ばく有りや）」。此処に載る四徳とは『周礼』巻七の徳・言・容・功の4つを指す。前出。『世説新語』241-256頁。

34）目加田誠、三樹彰、田中忠『世説新語』（下）新釈漢文大系78、明治書院、1978年、860頁。

35）呉景東著『中医美容技術』科学出版社、2006年、114-119頁。ここでは「中和」とし、さらに「心物」が載るが、筆者は「心物」を「文質」と「神韻」に合わせ含めた考察を行う。

36）実質、本質、素質のような内実のこと。

37）文様、文飾、天文のように外観のこと。北京大学哲学系美学教研室『中国美学資料選篇』、中華書局、1980年、14-15頁。

38）記録や文章などの長いもの、金谷治訳注の『論語』岩波書店、東京、2000年、117頁の「史」についての解釈は、「朝廷の文書をつかさどる役人で、典故に通じて文章の外面的な修飾をつとめる」とある。

39）違うものがほどよく混じり合う様子。

40）吉田賢抗、三樹彰、春山宇平著『論語』新釈漢文大系1、明治書院、1983年、139頁。

41）『論語』（株）講談社、2004年、134-135頁。

42）清代の康熙黄帝、愛新覚羅・玄燁撰『庭訓格言』中州古籍出版社、2010年、17-23頁には品性の修養について載る。

43）前出。『中国美学資料選篇』には劉向、劉勰、王充らの美学がみえる。劉向の文質観は111-112頁。劉勰は193頁。王充は119-125頁。また、遠藤哲夫、市川安司、山本敏夫『荘子』新釈漢文大系8、明治書院、2008年、63頁「偃武」第三十一に載る「勝而不美」の語釈で、『説文』を取り上げ「美と善とは同意なり」と載る。

44）陸国強篇『道蔵』第13冊、道徳真経玄徳纂疏巻十二、質眞若渝、文物出版社、上海書店、天津古籍出版社、1988年、455頁。

45）前出。『道教美学思想史研究』214-215頁。

46）陸国強篇『道蔵』第13冊、道徳真経玄徳纂疏巻十二、大白若辱、文物出版社、上海書店、天津古籍出版社、1988年、455頁。

47）陳景元は質が徳と相関関係で成り立っているという。前掲。『道教美学思想史研究』392頁。

48）「道徳者、道之実也、仁義者、道之華也。先知仁義者、識華不識実也（道徳の者は、道の実なり、仁義の者、道の華なり。先に仁義を知る者、華を識し実を識せずなり）「道徳真経玄徳纂疏」、前出。『道蔵』第13冊、447頁。

49）劉熙載著『藝概』上海古籍出版社、1978年、2頁。また、彭慶星主篇『美容中医学』科学出版社、1999年、74頁には「文質の美」を①重文勝質②重質勝文③文質併重の三種類に分け『淮南子』『韓非子』などの文献を上げ、中でも清の劉熙載著『芸概』では「孤質非文」の文言より、「質」は必ず「文」を用いて表現し、いずれに偏ってもならないことを指摘している。

50）楊明照撰、新篇諸子集成『抱朴子外篇校釈』中華書局、1985年。

51）本田濟著『抱朴子外篇1』平凡社、2002年、247-248頁。

52）『広雅』釈詁三には玄、道也。とある。また、「玄」と「美」がつながっていることが『大漢和辞典』より読み取れる。『大漢和辞典』の「玄部」で、妙は『玉篇』玄部でも妙で、今の妙を作るとある（『大漢和辞典』7巻 777頁）。『広韻』で妙は好也、好をうつくしい、みめよいと読む（『大漢和辞典』3巻 627頁）。『説文』で好、媄也。『説文』媄、色好也とある。媄をみめよい、うつくしいと読む（『大漢和辞典』3巻 733頁）。

53）饒宗頤氏（中国国務院国家古籍整理委員会顧問）は、古代中国では「美」は「徳」と等しいものであるという。饒宗頤ほか『文化と芸術の旅路』潮出版社、2009年、236頁。

54）潘顕一著「南桔北積、道能為一」所収の『社会科学研究』四川省社会科学院、2001年、第五期、70-75頁。

55）郭象注『荘子注』巻五、天地第十二、台北国立故宮博物院所蔵本『文淵閣四庫全書』1056冊、子部、道家類、驪江出版社、1988年、66頁、上段。

56）遠藤哲夫、市川安司、山本敏夫『荘子』新釈漢文大系8、明治書院、2008年、384頁。

57）前出。『化粧にみる日本文化』50-52頁。山崎清『人間の顔』読売新聞社、1955年、162頁。

58）127-200年、後漢の訓詁学者。

59）『重広補注黄帝内経素問』巻第十一、生気通天論篇第三「是故謹和五味、骨正筋柔、気血以流、湊理以密。如是則骨気以精。謹道如法、長有天命（是の故に謹みて五味以て流れ、腠理以て密 なり。是の如くんば、長く天命をたもたん）」。前出。『現代語訳・黄帝内経素問』78頁。

60）五味と身体との相関性については『重広補注黄帝内経素問』巻第三、靈蘭秘典論篇第八にもみえる。「脾胃者、倉廩之官五味出焉（脾胃なる者は、倉廩の官、五味焉より出づ）」。南京中医薬大学中医系篇著『現代語訳・黄帝内経素問』東洋学術出版社、東京、2006年、161頁。五藏別論篇「五味入口、藏於胃、以養五藏気。気口亦太陰也（五味、口より入りて、胃に蔵され、以て五臓の気を養う。気口もまた太陰なり）」。前出。『現代語訳・黄帝内経素問』211頁。

61）韋昭注『国語』巻十六、鄭語、台北国立故宮博物院所蔵本『文淵閣四庫全書』406冊、史部、雑家類、驪江出版社、1988年、66頁、下段。

62）大野峻、三樹彰、田中忠『国語』（下）新釈漢文大系67、明治書院、1978年、666-667頁。

63）前出。『現代語訳・黄帝内経霊枢』（上）、261頁。

64）前出。『現代語訳・黄帝内経霊枢』259頁。

65）島田虔次『大学・中庸』朝日新聞、1970年178頁。焦竑篇撰『老子翼』巻五、巻六、『荘子翼』巻二、巻五にも中庸が載る。

66）赤塚忠、文入宗義、田中忠『大学・中庸』新釈漢文大系2、明治書院、1967年、204-205頁。

67）藤井専英、文入宗義、田中忠『荀子』（上）、新釈漢文大系5、明治書院、1966年、51-52頁。

68）董仲舒撰『春秋繁露』巻十六、循天之道第七十七、台北国立故宮博物院所蔵本『文淵閣四庫全書』181冊、経部、春秋類、驪江出版社、1988年、798頁、下段中央。『春秋繁露』については、偽書との疑問を抱かれたこともあり、古来よりあまり重視されてはこなかった。

69）日本内経医学会所蔵『素問』日本内経医学会、2004年、190頁、下段。

70）前出。『現代語訳・黄帝内経素問』（下）、454-457頁。

71）楊咏祁著《『藝概』論美学範疇「気」》が、徐林祥主篇『劉熙載美学思想研究論文集』、四川大学出版社、成都、1993年、95-107頁に所収。

72）柴田治三郎責任篇集・訳『世界の名著45・ブルクハルト』「人間の発見」中央公論社、1981年、350頁。また、同書55頁にはブルクハルトが描いたルネサンスの真髄が、個々の人間、個性、自我の発見にあるという。また、産業と技術の構造によって、個性が、人間が、無視されることについて言及している。

Original Research

Awareness of Beauty in Ancient China: An Examination of Acupuncture and Moxibustion Beauty Treatments

Zai gen OH [1)]

1）Faculty of Health Sciences in Kansai University of Health Sciences

Abstract

This paper uses ancient Chinese documents to examine the essential concepts of beauty surrounding beauty treatments that use traditional medicinal processes of acupuncture and moxibustion. Documents such as *The Analects, The Huainanzi, The Huangdi Neijing, and A New Account of the Tales of the World* espouse the view that people's mental and psychological aspects have a profound impact on the intrinsic beauty of their bodies. Therefore, these documents suggest that the concepts of acupuncture and moxibustion beauty treatments are based on the notion that the real beauty lies in the radiance of one's inner life. In other words, with the specific aim of keeping a balance between the mind and body, it is considered that the enhancement of one's inner aspects to eliminate ostentation brings about changes in the beauty of one's external features. The promotion of education on beauty treatments through acupuncture and moxibustion, including ideas and philosophies that have been handed down since ancient times as part of traditional Chinese medicine, will play a major role in building fundamental theories in the study of these beauty treatments in the future.

Key Word：traditional Chinese medicine, acupuncture and moxibustion, beauty culture

原　著

改訂版「五臓スコア（Five Viscera Score）」の妥当性

戸村　多郎

関西医療大学　保健医療学部 はり灸・スポーツトレーナー学科

要　旨

「五臓スコア（FVS）」は、エビデンスに基づく東洋医学的診断尺度である。先行研究で、一部の項目に識別力が低く、困難度が高いことが判明したため、その項目を削除した改訂版五臓スコア（FVSv2）を作成した。

本研究では、FVSv2の妥当性を検討するため、FVSv2とFVSとの関連性を確認し、さらに、FVSv2が健康を評価できるのか、外的基準（SF-36）を用いて確認した。

FVSv2は、性差についてFVS、SF-36と同様の評価ができた。FVSv2は、FVSの全ての下位尺度と相関係数0.95以上の非常に強い関連があり、FVSと比べ下位尺度間の分離性が高まった。さらに、対象者を健康群と低健康群に分けて比較したところ、FVSv2はFVSよりその差が明確で、SF-36の結果もFVSv2を支持していた。

以上から、FVSv2の妥当性は、FVSと同等以上であることが明らかになった。FVSv2は、精度を下げずに回答者の負担を軽減し、臨床に導入しやすくなった。

1．はじめに

現在、鍼施術は東アジアを中心に世界で実施され、補完代替医療（Complementary and Alternative Medicine: CAM）として認知されている[1)]。

鍼施術では、一人の患者や同じ疾患の患者に対し、施術者の間で評価や経穴や刺激方法が異なることがしばしばある[1, 2, 3)]。

研究者たちは、鍼の有効性を検討するため、特定の疾患を対象とした介入研究を実施しているが、前述の理由で同じ疾患でも介入する経穴や刺激方法が異なるため、検討の中心が専ら施術効果となっている[4, 5, 6)]。

だが、その施術効果は、不均質な介入方法に影響を受けている可能性がある。この原因の1つに、Traditional Chinese Medicine（TCM）にはエビデンスに基づく評価方法が少ないことが考えられる。

これまで我々は、過去2000年間に記された主要なTCM文献から抽出した症状を統計学的に選別し、東洋医学的診断尺度「五蔵スコア（The Five Viscera Score: FVS）」を開発してきた[7, 8)]。

尺度の開発や妥当性の検討は、クロンバックのα係数などを代表とするClassical Test Theory（CTT）と、尺度を開発した母集団からの影響を除いて検討するItem Response Theory（IRT）の両方で検討する方が有効性が高いことから[9, 10)]、我々はFVSをCTTとIRTの両方で検討し、FVSの妥当性を示してきた[11, 12)]。

その結果、FVS項目の一部で答えにくいなどの問題が明らかになり[12)]、さらに、臨床研究や一般化に向けて回答者の負担軽減を考慮し、項目数を減らす必要性があった。

そこで、先行研究を参考に、FVS作成時の因子分析において各下位尺度内で因子負荷量が最も低い項目[8)]、IRTにおいて各下位尺度の中で症状の有無を弁別する識別力が低く、答えにくさの困難度が高過ぎる項目[12)]を検討した。その結果、肝の「片頭痛がある」、心の「ため息をつく」、脾の「朝から力がでない」、肺の「しゃっくりが出る」、腎の「ナマけてすぐ横になる」といった項目を各下位尺度から削除し、全15項目の改訂版五臓スコア（便宜的にFVSv2とする）を作成した（図1）。

Liver

1	首（肩）がこる [I have a stiff neck]
2	首（肩）がつっぱる [I have a pulled muscle in my neck]
3	背中が痛む [I have a backache]

Heart

4	心配事が多い [I worry about many things]
5	よく悩む [I worry frequently]
6	気になる事があり何事も楽しめない [I have a lot on my mind and am not able to enjoy anything]

Spleen

7	疲れがとれない [I am fatigued and this is not alleviated by anything]
8	疲れて横になる [I have to lie down due to fatigue]
9	体が重い [My body feels heavy]

Lung

10	腹が鳴る [My stomach rumbles]
11	腹が空いて仕方ない [I feel hungry constantly]
12	鼻水が出る [I have a runny nose]

Kidney

13	ボンヤリする [I am absent minded]
14	元気がない [I am not energetic]
15	記憶力が低下する [My memory has deteriorated]

図1: 改訂した五臓スコア
図は、改訂後の五臓スコアで肝、心、脾、肺、腎の各下位尺度から1項目ずつ削除したものである。

しかし、FVSの20項目から単純に5項目を削除したとはいえ、FVSv2の妥当性は不明である。

そこで本研究では、FVSv2とFVSとの関連性を確認し、さらに、FVSv2が患者の健康に関連した評価ができるのか、外的基準として鍼施術の評価に適した健康関連QOL尺度（Medical Outcome Study Short-Form 36-Item Health Survey version 2: SF-36）[13] を使用した。本研究の仮説は、FVSv2がFVSと関連性があり、また、FVSと同等の評価が出来ることであった。

2．対象と方法

対象は、日本の大阪市にある高校卒業以上が入学できる、医療系専門学校の生徒291名および学校スタッフ30名の合計321名（男性208名、女性113名）である。無記名の質問紙を生徒に集団配布、学校スタッフに個別配布し調査の依頼をおこなった。

調査の実施は2011年5月下旬で、回収期間を2週間とした。

倫理的配慮

一連の研究は、関西医療学園専門学校と外部の評価委員で構成された倫理委員会で承認を得て実施した（H22-02, H23-08）。

調査対象者には、調査の目的について文章と口頭で説明し、同意した者のみ質問紙を回収箱に投函させた。

質問紙について

五臓スコア（FVS）

FVSは、過去1ヵ月間の体調について20項目に答える自己記入式質問紙[8] で、TCMで定められた五臓症状で構成される[7]。

対象者には20項目のFVSを実施した後、検討時に5項目を削除したFVSv2（15項目）と比較した。FVSv2とFVSのどちらも、Likert尺度の5件法で、選択肢は「全然ない（0点）」「まれに（1点）」「ときどき（2点）」「ほとんどいつも（3点）」「いつも（4点）」である。下位尺度得点は項目合計得点で、FVSv2は0点から12点、FVSは0点から16点をとり、値が高いほど症状が強い状態を表す。

SF-36

SF-36は、主観的な健康度と日常生活機能を評価する健康関連QOL尺度で、代替医療における質的評価でも頻繁に用いられている[14, 15]。

SF-36は、過去1ヵ月間の身体的および精神的な健康状態に関して36の質問項目に答える自己記入式質問紙で、その日本語版は十分な信頼性と妥当性が確認され標準化されている[13, 16]。

SF-36は、8つの下位尺度「身体機能（Physical functioning: PF）、日常役割機能（身体）（Role physical: RP）、体の痛み（Bodily pain: BP）、全体的健康感（General health: GH）、活力（Vitality: VT）、社会生活機能（Social functioning: SF）、日常役割機能（精神）（Role emotional: RE）、心の健康（Mental health: MH）」で構成される。その得点は日本人で標準化され、平均的な健康状態の者が50点である。得点が高いほど健康状態が優れていることを表す。

統計処理

統計処理において、Mann-Whitney U検定とSpearmanの順位相関係数の出力にはSPSSバージョン21（IBM社）を使用した。有意水準は5%とした。

3．結　果

質問紙には302名（94.1%）の回答があり、欠損値があった26名を除いた274名（85.4%）の男性175名、女性99名で検討した。対象者の特徴を表1に示す。

対象者の平均年齢（SD）は、男性28.6（7.8）、女性28.5（8.6）で、学歴は、男性37.1%、女性35.4%が短期大学卒業以上であった。表には示してないが、1週間に4日以上働いている者が、男性88.6%、女性70.7%であった。

表1　対象者の特徴

Socio-demographic characteristics		Male (n=175) n (%)	Female (n=99) n (%)
Age (y)			
	18-19	12 (6.86)	11 (11.11)
	20-29	98 (56.00)	53 (53.54)
	30-39	51 (29.14)	21 (21.21)
	40-49	11 (6.29)	13 (13.13)
	50 <	3 (1.71)	1 (1.01)
	mean (SD)	28.58 (7.80)	28.46 (8.56)
Education			
	Junior college or lower	109 (62.28)	63 (63.64)
	College or higher	65 (37.14)	35 (35.35)
	Unknown	1 (0.57)	1 (1.01)

FVSv2，FVS，SF-36の性差（表2）

FVSv2、FVSおよびSF-36それぞれに性差があるのか比較したところ、FVSv2、FVSの下位尺度の平均値は、FVSv2の肺以外で、女性が男性より高値で症状が強かった。有意に性差があった臓の平均（SD）は、FVSv2では、肝の男性5.38（3.04）に対し女性6.27（2.95）（p=0.018）、腎の男性4.49（2.54）に対し女性5.24（2.66）（p=0.035）で、FVSでは、肝の男性6.38（3.64）に対し女性7.40（3.44）（p=0.022）であった。

FVSv2は、FVSと比べ有意に性差がある臓が多かった。

また、SF-36の下位尺度の平均値（SD）は、女性が男性より全て低値であった。RPでは、男性の47.30（11.65）に対し女性が45.01（12.25）（p=0.040）、BPでは、49.25（10.04）に対し43.58（10.60）（p<0.001）、SFでは、48.83（11.35）に対し45.55（13.13）（p=0.031）、REでは、47.95（11.40）に対し43.68（13.08）（p=0.003）で、有意な差があった。SF-36でも有意に性差があり、FVSv2およびFVSの結果を支持していた。

表2　FVSv2とFVSおよびSF-36の性差

Scale name	Subscale	Male (n=175) mean	SD	Female (n=99) mean	SD	$p^{\dagger}$
FVS v2						
	Liver	5.38	3.04	6.27	2.95	0.018
	Heart	5.10	3.22	5.77	3.13	0.108
	Spleen	6.08	2.88	6.25	3.08	0.738
	Lung	4.30	2.26	4.27	2.27	0.934
	Kidney	4.49	2.54	5.24	2.66	0.035
FVS						
	Liver	6.38	3.64	7.40	3.44	0.022
	Heart	6.65	3.95	7.44	3.79	0.126
	Spleen	7.67	3.70	8.06	3.89	0.413
	Lung	5.07	2.63	5.11	2.58	0.822
	Kidney	6.07	3.28	6.97	3.31	0.051
SF-36						
	PF	51.91	8.47	51.43	7.71	0.150
	RP	47.30	11.65	45.01	12.25	0.040
	BP	49.25	10.04	43.58	10.60	0.000
	GH	50.16	11.22	49.73	10.62	0.807
	VT	44.03	10.28	41.38	11.15	0.065
	SF	48.83	11.35	45.55	13.13	0.031
	RE	47.95	11.40	43.68	13.08	0.003
	MH	44.98	10.60	41.95	11.56	0.054

†: Mann-Whitney U検定, PF: 身体機能; RP: 日常役割機能（身体）; BP: 体の痛み; GH: 全体的健康感; VT: 活力; SF: 社会生活機能; RE: 日常役割機能（精神）; MH: 心の健康.

FVSv2とFVSとの関係（表3）

FVSv2とFVSとの相関係数を関連の強さとして検討したところ、表には示していないが全体で肝0.97、心0.97、脾0.98、肺0.96、腎0.95と非常に高い関連を示した。

表3には、各尺度内での臓同士の関連を示した。尺度内での関連は、肝と腎以外の全てがFVSよりFVSv2が低値で、因子同士の分離性があった。よって、FVSv2はFVSと比べ臓ごとの特徴の差が強くなった。

表3　FVSv2とFVSの内部相関

	Liver	Heart	Spleen	Lung	Kidney
Liver	—	0.33	0.51	0.16	0.35
Heart	0.27 *	—	0.54	0.19	0.60
Spleen	0.48 *	0.48 *	—	0.23	0.64
Lung	0.13 *	0.17 *	0.20 *	—	0.29
Kidney	0.37	0.58 *	0.59 *	0.23 *	—

Spearmanの順位相関係数, 右上: FVS; 左下: FVSv2, * はFVSより関連性が低い項目である.

FVSv2およびFVSとSF-36との関係

FVSv2が、健康に関連する評価尺度として使用できるのか、SF36との相関を妥当性係数として表4に示した。また、参考にFVSとSF-36との関連も示した。

FVSv2で男女とも全ての下位尺度が、SF36の下位尺度のうち3項目以上と有意な相関があった。

特に心、脾、腎が、SF-36と多く関連がみられた。FVSv2では、男性の「心」と「MH」、女性の「心」お

よび「MH」、「脾」と「VT」が、相関係数0.60を超え、負の強い関連がみられた。

SF-36との相関係数では、FVSv2はFVSと比べて男性で低くなった項目と女性で高くなった項目があったが、いずれもその差は僅かであった。

しかし、SF-36との有意に関連がある項目数は、FVSv2はFVSと比べ男性では変わらず、女性で3項目増加した。よってFVSv2は、FVSと比べ健康関連評価に適していた。

表4　FVSv2およびFVSとSF-36との関係

Subscale	Male (r)					Female (r)				
	Liver	Heart	Spleen	Lung	Kidney	Liver	Heart	Spleen	Lung	Kidney
FVSv2										
PF	-0.20 **	-0.18 *	-0.31 ***	0.04	-0.33 ***	-0.20	-0.24 *	-0.26 **	-0.10	-0.15
RP	-0.06	-0.37 ***	-0.28 ***	-0.08	-0.33 ***	-0.07	-0.31 **	-0.31 **	0.01	-0.20 *
BP	-0.37 ***	-0.28 ***	-0.43 ***	-0.18 *	-0.31 ***	-0.37 ***	-0.33 **	-0.37 ***	-0.20 *	-0.28 **
GH	-0.32 ***	-0.43 ***	-0.39 ***	-0.21 **	-0.45 ***	-0.42 ***	-0.51 ***	-0.54 ***	-0.01	-0.42 ***
VT	-0.29 ***	-0.47 ***	-0.59 ***	-0.08	-0.58 ***	-0.32 **	-0.57 ***	-0.60 ***	-0.06	-0.57 ***
SF	-0.12	-0.34 ***	-0.31 ***	-0.26 ***	-0.39 ***	-0.20 *	-0.46 ***	-0.45 ***	-0.22 *	-0.44 ***
RE	-0.08	-0.45 ***	-0.32 ***	-0.16 *	-0.38 ***	-0.09	-0.46 ***	-0.37 ***	-0.06	-0.38 ***
MH	-0.27 ***	-0.75 ***	-0.42 ***	-0.12	-0.57 ***	-0.34 ***	-0.69 ***	-0.51 ***	-0.21 *	-0.58 ***
FVS										
PF	-0.20 **	-0.21 **	-0.30 ***	0.00	-0.32 ***	-0.18	-0.26 **	-0.25 *	-0.07	-0.18
RP	-0.11	-0.39 ***	-0.28 ***	-0.11	-0.34 ***	-0.06	-0.34 ***	-0.35 ***	0.03	-0.24 *
BP	-0.38 ***	-0.31 ***	-0.42 ***	-0.22 **	-0.30 ***	-0.36 ***	-0.38 ***	-0.38 ***	-0.19	-0.27 **
GH	-0.33 ***	-0.46 ***	-0.40 ***	-0.22 **	-0.39 ***	-0.45 ***	-0.56 ***	-0.53 ***	-0.02	-0.39 ***
VT	-0.31 ***	-0.53 ***	-0.59 ***	-0.09	-0.55 ***	-0.34 ***	-0.63 ***	-0.61 ***	-0.05	-0.54 ***
SF	-0.15	-0.36 ***	-0.32 ***	-0.26 ***	-0.40 ***	-0.18	-0.47 ***	-0.45 ***	-0.22 *	-0.50 ***
RE	-0.11	-0.46 ***	-0.33 ***	-0.17 *	-0.41 ***	-0.07	-0.46 ***	-0.40 ***	-0.06	-0.41 ***
MH	-0.30 ***	-0.76 ***	-0.43 ***	-0.14	-0.53 ***	-0.33 ***	-0.70 ***	-0.49 ***	-0.20	-0.53 ***

*: $p < 0.05$; **: $p < 0.01$; ***: $p < 0.001$（r; Spearmanの順位相関係数）; PF: 身体機能; RP: 日常役割機能（身体）; BP: 体の痛み; GH: 全体的健康感; VT: 活力; SF: 社会生活機能; RE: 日常役割機能（精神）; MH: 心の健康.

表5　FVSv2とFVSおよびSF-36における疾患の有無による比較

Scale name	Subscale	Male			Female		
		Health condition		$P^{\dagger}$	Health condition		$P^{\dagger}$
		Good (n=162)	Poor (n=13)		Good (n=87)	Poor (n=12)	
FVSv2							
	Liver	5.32 (3.05)	6.08 (3.04)	0.399	5.91 (2.85)	8.92 (2.31)	0.001
	Heart	5.05 (3.21)	5.69 (3.52)	0.639	5.51 (3.06)	7.67 (3.08)	0.036
	Spleen	5.98 (2.80)	7.38 (3.69)	0.229	5.95 (3.03)	8.42 (2.58)	0.009
	Lung	4.23 (2.18)	5.15 (3.08)	0.333	4.16 (2.08)	5.08 (3.34)	0.313
	Kidney	4.40 (2.48)	5.62 (3.04)	0.178	5.01 (2.53)	6.92 (3.12)	0.031
FVS							
	Liver	6.31 (3.62)	7.23 (3.96)	0.474	7.07 (3.40)	9.83 (2.76)	0.006
	Heart	6.56 (3.89)	7.77 (4.68)	0.472	7.06 (3.67)	10.25 (3.57)	0.010
	Spleen	7.55 (3.60)	9.23 (4.68)	0.276	7.72 (3.82)	10.50 (3.66)	0.028
	Lung	5.02 (2.55)	5.62 (3.55)	0.634	4.97 (2.33)	6.17 (3.95)	0.414
	Kidney	5.96 (3.19)	7.46 (4.16)	0.268	6.76 (3.21)	8.50 (3.83)	0.111
SF-36							
	PF	52.08 (7.84)	49.75 (14.45)	0.781	51.83 (7.48)	48.50 (9.01)	0.189
	RP	47.49 (11.72)	44.98 (10.94)	0.296	45.17 (12.66)	43.82 (9.12)	0.368
	BP	49.71 (9.79)	43.51 (11.74)	0.061	44.32 (10.33)	38.20 (11.39)	0.081
	GH	50.93 (10.94)	40.55 (10.60)	0.001	51.26 (9.90)	38.59 (9.25)	<0.001
	VT	44.36 (10.18)	39.94 (11.07)	0.233	42.38 (10.09)	34.13 (15.69)	0.068
	SF	49.17 (10.81)	44.62 (16.72)	0.533	46.64 (12.52)	37.67 (15.30)	0.036
	RE	48.30 (11.24)	43.60 (12.95)	0.154	44.17 (12.53)	40.12 (16.75)	0.523
	MH	45.30 (10.25)	41.08 (14.29)	0.455	43.49 (10.52)	30.80 (13.06)	0.003

FVS: 五臓スコア; FVSv2: 改訂版五臓スコア; Mean（SD）; SD: 標準偏差; PF: 身体機能; RP: 日常役割機能（身体）; BP: 体の痛み; GH: 全体的健康感; VT: 活力; SF: 社会生活機能; RE: 日常役割機能（精神）; MH: 心の健康; †: Mann-Whitney U検定, Poor: 質問項目「病気のため通院している」「病気のため投薬を受けている」のどちらかで、「いつも」「ほとんどいつも」に該当した者, Good:「Poor」以外の者

FVSv2、FVSとSF-36における疾患の有無による比較（表5）

本研究の最後にFVSv2が、疾病に関連した評価ができるのか、サブグループ解析でSF-36と比較した。

質問項目「病気のため通院している」「病気のため投薬を受けている」のどちらかで、「いつも」「ほとんどいつも」に該当した者を低健康群、それ以外を健康群として比較した結果を表5に示す。

男女とも、FVSv2の全下位尺度が低健康群で高く、SF-36の全下位尺度が低健康群で低くなっていた。また、全ての尺度が女性で低健康群と健康群との差が強く、FVSと比べてFVSv2が明瞭であった。

このことからFVSv2はFVSと比べ疾病に関する評価に適していた。

5．考　察

FVSv2の妥当性を検討した結果、以下のことがわかった。

FVSv2、FVSおよびSF-36の全尺度で、女性は男性に比べて健康度が低いと評価できた。先行研究[8]でもFVSは女性が高値であったことから、FVSv2は性差の評価ができていると考えられる。また、FVSv2は、FVSと全ての下位尺度で相関係数0.95以上の非常に強い関連性があり、各尺度内の相関では、FVSv2がFVSより肝と腎以外の全て低値で分離性が良好であった。さらに、SF-36との相関でも、FVSv2とFVSとの間に大きな差はなく、低健康群と健康群との比較ではSF-36の結果はFVSよりFVSv2を支持していた。これらの結果から、FVSを改訂したことによる負の影響はほとんど無く、臓ごとの特徴や、低健康群と健康群との差がより明瞭となる正の影響があった。FVSv2は、FVSの5件法はそのままで、下位尺度への寄与が低い項目を削除したことで各臓の特徴が強く表れ、健康評価の妥当性も高くなり、本研究の仮説を上まわる結果となった。

以上のことから、FVSv2は、FVSと比べ性差も含めた健康に関連する評価に用いることが可能で、さらに項目が少なくなった分、回答者の負担を軽減させ臨床に導入しやすくなった。

一般的に項目数が多い尺度は、回答する者に負担がかかり、回答の正確性の低下を招く恐れがある。さらに、因子数が同じでも項目数が多い尺度は、明らかにしたい因子を項目が表現できておらず、因子以外の影響を許してしまい、やはり正確性の低下を招くことになる。よって、すべての尺度は、明確な項目内容で、かつ、少ない項目数とするために、常に検討されなければならない。

本研究は、因子負荷量、識別力および困難度を明らかにした先行研究を受けたもので、FVSの能力向上のために実行された。

これまで鍼の臨床研究は、TCM評価方法に一貫性が無いため介入で用いる経穴や方法が様々で、結果的に効果の評価が難しくエビデンス獲得の障害となっていた。FVSは、TCM施術者の主観に頼っていた評価に、客観性を持たせるための尺度である。

一般的にTCMは、「望診」「聞診」「問診」「切診」の4つの方法で総合的に患者を評価するため[17, 18]、問診のFVSのみで評価することが可能かどうか断定できない。しかし、他の研究がFVSを使用することで研究の再現性が高まれば、FVSが問診の標準となる可能性がある。

FVSは、東洋医学的五臓の状態を評価する全てのTCMおよびCAMで使用することができる。さらにFVSは、これまで検討されてきたTCM評価方法[18, 19, 20, 21]と組み合わせて使用することで有益となる可能性がある。

FVSは、構成する項目のほとんどが不定愁訴である。西洋医学でもTCMでも不定愁訴は前病段階の重要なサインであることから、FVSが今後、西洋医学における疾病予防や健康評価にも活用できる可能性がある。

Elad Schiff らの研究にあるように[22]、西洋医学とCAMの連携は重要で、FVSはTCM施術者の間だけではなく東西両医学の架け橋となり、相互に有益な情報をもたらすことができると考える。

本研究の限界として、対象者数が男女および年代で大きく異なること、年齢による評価の違いが検討できていないことが挙げられる。現在、ある地区の住民を対象とした健康調査でFVSを実施し、40から65歳の中高年者189名（男性80名、女性99名の結果を解析中である。

5．結　語

FVSv2の妥当性を検討するため、FVSv2とFVSとの関連性を確認し、さらに、FVSv2が健康を評価できるのか外的基準（SF-36）を用いて確認した。

FVSv2は、性差についてFVS、SF-36と同様の評価ができた。FVSv2は、FVSの全ての下位尺度と相関係数

0.95以上の非常に強い関係を保ちつつ、FVSと比べ下位尺度間の分離性が高まった。さらに、対象者を低健康群と健康群に分けて比較したところ、FVSv2はFVSよりその差が明確で、SF-36の結果もFVSv2を支持していた。

以上から、FVSv2の妥当性は、FVSと同等以上であることが明らかになり、項目を減らしたことによる回答者の負担も軽減できた。

謝　辞

本研究の遂行にあたり、ご協力いただいた関係各位に深く感謝いたします。

参考文献

1）K. Linde, A. Vickers, M. Hondras et al., “Systematic reviews of complementary therapies –an annotated bibliography. Part 1: acupuncture,” *BMC complementary and alternative medicine*, vol. 1, no. 3, 2001.

2）D. Pearl and E. Schrollinger, “Acupuncture: its use in medicine,” *Western Journal of Medicine*, vol. 171, no. 3, pp. 176-180, 1999.

3）S. Mist, C. Ritenbaugh, and M. Aickin, “Effects of questionnaire-based diagnosis and training on inter-rater reliability among practitioners of traditional Chinese medicine,” *Journal of Alternative and Complementary Medicine*, vol. 15, no. 7, pp. 703-709, 2009.

4）S. R. Sok, J. A. Erlen, and K. B. Kim, “Effects of acupuncture therapy on insomnia,” *Journal of Advanced Nursing*, vol. 44, no. 4, pp. 375-384, 2003.

5）K. V. Trinh, S. D. Phillips, E. Ho, and K. Damsma, “Acupuncture for the alleviation of lateral epicondyle pain: a systematic review,” *Rheumatology (Oxford)*, vol. 43, no. 9, pp. 1085-1090, 2004.

6）Y. Mukaino, J. Park, A. White, and E. Ernst, “The effectiveness of acupuncture for depression –a systematic review of (andomized controlled trials,” *Acupuncture in Medicine*, vol. 23, no. 2, pp. 70-76, 2005.

7）前田雅史，岡安正倫，下市善紀 ほか，“五臓スコアの作成（第1報）古典から近代までの文献に基づく症状の抽出と選択，”東洋療法学校協会学会誌, vol. 34, pp. 58-61, 2011.

8）岡安正倫，前田雅史，下市善紀 ほか，“五臓スコアの作成（第2報）アンケートによる因子分析，”東洋療法学校協会学会誌, vol. 34, pp. 62-64, 2011.

9）B. Pollard, D. Dixon, P. Dieppe, and M. Johnston, “Measuring the ICF components of impairment, activity limitation and participation restriction an item analysis using classical test theory and item response theory,” *Health and Quality of Life Outcomes*, vol. 7, pp. 7-41, 2009.

10）D. J. Buysse, L. Yu, D. E. Moul et al., “Development and validation of patient-reported outcome measures for sleep disturbance and sleep-related impairments,” *Sleep*, vol. 33, no. 6, pp. 781-792, 2010.

11）戸村多郎，竹村重輝，福元　仁，吉益光一，宮下和久，“五臓スコアの信頼性と妥当性の検討，”和歌山医学, vol. 62, no. 4, pp. 103-108, 2011.

12）Taro Tomura, Kouichi Yoshimasu, Jin Fukumoto, et al., “Validity of a Diagnostic Scale for Acupuncture: Application of the Item Response Theory to the Five Viscera Score,” *Evidence-Based Complementary and Alternative Medicine*, vol. 2013, Article ID 928089, 11 pages, 2013.

13）S. Fukuhara, S. Bito, J. Green, A. Hsiao, and K. Kurokawa, “Translation, adaptation, and validation of the SF-36 Health Survey for use in Japan,” *Journal of Clinical Epidemiology*, vol. 51, no. 11, pp. 1037-1044, 1998.

14）R. Khorsan, A. York, I. D. Coulter, R. Wurzman, J. A. Walter, and R. R. Coeytaux, “Patient-based outcome assessment instruments in acupuncture research,” *Journal of Alternative and Complementary Medicine*, vol. 16, no. 1, pp. 27-35, 2010.

15）S. E. Hunnicutt, J. Grady, and T. A. McNearney, “Complementary and alternative medicine use was associated with higher perceived physical and mental functioning in early systemic sclerosis,” *Explore (NY)*, vol. 4, no. 4, pp. 259-263, 2008.

16）S. Fukuhara and Y. Suzukamo, *Manual of the SF-36v2* Japanese version, Institute for Health Outcomes & Process Evaluation research, Kyoto, JAPAN, 2004.

17）D. Shudo, *Japanese Classical Acupuncture: Introduction to Meridian Therapy*, Eastland Press, Seattle, USA, 1990.

18）H. Ryu, H. Lee, H. Kim, and J. Kim, “Reliability and validity of a cold-heat pattern questionnaire for traditional Chinese medicine,” *Journal of Alternative and Complementary Medicine*, vol. 16, no. 6, pp. 663-667, 2010.

19）H. M. Langevin, G. J. Badger, B. K. Povolny et al., “Yin scores and yang scores: A new method for quantitative diagnostic evaluation in traditional Chinese medicine research,” *Journal of Alternative and Complementary Medicine*, vol. 10, no. 2, pp. 389-395, 2004.

20）C. M. Huang, C. C. Wei, Y.T. Liao, H.C. Chang, S.T. Kao, and T.C. Li, “Developing the effective method of spectral harmonic energy ratio to analyze the arterial pulse spectrum,” *Evidence-based Complementary and Alternative Medicine*, vol. 2011, Article ID 342462, 7 pages, 2011.

21）L. C. Lo, Y. F. Chen, W. J. Chen, T. L. Cheng, and J. Y. Chiang, “The Study on the Agreement between Automatic Tongue Diagnosis System and Traditional Chinese Medicine Practitioners,” *Evidence-based Complementary and Alternative Medicine*, vol. 2012, Article

ID 505063, 9 pages, 2012.

22) E. Schiff, M. Frenkel, M. Shilo et al., "Bridging the physician and CAM practitioner communication gap: suggested framework for communication between physicians and CAM practitioners based on a cross professional survey from Israel," *Patient Education and Counseling*, vol. 85, no. 2, pp. 188-193, 2011.

Original Research

Validity of the revised Five Viscera Score

Taro TOMURA

Department of Acupuncture-Moxibustion and Sports Trainer Science, Faculty of Health Sciences
Kansai University of Health Sciences

Abstract

The Five Viscera Score (FVS) is an evidence-based Oriental medicine diagnostic scale for acupuncture. Research has reported scale items with low discrimination and high difficulty; these items have been omitted and a revised version of the Five Viscera Score (FVSv2) has been developed.

The present study aimed to investigate the validity of the FVSv2 by confirming the correlation between the FVSv2 and FVS. The Short Form (36) Health survey (SF-36) was used as an external criterion to determine whether the FVSv2 can accurately assess health. The FVSv2 achieved similar results regarding gender differences in the perception of health as the FVS and SF-36. Extremely high correlation was observed between the FVSv2 and all subscales of the FVS (correlation coefficient, ≥ 0.95). Differentiation between the subscales was higher for the FVSv2 than the FVS. After dividing subjects into health and low-health groups, clearer differences between the groups were demonstrated by the FVSv2, while the SF-36 obtained similar results to the FVSv2. The present findings indicate that the FVSv2 has equal or greater validity than the FVS. The FVSv2 thus reduces patient burden and can be easily applied in a clinical setting while maintaining diagnostic accuracy.

研究報告

高齢者SP（Simulated Patient）養成の課題

鹿島　英子　　吉村　牧子　　吉本　和樹　　大橋　純子　　森永　聡美
増田　惠美　　伊井　みず穂　　井村　弥生　　和田　幸子
兒嶋　章仁　　築田　　誠　　石野　レイ子　　岩井　恵子

関西医療大学　保健看護学部

要　旨

1．目　的

本研究では、本学独自で養成した高齢者SP（Simulated Patient）を用いたSP参加型演習を実施し、高齢者SPの養成における課題について明らかにすることを目的とした。

2．方　法

熊取町在住の65歳以上の男女（くまとりSP養成講座修了者）を対象にしたFGI（Focus Group Interview）によるインタビューを行った内容を録音し、逐語録を作成した。データ分析は逐語録の内容分析を行いカテゴリー化を行った。

3．結果と考察

分析の結果、【SPを引き受けた動機】では3項目、【講座受講後の感想】では5項目、【SP活動実践後の感想】では11項目のカテゴリーが抽出された。今回の結果から、高齢者にとってSP活動が「生きがい」にも通じる有意義なものになったことがわかった。SPとしての重圧や不安を緩和し、高齢者の特徴を考慮した時間をかけた養成が必要なことが示唆された。

キーワード：高齢者、模擬患者、養成、課題、FGI

Ⅰ．はじめに

日本では一般にSPとは演習などの学習に参加する模擬患者（Simulated Patient）と、OSCE（Objective Structured Clinical Examination：客観的臨床能力試験）などの試験や評価に参加する標準模擬患者（Standardized Patient）の2種類の使われ方がある。SP養成に関しては、OSCEが義務付けられている医学部、歯学部、薬学部を持つ大学では、独自に養成しているところと、NPO法人としてSPの育成・派遣を行っているCOMLのような団体がある。

看護教育ではOSCEは義務付けられていないが、独自にOSCEをとりいれた教育の報告や[1) 2) 3)]、SP養成の報告がある[4) 5)]。SP参加型演習の報告もあり[6) 7)]、SPが看護教育の場で活躍することが大いに期待されている[8)]。また本田ら[9)]は、SP参加型教育は学生の実践能力の向上および自らの課題を見出す効果があると報告し、さらに藤崎[10)]は、SP参加型教育は、体系的な知識を与えるような教育にはむかないが、認知（知識や理解力）、情意（態度やコミュニケーション能力）、精神運動領域（技能）の統合を可能にする方法論としては有用であることなどを示唆している。

本学では臨地実習に出る前に、看護の対象者になることが多い高齢者を正しく理解することを目的に、SP（Simulated Patient）の導入を検討した。平成24年度に、熊取町との協働事業で、第1期くまとりSPとして、高齢者のSP養成に取り組み、教育への導入を行った。

本研究は、SP参加型演習に参加した第1期くまとりSPを対象に、Focus Group Interview（以下FGIと略す）の内容分析から、今後の高齢者SPの養成の課題について検討することを目的とした。

Ⅱ．用語の定義

SPとは演習などの学習に参加する模擬患者（Simulated Patient）と、OSCE（Objective Structured Clinical Examination：客観的臨床能力試験）などの試験や評価に参加する標準模擬患者（Standardized Patient）の2種類があるが、本研究におけるSPとは、学習に参加する模擬患者としての「Simulated Patient」である。

Ⅲ．対象と方法

1．くまとりSP養成講座

1）受講生

熊取町在住で、SPに関心のある65歳以上の男女とし、既に本学と関わりのある方に直接依頼し、本人の承諾を得た後、担当教員による面接を行い、再度SPについて十分な説明を行ったのち理解を得られた方を選定した。

養成講座を受講したのは、男性7名（平均年齢70.5 ± 2.4）、女性6名（平均年齢72.3 ± 5.0）の計13名（平均年齢71.5 ± 3.7）であった。

すべての受講者が講座を受講し、第1期くまとりSPとして13名を認定した。

表1．くまとりSP養成講座の内容

養成講座内容	
養成講座①	SPの役割（これからの活動）
養成講座②	コミュニケーションとは
養成講座③	役作り（演習）
養成講座④	フィードバック
養成講座⑤	シナリオ作り
養成講座⑥	授業参加
養成講座⑦	演習（役作り・フィードバック）／修了式
活動①	SPとして2年生の演習に参加

2）講座内容

養成講座は表1に示すように平成24年7月～平成25年1月に、月1回全7回を本学にて実施した。

2．SP参加型演習について

第1期くまとりSP養成講座修了後に、保健看護学科2年生の講義である「老年看護方法論」に模擬患者として参加した。

高齢者SPは演習に際し、演習目的・目標および方法について説明を受け、講座にて学んだことを振り返りながら準備し、臨んだ。

1）演習目的

高齢の入院患者から必要な情報を収集する。

2）目　標

①高齢者と円滑な人間関係ができるように配慮する
②高齢者の特徴を考えた会話ができる

3）方　法

高齢者SPは学生8～12名で構成するグループの代表者1名とのセッションを実施した。老年看護方法論1コマの授業内で7分間のセッションおよび3分間のフィードバックを1セットとし2セット実施した。

3．研究方法

1）研究対象者

くまとりSP養成講座を修了し、認定証を授与されたくまとりSP13名のうち、研究協力を得られた9名を対象とした。

2）実施日

平成25年6月3日

3）方　法

今回の研究では、FGI（Focus Group Interview）のメリットである「相互作用による意見の引き出し効果」「自発的な意見の発現」「プレッシャーが少ない」などが、研究対象者である高齢者へのインタビューを行うには適しているため、FGIを採用した。実施方法は、インタビューフロー（資料1）を作成し、研究対象者を2つのグループに分け、各々約60分でFGIを実施した。FGIの内容はICレコーダーで録音し、逐語録を作成した。

資料1「SP養成およびSP参加型演習に関するFGIインタビューフロー」

1. 実施年月日
H25年6月3日　1回60-90分

2. 目的
第1期のSP養成を実施し、学生とのセッションを行った成果を検証する目的で、定期的にSPの方々へのフォーカスグループインタビュー（FGI）を行い、養成方法やセッションによるSPへのメリットおよび問題点を抽出していく。

3. 対象
所定の養成講座を修了し、修了証書を授与された「くまとりSP」第1期生13名。
現在月1回SP研究会を行っているメンバー
内訳：男性5名（平均年齢69.8 ± 1.8）　女性4名（平均年齢70.8 ± 5.6）　計9名

4. スタッフ役割
①モデレーター
②モデレーター補助
③記録
④観察

5. 調査項目
①くまとりSPになろうと考えた動機
②くまとりSP養成講座を受講して感じたこと
③くまとりSPとしてセッションを行って感じたこと・考えたこと
6. 準備物品
環境づくり：テーブルクロス、花、音楽CD、お茶、菓子
記録：ICレコーダー2台、ビデオカメラ2台
7. Focus Group Interview（FGI）
1）導入（10分）
①メンバー自己紹介、スタッフ紹介、本日の目的。流れの説明
②FGIの基本ルールの説明
守秘義務の厳守、自分のペースで参加（途中退席、発言のパス可）、録音・録画の承諾
2）インタビュー（70～80分）
①今回くまとりSPを引き受けていただいたが、その動機は何か。
②くまとりSP養成講座に参加してどのようなことを感じましたか。
③実際に学生の授業に参加して（またはたのSPが行っているのを見て）感じたことや考えたこと。

4）分析方法

逐語録から、分析テーマに関連した内容を述べている部分を取り出し分析を行った。分析にあたっては共同研究者間で繰り返し意見交換を実施し、分析結果の信頼性・妥当性を確保できるようにした。

5）倫理的配慮

本学倫理委員会で承認後、対象者に対して、研究への参加は個人の自由意志で決定できること、いつでも取り消しができ、それによって何ら不利益を受けないことを文書を用いて説明した。ただし、同意を取り消した時にすでに研究結果が論文などで公表されている場合のように研究結果から当該者のデータを外すことができない場合があることを説明し、個人のプライバシーは厳重に保護されること、インタビューにより得られた内容は研究の目的以外には使用しないことを説明し、文書で研究参加の同意を得た。

Ⅳ．結　果

1．FGIによる調査

1）対象者概要

男性5名（平均年齢；69.8 ± 1.8）、女性4名（平均年齢；70.8 ± 5.6）であり、9名中8名がSPとしての活動を継続している。

2）FGIの分析

高齢者SPへのインタビューの結果、「SPを引き受けた動機」については、3つのカテゴリー、「講座受講後の感想」については5つのカテゴリー、「SP活動実践後の感想」については11個のカテゴリーを抽出することができた。なお、カテゴリー名については、【　】に記述し、実際に語られた内容については、斜字にて「　　」に記述した。

（1）SPを引き受けた動機

①【日頃付き合いがある人からの依頼】；このカテゴリーは、知り合いから依頼を受けて、SPとしての活動を引き受けることになった動機の部分を表している。

「○○会から何人か行ってほしいということで参加」

「A地区には誰も人がいてないんで出てくれないかと言われて参加」

②【人生経験を生かし、他者の役に立つことをしたいという気持ち】；このカテゴリーは、自らの人生経験を肯定的にとらえている高齢者が、どのような形でもよいから他人に感謝されたいという高齢者の気持ちを表している。

「72年間の経験と若干の知識があるわけですから、これを活かせたらいいのかな」

「いっぺんくらい、ボランティアで皆さんの役に立つことをやってもええんかな」

③【学生と交流することで活力を得たい】；このカテゴリーは、若い学生と関わることで、学生から刺激を受け、その刺激が自らによい影響があると考えている高齢者の希望を表している。

「若い学生たちと交流できる。それで刺激を受けて若返られるというか学びが得られるんじゃないかなあと」

「うれしかったのは学生と関われるということ」

（2）講座受講後の感想

①【予想外の重責】；このカテゴリーは、引き受けたSPの活動が、思っていたよりも困難感が伴っていたという現状を表している。

「こんなに大変なものだったのか」

「何か重責を預かったみたい、無責任なことできんもんな」

②【SPとして活動できるかという不安】；このカテゴリーは、SPの養成講座が進み、自らがSPとして活動していくという自覚が出始めたときに現れる心の変化を表している。

「講義が進んでいく中で段々と不安を覚えてきた」

「どこまで学生たちの役に立ち、そのためには何

をせんなあかんのかな」

③【学生と関わることを楽しみに思う】；このカテゴリーは、学生と関わることで、自らの若い時代を思い出し、自らも若返ったかのような気分になるという気持ちを表している。

「若い学生たちと交流できる、それで刺激をうけて若返られる」

「学生さんとコミュニケーションをとることは年配者にとって新鮮味がでてくる」

④【面白みを感じる】；このカテゴリーは、SPの養成が進み、その中で楽しいと感じているという気持ちを表している。

「結構面白いなと思っている」

「講義を受けたあとは面白かった」

⑤【理解力と記憶力が必要】；このカテゴリーは、高齢者SPが、患者としての演技をしたり、シナリオを覚えたりする際に一筋縄ではいかないと感じたときの気持ちを表している。

「そのときは入ったつもりでも、もうすぐ抜けて行ってる」

「いっぺんに詰め込むことはできない」

（3）SP活動実践後の感想

①【言葉で伝える難しさ】；このカテゴリーは、SPとして演技をする際に、どのようにすれば学生に今の気持ちや状態を適切に言葉で表現できるのかということに悩む気持ちを表している。

「どんな言葉で表現したらいいかわからない。難しい」

「印象的に与える言葉がなかなか見つからない」

②【演技の難しさ】；このカテゴリーは、SPを演じることが難しいことを実感した高齢者の気持ちを表している。

「自分がね、入ってしまうんですよね」

「相手の出方でどのようにお答えしていいのかというのが、ちょっと戸惑います」

③【シナリオを理解する難しさ】；このカテゴリーは、シナリオに出てくる患者を自分で理解することが難しいという思いをあらわしている。

「シナリオの奥にあるものを自分で感じとらなあかんのかなと」

「役作りをちゃんとせなあかんのかなって」

④【フィードバックは難しい】；このカテゴリーは、SPとして学生に対して助言と感想を述べる“フィードバック”が一番の悩みどころだという気持ちを表している。

「評価と言うところにすぐにいってしまいますんで」

「やっぱり何回か経験してからでないと、あの時は答えるだけで精一杯やったから」

⑤【役になりきるために病気の知識を深めることの必要性】；このカテゴリーは、高齢者SPとして、必要な病気の知識が足りていないという自分への叱咤を表している。

「学生のためにならんのですわ、的確にやらんと」

「自分が出てしまうということね、反省は貧血と言う病気を理解せなあかん。とっさに自分が出てしまうからね」

⑥【SPとしての役割の自覚と課題】；このカテゴリーは、高齢者SP自身が、看護学生を育てるという意識が高くなり、教育するという責任を感じていることを表している。

「自分がもし入院したときに、ちゃんと質問してくれる人が一人でも多くなったらいいと思います」

「今後、学生さんたちの役に立つようなSPになるためにもっと勉強してやらないとと思う」

⑦【高齢者SPとして活動することの不安】；このカテゴリーは、高齢者SPとしての自覚とともに感じてくる自らのSPとしての知識などの力に対する不安を表している。

「こんな年いってるもんばっかりでいいのかな」

「これで私たち役にたつのかな、どうかなっていうのが心配です」

⑧【自分のSPの技術が学生の役にたつものになっているのかという不安】；このカテゴリーは、高齢者がSPとして活動する際に、このままのスキルで本当に学生にとって勉強になるのだろうかという不安を表している。

「やる以上はちょっとでも役にたちたい」

「これが学生さんにプラスになるのかなとか自信がない」

⑨【SPとして学生からどう見られているか知りたい】；このカテゴリーは、SP養成講座が終わりに近づくにつれ、高齢者自身がSPとしての知識や技術等について、学生から評価してもらうことで、さらなる向上を目指すために抱く気持ちを表している。

「フィードバックした学生さんから私にね、どういう風に考えてんのかちょっと聞きたい」

「SPに対する学生の思いをね（聞きたい）」

⑩【更なる学習希望】；このカテゴリーは、SPとして活動することに前向きに、かつ自覚を持ち始めた高齢者の気持ちを表している。

「いろいろと経験したり教えていただいたりせんといけないなとは思う」

「もっと勉強せないかんな」

⑪【練習したいという気持ち】；このカテゴリーは、高齢者SPが自らの知識や技術力をあげるために、SPの練習ができる環境を求めているということを表している。

「フィードバックの練習ができる自由な時間っていうのかな、あればいいな」

「どちらも練習が必要やと思うで」

Ⅴ．考察

FGIの分析から、本学のくまとりSPたちがSPを始めた動機は、頼まれたので参加したという、高齢者らしい日頃の付き合いを大事に、人間関係を保つことがきっかけであった。しかし、活動を継続している8名については、それ以外に、「人生経験を活かし人の役に立ちたい」、「学生と交流することで活力を得たい」などの思いや前向きな動機をもって参加していることがわかった。これは我々が高齢者SPの養成に取り組むメリットと考えていたことを、SP自身も感じ取り、「生きがい」につながる役割意識が芽生えていたことに他ならない。養成講座を受講することで、さらにその思いや前向きな動機は高まり、さらにSPとしての活動の中で、強い意志が生じ、演技やフィードバックなどさらなる学習をしたいという気持ちが高まってきたと考える。山本ら[11]は、高齢者が学習活動をするためには「生きがい」が欠かせないと述べており、人生経験が豊富な高齢者が、その経験を活かしながらSPという新たなチャレンジを行うことが生きがいとなり、高齢者にとってSPという活動が有意義なものになったと評価することができる。今回、SPの養成と活動は大学内で行われており、大学教育現場への関わりや、学生との関わり、高齢者SPとしての授業参加等の活動自体が、高齢者SPの「生きがい」となっていたと考えられる。

また活動をする中で、【言葉で伝える難しさ】【演技の難しさ】【シナリオを理解する難しさ】【フィードバックは難しい】【役になりきるために病気の知識を深めることの必要性】【SPとしての役割の自覚と課題】【高齢者SPとして活動することの不安】【自分のSPの技術が学生の役に立つものになっているのかという不安】【SPとして学生からどう見られているか知りたい】という課題が明確になり、さらに【更なる学習希望】【練習したいという気持ち】という意欲が生じたことが明らかになった。

高齢者SP養成においては、小澤ら[12]の報告よると、「演技に関する質問」への解答より、高齢者がSPとして演ずることに慣れるには、何度も繰り返して練習することが必要である点、また「フィードバックに関する質問」への解答より、高齢SPのフィードバックへの理解を深めるためには、フィードバックについての研修を開催して、繰り返し訓練することによって徐々に解消できると考えられている点が示唆され、それを反映するように今回の我々の調査の「SP活動実践後の感想」においても、シナリオの患者になりきれず、自分が出てしまうことなどの『演技の難しさ』や、つい人生の先輩として学生に指導をしてしまうなど、『フィードバックの難しさ』を感じていることなど先行研究を反映した結果が出ている。これらより、繰り返し伝えていくなど高齢者の特徴を踏まえた養成を行わねばならないことが改めて確認され、高齢者SP養成においてはSPとしての重圧や不安を緩和し、高齢者の特徴を考慮した時間をかけた養成が必要なことがわかった。

本学の高齢者SP養成講座参加者13名のうち、8名が現在も定期的に当大学において看護学生を相手にSPとして演習に参加している。今回の調査の結果より、養成の過程は、シナリオを覚え、疾患も理解し、そして、どのように学生にフィードバックをしていくのかということまで考えていく必要があり、高齢者にとっては様々な負担が生じる場合もあると考えられる。しかし、このSP養成講座に参加し、SPとして活動するということが高齢者の「生きがい」になっていたからこそ、現在も活動を継続でき、今後の継続養成参加へとつながると考える。

参考文献

1）中村惠子：OSCEの概要と看護教育における意義，看護展望, 36（6），メヂカルフレンド社，2011.

2）梶原理絵，中西純子：看護学士課程におけるOSCE活用の現状と課題に関する文献検討，愛媛県立医療技術大学紀要8（1），35-41，2011.

3）笹本美佐、小園由味恵、奥村ゆかり他：実習前OSCEを通して看護学生が実感した学習成果，日本赤十字広島看護大学紀要12，79-87，2012.

4）相原優子、神里みどり、佐伯香織他：模擬患者を活用した看護アセスメント演習の評価，日本看護医療学会誌9（1），27-38，2007.

5）宮崎貴子：日本の看護教育におけるSP（模擬患者/標準模擬患者）参加型学習の実態に関する文献検討，日本赤十字武蔵野短期大学紀要18，51-59，2005.
6）渕元雅昭、渡邉由加利、山本勝則他：看護基礎教育における模擬患者養成プログラムの実際とその検証，札幌市立大学研究論文集6（1）3-10，2012.
7）加悦美恵、安陪等思、藤野 浩他：医学科・看護学科共同でのSP養成の現状解析と今後の方向性－Advanced OSCEにおける学生SPとの対比－，久留米医学会雑誌71（5・6）199-207，2008.
8）藤崎和彦：臨床で活きるコミュニメーションスキル－看護師はどのように患者と会話しているか，看護展望33（8-775）35-39，メヂカルフレンド社，2008.
9）本田多美枝、上村朋子：看護基礎教育における模擬患者参加型教育法の実態に関する文献的考察、日本赤十字九州国際看護大学、7：67-76、2009.
10）藤崎和彦：アメリカの医学教育における模擬患者の導入の現状とその理論、看護展望、18（8）：44-48、1993.
11）山本孝司、久保田治助：高齢者の学習活動における「生きがい」の意味，九州看護福祉大学紀要、Vol9，No1，P31-40，2007
12）小澤芳子、中村Thomas裕美、後藤桂子他：「学内演習に参加する高齢模擬患者の養成プログラムの評価」，医学教育、42（2），P225-228，2011

Sutdy Report

Challenge of training the elderly SP (Simulated Patient)

Hideko KASHIMA　Makiko YOSHIMURA　Kazuki YOSHIMOTO　Junko OHASHI
Satomi MORINAGA　Emi MASUDA　Mizuho Ii　Yayoi IMURA　Sachiko WADA
Akihito KOJIMA　Makoto TSUKUDA　Reiko ISHINO　Keiko IWAI

Kansai University of Health Sciences Faculty of Nursing

Abstract

The purpose of this study was to clarify the Problems on training elderly SP by hearing the impressions of the subjects after practicing the work of SP.

After we recorded the contents of the interview by means of FGI (Focus Group Interview) with men and women 65 years or older, living in Kumatori district (training lecture completion persons), we made the verbatim records. We categorized them using content analysis.

As a result of content analysis of these data, we could extract different categories (in the following each 'theme'), respectively, 3 categories (1) in 'the motive that intended to undertake SP', 5 categories (2) in 'the impression after the training lecture' 11 Categories (3) in 'the impression after the SP activity'. From this result, we presumed(speculate)that subjects gain their life worth living in old age by the SP activity. To train elderly SP, it would be important to improving educational methods based on the age related characteristics of elderly persons, on careful unhurried fashion.

Key Word：elderly person, simulated patient, training, challenges, FGI

研究報告

成人の健康づくりへの関心と運動習慣確立の関連要因の検討

築田　誠　　兒嶋　章仁　　伊井　みず穂　　石野　レイ子

関西医療大学　保健看護学部保健看護学科

要　旨

目的：成人の健康づくりを推進するために運動習慣確立の要因と、支援方法を検討する。

方法：20～40歳代6名及び50～60歳代7名を対象にフォーカスグループインタビューを実施し、Berelsonの内容分析の手法を用いて分析した。

結果：50～60歳代では、①「運動を始めるきっかけ」②「運動に対するイメージ」③「運動を続けるための要因」④「健康を意識した生活」の4つのカテゴリーが抽出され、時間的余裕や人的環境が運動の定着に繋がっていた。20～40歳代では、4つのカテゴリーに加えて、⑤「生活の中に取り込む運動」⑥「体力低下の認識」の6つのカテゴリーが抽出され、就労や家事をしながら生活の中に運動を取り込む一方、体力の低下を認識していた。

考察：運動習慣確立の要因として、運動へのイメージ、運動することへの意欲や時間、成果の実感が示された。支援方法は、住民のニーズに沿った支援や地域と連携した住民への周知、成果のフィードバックが必要であることが示唆された。

キーワード：健康づくり、運動習慣、支援方法、フォーカスグループインタビュー

Ⅰ．緒　言

21世紀における国民健康づくり運動（健康日本21）は、社会全体として地域住民の主体的な健康づくりを支援していくことが不可欠とし、そのような社会を実現するために健康寿命の延伸と生活の質の向上を目的としている[1)]。地域住民の主体的な健康づくり活動に必要な推進要件としては、住民自身の健康づくりへのとらえ方が基盤となり、健康づくり活動を継続できるような支援が必要である。健康づくり活動の中でも、継続的な運動習慣の獲得が、生活習慣病の予防に大きな役割を果たしていることは広く言われている。厚生労働省の国民健康・栄養調査によると、運動習慣のある者の割合は30％前後であるが、年齢階級別にみると、男性の30～40歳では2割程度にとどまり、女性の20～40歳代では2割を下回っていることが報告されている[2)]。

このような現状において、若年男性集団における運動習慣の関心度と運動習慣の促進要因・阻害要因については、運動習慣の継続を促す保健指導の内容において報告されている[3)]。また、若年成人男性におけるメタボリックシンドローム予防のための行動変容についての現状と課題を明らかにした研究も報告されている[4)]。本学の地域貢献活動として、本学所在地の自治体と連携した地域住民の健康づくり支援に関する調査においても、年代に問わず、多くの住民が健康づくりのための活動や社会活動への参加意思を示している一方で、定期的な運動を心掛けられている住民の割合は特に20～60歳代で低いことが示された。

そこで、地域住民の健康づくりに関する関心を持ちながらも、運動習慣が確立していない要因を明らかにすることより、本学が行う地域住民の健康づくり推進のための具体的介入への示唆を得たいと考えた。

Ⅱ．研究方法

1．研究デザイン

本研究は、本学所在の地域住民の運動習慣に焦点を当てて、本学が行う地域住民の健康づくり推進のための具体的介入を検討しようとするものであるため、質的記述的研究デザインを採用した。

2．調査対象者

本学所在地の自治体に居住する青・壮年期の地域住民で、調査への協力が得られた者を対象とした。住民への周知は、研究の趣旨と研究協力への依頼について説明した「研究参加募集用チラシ」（以下チラシとする）を用いた。チラシは、①最寄駅や公共施設掲示板への掲示、②町広報誌への掲載、③町制60周年記念イベントでの配布、④本学ホームページへの掲載、⑤本学公開講座での案内の5方法で募集した。

3．データ収集方法

データ収集期間は、平成23年10月～平成24年2月であった。インタビューガイドを作成し、運動習慣についてのフォーカスグループインタビュー[5) 6)]を行った。インタビュー方法は、20～40歳代の男女合わせて6名のグループと、50～60歳代の男女合わせて7名のグループに対して、各1回行った。所要時間は1時間半から2時間とし、調査対象者が話しやすい雰囲気づくりを工夫した。インタビュー内容は、運動に対するイメージ、運動を共にするパートナーや仲間について、新たな運動を始めることについて、運動を続けることについて等とした。フォーカスグループインタビューは、大学内の出入りのない静かな部屋で行い、調査対象者の承諾を得てICレコーダーとビデオを設置し、記録した。また、情報を抜け漏れなく整理するため、観察者は目立たない場所で、グループインタビューの様子を観察、記録した。インタビュー中は、番号札を参加者の名前の代わりにすることで、名前が表に出ないことを保証し、安心して討論ができるように配慮した。

4．分析方法

ICレコーダーに録音された記録から正確な逐語録を作成した。観察記録による参加者の反応を加味し、複数の分析者で確認しながら分析を行った。逐語録から、運動習慣に関する箇所を意味の読み取れる単位で抽出し、データの類似性、相違性を比較してコード化、サブカテゴリー化を行った。その後、関連のあるサブカテゴリーを集めてカテゴリーを作成した。次に、カテゴリー内におけるデータの意味内容を吟味し、カテゴリー間の関連について検討した。分析にはBerelson.Bの内容分析の手法[7)]を用い、分析の過程では繰り返しデータに戻って研究者間で検討するとともに、質的研究の専門家にスーパーバイズを受けた。

5．倫理的配慮

調査対象者には目的、方法について書面及び口頭での説明を行い、同意書の提出を求めた。その際、研究協力は自由意思であること、承諾後も断ることができること、断ったとしても不利益を受けないこと、対象者の都合に合わせて調査を行い、時間的負担を最小限にできるように配慮すること、得られた情報の秘密は厳守されること、学術資料以外での目的で使用しないことについて説明した。得られたデータは、個人が特定されないよう、研究者が連結可能匿名化したうえで研究に使用した。匿名化の対応表及びデータは、研究者がそれぞれパスワードを設定したファイルに記録し、USBメモリーに保存して、鍵のかかるキャビネットに保管した。研究終了後は、全てのデータを原則としてシュレッダーにかけて廃棄すること、電子媒体のデータは、専用のソフトを用いて消去し、物理的に破壊し、廃棄することを明記した。なお、本研究は、関西医療大学倫理委員会の承認を得て行った。

Ⅲ．結　果

研究対象者は本学所在地の自治体住民13名（男性6名、女性7名）で、20～40歳代の男女合わせて6名（平均年齢33±7.8）、50～60歳代の男女合わせて7名（平均年齢63±4.3）であった。20～40歳代の男女6名をグループとしてフォーカスグループインタビューを行い、インタビュー時間は64分であった。また、50～60歳代の男女7名をグループとしてフォーカスグループインタビューを行い、インタビュー時間は102分であった。

分析の結果、20～40歳代のグループにおいては、6カテゴリーと25サブカテゴリーが抽出された。その内容を表1に示す。運動習慣に関するカテゴリーには、【生活の中に取り込む運動】【体力低下の認識】【運動を続けるための要因】【運動に対するイメージ】【運動を始めるきっかけ】【健康を意識した生活】の6つのカテゴリーが抽出された。50～60歳代のグループにおいては、4カテゴリーと19サブカテゴリーが抽出された。その内容を表2に示す。運動習慣に関するカテゴリーには、【運動を始めるきっかけ】【運動に対するイメージ】【運動を続けるための要因】【健康を意識した生活】の4つのカテゴリーが抽出された。

研究対象者の運動習慣に関する内容に関しては、以下に記述した。その際、文中ではカテゴリーを【　】、サブカテゴリーを《　》、逐語録から得られた要素は「　」で示し、文脈に合わせて語尾を一部変化させた。また、研究対象者のプライバシーに関することは削除した。

1．20～40歳代の運動習慣

1）【生活の中に取り込む運動】

このカテゴリーは、《定期的な運動》、《子育てをしながら子供と一緒に運動》、《通勤時に歩行や階段を使った運動》、《仕事・家事・子育てが運動になっている》の4サブカテゴリーで構成された。「週1回テニスをしています」というように、《定期的な運動》を行っている人もいれば、働き盛りや子育ての最中という事もあり、「子供と一緒に昼間野球をしている」というように、《子育てをしながら子供と一緒に運動》を行ったり、「仕事の中で運動しようと思ったら通勤しかない」というように、《通勤時に歩行や階段を使った運動》を行っている。また、「現場にいると適度な運動になっている」ということから《仕事・家事・子育てが運動になっている》ことで、運動習慣を取り入れていた。

表1　インタビューから得られたカテゴリ分析（20～40歳代）

カテゴリ	サブカテゴリ	逐語録から得られた要素	記録単位数
生活の中に取り込む運動	定期的な運動	週1回テニスをしています	4
	子育てをしながら子供と一緒に運動	子供と一緒に昼間野球をしています	6
	通勤時に歩行や階段を使った運動	仕事の中で運動しようと思ったら通勤しかない	4
	仕事・家事・子育てが運動になっている	現場にいると適度な運動になっている	3
体力低下の認識	運動不足	今は全く運動をしていない、犬の散歩ぐらい	4
	歳をとったという実感	歳をとってきたので運動をしないといけない	2
	疲れやすく思ったように動かない	仕事した後運動するのはしんどい	4
運動を続けるための要因	ダイエット	痩せるためにやっている	2
	精神的に健やかに過ごすことができる	運動をした後は爽快感がある	8
	仲間とのコミュニケーション	仲間がいれば続けられる	3
	食事制限をしたくない	好きなだけ食べたいから運動する	5
運動に対するイメージ	仕事が忙しい	仕事が忙しくなったのもあって運動不足	3
	時間的制限	家事して子育てして時間がない	4
	目的やメリットがない	わざわざ体を動かさなくてよい	5
	運動は辛い	しんどいだけ	4
	運動をする必要性を認識していない	一緒に付いて来れなかったら待たなあかん	5
	個人のペース	痩せているので、運動をする必要がない	8
運動を始めるきっかけ	一緒に行う仲間やパートナー	仲間ができるとか上下関係は重要	3
	費用が安価である	無料なら考える	3
	距離や利便性	近いに越したことはない	4
	効果やメリットを実感	自分に効果やメリットがあるか気になる	3
	情報提供	文字だけで伝えられても、実際何するかわからない	3
健康を意識した生活	野菜を摂るようにしている	昼は野菜を摂らないとダメだと思う	4
	酒を飲むと煙草を吸いたくなる	酒を飲むと煙草が肴になる	4
	煙草をやめるつもりはない	煙草をやめないと死ぬ位にならないとやめない	3

表2　インタビューから得られたカテゴリ分析（50～60歳代）

カテゴリ	サブカテゴリ	逐語録から得られた要素	記録単位数
運動を始めるきっかけ	退職	仕事を辞めて退屈になった	13
	現在の健康状態が思わしくない	町の健診に引っかかって	9
	運動に関する行事への参加	町の行事に参加している	5
	日常的な近隣の情報源	広報を見て参加している	3
	知人からの勧め	近所の方からノルディックウォークを誘われて	3
	経済的負担が少ないこと	数百円でできる	3
運動に対するイメージ	健康のために良い	動いたりしたら少しでも良いかなと思って	3
	楽しい	最近始めたけど、結構面白い	3
	運動が嫌い	運動とかスポーツとか大嫌い	3
	辛い	歩くのはしんどいというイメージがある	3
運動を続けるための要因	時間的余裕	勤め中は時間的余裕がなかった	14
	家族や仲間の存在	参加したら友達がおるしね	14
	運動習慣を確立させる意欲	生活習慣の一環として行いたい	13
	運動による効果や成果の実感	運動したら血糖値が下がった	7
	運動に必要な身なりを整えること	スポーツ的な服装を持っていない	5
	自分に合った運動をする	自分に合った簡単な物ならできる	2
健康を意識した生活	食生活の是正	甘いものを少し控えるのが大事	6
	定期的な運動習慣がある	毎日10分これだけはしている	4
	自己の健康管理	積極的に検査を受けるようにしている	2

2）【体力低下の認識】

このカテゴリーは、《運動不足》、《歳を取ったという実感》、《疲れやすく思ったように動かない》の3サブカテゴリーで構成された。「今は全く運動をしていない、犬の散歩くらい」というように、《運動不足》を感じており、「歳をとってきたので運動しないといけない」と《歳をとったという実感》を感じながらも運動習慣の必要性を感じ、しかし「仕事をした後運動するのはしんどい」と、実際は仕事や育児の疲労から《疲れやすく思ったように動かない》と認識していた。

3）【運動を続けるための要因】

このカテゴリーは、《ダイエット》、《精神的に健やかに過ごすことができる》、《仲間とのコミュニケーション》、《食事制限をしたくない》の4サブカテゴリーで構成された。「やせるためにやっている」というように、目に見える《ダイエット》という目標や、「運動をした後は爽快感がある」というような《精神的に健やかに過ごすことができる》ことが理由で、運動を続けていた。また、「仲間がいれば続けられる」というように、《仲間とのコミュニケーション》、「好きなだけ食べたいから運動する」というように、《食事制限をしたくない》という思いが運動の継続要因になっていた。

4）【運動に対するイメージ】

このカテゴリーでは、《仕事が忙しい》、《時間的制限》、《目的やメリットがない》、《運動は辛い》、《運動をする必要性を認識していない》《個人のペース》の6サブカテゴリーで構成された。「仕事が忙しくなったのもあって運動が不足した」というように、《仕事が忙しい》ことや、「家事して子育てして時間がない」というような、《時間的制限》があるという思いがあった。また、「わざわざ体を動かさなくてよい」とような、《目的やメリットがない》ことや「しんどいだけ」というように、《運動は辛い》という思いもあった。これらのことから、「運動をする必要がない」というように、《運動する必要性を認識していない》ということが、運動を継続できない要因になっていた。「一緒に付いて来れなかったら待たないといけない」というように、仲間の存在が運動習慣を継続するようになっていた一方で、《個人のペース》が運動を継続できない要因にもなっていた。

5）【運動を始めるきっかけ】

このカテゴリーでは、《一緒に行う仲間やパートナー》、《費用が安価である》、《距離や利便性》、《効果やメリットの実感》、《情報提供》の5サブカテゴリーで構成された。「仲間ができるとか上下関係は重要」というような、《一緒に行う仲間やパートナー》の存在や、「無料なら考える」や「近いに越したことがない」というような《費用が安価である》ことや《距離や利便性》が挙げられ、「自分に効果やメリットがあるか気になる」というような、《効果やメリットの実感》が、運動を始めるきっかけとして存在した。「文字だけで伝えられても実際何をするかわからない」というような、《情報提供》の方法に関しても運動を始めるきっかけとして挙げられた。

6）【健康を意識した生活】

このカテゴリーでは、《野菜を摂るようにしている》、《酒を飲むと煙草を吸いたくなる》、《煙草をやめるつもりはない》の3サブカテゴリーで構成された。「昼は野菜を摂らないとダメだと思う」というように、運動習慣以外にも《野菜を摂るようにしている》思いがある。一方で、「酒を飲むと煙草が肴になる」というように、《酒を飲むと煙草を吸いたくなる》や、「煙草をやめないと死ぬ位にならないとやめない」と言うように、《煙草をやめるつもりはない》という認識を持つこともあった。

2．50～60歳代の運動習慣

1）【運動を始めるきっかけ】

このカテゴリーでは、《退職》、《現在の健康状態が思わしくない》、《運動に関する行事への参加》、《日常的な近隣の情報源》、《知人からの勧め》、《経済的負担が少ないこと》の6サブカテゴリーで構成された。「仕事を辞めて退屈になった」ということから、《退職》して時間ができたことや、「町の健診に引っかかって」とあるように、《現在の健康状態が思わしくない》ことが運動を始めるきっかけとなった。「町の行事に参加している」ということから、《運動に関する行事への参加》や、「広報を見て参加している」ということから、《日常的・近隣の情報源》が、運動を始めるきっかけとなっていた。「近所の方からノルディックウォークに誘われて」とあるように、一人で参加するのではなく《知人からの勧め》がきっかけとなっていたり、「数百円でできる」というように、《経済的負担が少ないこと》も運動を始めるきっかけとなっていた。

2）【運動に対するイメージ】

このカテゴリーでは、《健康のために良い》、《楽しい》、《運動が嫌い》、《辛い》の4サブカテゴリーで構成された。「動いたりしたら少しでも良いかなと思って」というように、《健康のために良い》というイメージや、「最近始めたけど結構面白い」というように、《楽しい》などの良いイメージがあった。一方、「運動とかスポーツとか大嫌い」というように、《運動が嫌い》というイメージや、「歩くのはしんどいというイメージがある」というように、《辛い》という悪いイメージもあった。

3）【運動を続けるための要因】

このカテゴリーでは、《時間的余裕》、《家族や仲間の存在》、《運動習慣を確立させる意欲》、《運動に必要な身なりを整えること》、《運動による効果や成果の実感》、《自分に合った運動をする》の6サブカテゴリーで構成された。「勤め中は時間的余裕がなかった」というように、退職を迎えて《時間的余裕》ができたことが要因となっていた。また、「参加したら友達がおるしね」というように、《家族や仲間の存在》することが運動継続の意欲に繋がっていたり、「生活習慣の一環として行いたい」というように、運動が生活習慣の一部となることが《運動習慣を確立させる意欲》となっていた。中には、「スポーツ的な服装を持っている」というように、《運動に必要な身なりを整えること》で、運動習慣を継続できたり、「運動したら血糖値が下がった」というように、《運動による効果・成果の実感》し、《自分に合った運動をする》ことが、運動習慣を継続する要因となっていた。

4）【健康を意識した生活】

このカテゴリーでは、《食生活の是正》、《定期的な運動習慣がある》、《自己の健康管理》の3サブカテゴリーで構成された。「甘いものを少し控えるのが大事」というように、《食生活を是正》したり、「毎日10分、これだけはしている」というように《定期的な運動習慣》を行って健康に対して意識しながら、「積極的に検査を受けるようにしている」というように《自己の健康管理》を行っている生活を実践していた。

Ⅳ．考　察

2010年に策定されたスポーツ立国戦略[8]では、成人の週1回以上のスポーツ実施率を65％程度にすることを目標に掲げている。しかし、「体力・スポーツに関する世論調査（平成25年）」[9]によると、成人のスポーツ実施率は約43％であり、特に若年層は各世代の中でもスポーツ実施率が著しく低い。また、近年若年層において生活習慣病の割合が増加していることから、成人の運動に対するイメージや運動習慣の継続に対する考え方をもとに、スポーツ実施率を高める支援策が必要とされている。

20歳～40歳代のグループにおいては、運動に対してマイナスのイメージが多かった。例えば、《仕事が忙しい》や《運動は辛い》などで、働き盛りや子育てで《時間的制限》のある世代であるため、【体力低下の認識】を持ちつつも、敢えて運動を始めようとは思っておらず、むしろ【生活の中に取り込む運動】にあるように、特別な運動を継続的に行うのではなく、通勤や子育ての中に運動を取り込んでいる意識がある。定期的な運動習慣を持っている若年世代が全体の2割前後であるということや、若年世代からの生活様式が影響し、年齢を重ねるにつれて生活習慣病に罹患することを考えると、生活の中に取り入れられていると意識されている運動では、生活習慣病予防に対しては効果的であるとは言えない。仕事や子育ての時間を有効に利用でき、かつ生活習慣病予防に効果的な運動の方法やきかっけを提供する支援が必要である。中添ら[10][11]は、45歳未満の人は健康に関心を持っていても、日常生活上の最優先課題ではないために予防的保健行動につながりにくいと報告している。本研究におけるインタビューからも【生活の中に取り込む運動】カテゴリーが生成され、《勤め中は時間的余裕がなかった》、《退職》により時間的余裕ができたなどの意見が聞かれた。就労や子育て世代では、仕事や子育てが優先されるため、新たに健康習慣を構築するのではなく、食生活の改善や通勤をしながら運動量を増やすといった従来の日常生活を大きく変えずにより良い生活をおくるための工夫が必要であると考えられる。

一方、50～60歳代のグループにおいては、《運動が嫌い》《辛い》などのマイナスイメージと、《健康のために良い》《楽しい》などのプラスのイメージがある。仕事や子育てが一段落したことにより、生活の中に時間的余裕が生まれたことによって、自分の健康や楽しみのために運動を行っていきたいと考えている。この世代に対しては、《現在の健康が思わしくない》ことがきっかけとなることから、自分の健康に対して関心があるため、運動を行うことによって、自分の健康にどのように良い影響があるのかの情報提供を行うことが必要であると考える。また、《知人からの勧め》や《経済的に負担が少

ないこと》がきっかけとなることから、安価に運動を行うことで、地域のコミュニティーを形成でき、かつ楽しいと思えるような運動の場や機会を提供する支援が必要である。魚里ら[12]は、地域の人々と交流する人々は健康意識や保健行動が高く、地域住民が積極的に参加できる内容、主体性をもって活動できる場所と機会の提供をし、その活動をPRする工夫が望まれると報告している。地域社会のつながりの希薄さが問題になってきている今日、身近な施設を活用して整備される活動の場と、そこで営まれる住民による手作りの活動を推奨する自治体もあり、地域住民が自助的、自発的に参加できる健康への取り組みが重要であると考えられる。

これまでも、運動実践を左右する要因として、社会的要因・心理的要因・環境的要因という3つの側面が言われている[13]。今回の調査からも、《仲間とのコミュニケーション》、《一緒に行う仲間やパートナー》が【運動を始めるきっかけ】や【運動を継続する要因】となったことから、これらは社会的な側面として考えられる。また、《楽しい》、《運動習慣を確立させる意欲》が【運動に対するイメージ】や【運動を継続する要因】となったことから、心理的な側面として考えられる。《費用が安価である》や《日常的な近隣の情報源》が【運動を始めるきっかけ】となったことから、環境的要因として考えられる。これらの3つの側面を支援するように、住民のニーズに沿った地域施設の一般開放[14]や、健康教室、公開講座の企画、看護系大学が健康情報サービススポットとして宣伝や催事の実施[15]、自治体など地域と連携した住民への周知が実施可能な一支援ではないかと考えられる。

Ⅴ．研究における限界と課題

本研究で得られたデータは、研究対象者の回想によるものであり、実際の運動習慣の状況と対象者が捉えていることとは異なる可能性は否定できない。また、一自治体の限られた人数の対象者によるニーズ調査結果であり、数値による調査の妥当性を統計学的理論に基づいて評価することは困難である。今後、妥当性と信頼性を保つには、フォローアップアンケートを実施し、データを評価したり、量的研究を組み合わせて比較するなどの方法を利用して、さらに検討していく必要がある。

Ⅵ．謝　辞

本研究にご協力いただいた熊取町民の皆様、またご協力いただいた大学関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

Ⅶ．参考文献

1）生活習慣病予防活動支援モデル事業報告書．日本看護協会，2008.
2）平成24年　国民健康・栄養調査結果の概要．厚生労働省
3）黒川博史，中野未知子，石原多恵他：非肥満の若年男性集団における運動習慣の関心度と運動習慣の促進要因・阻害要因との関連，大阪医科大学看護研究雑誌，4巻，41-49，2014.
4）黒川博史：若年成人男性におけるメタボリックシンドローム予防のための運動の行動変容に関する文献学的考察，大阪医科大学看護研究雑誌，4巻，3-9，2013.
5）安梅勅江：フォーカスグループインタビュー法　科学的根拠に基づく質的研究の展開，医歯薬出版会社，東京，1-40，2001.
6）安梅勅江：グループインタビュー法Ⅱ　活用事例編　科学的根拠に基づく質的研究法の展開．東京，医歯薬出版株式会社，16-19，2003.
7）Berelson B.（1952）/稲葉三千男（1957）：内容分析.東京，みすず書房.
8）文部科学省；スポーツ立国戦略－スポーツコミュニティ・ニッポン－，2010.
9）文部科学省；体力・スポーツに関する世論調査，2013〈http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2013/08/23/1338732_2.pdf〉
10）中添和代，斉藤静代，松村千鶴，森口靖子：予防的保健行動をとる人の健康意識と生活習慣，香川県立医療短期大学紀要，第2巻，123-128，2000.
11）大池明枝，中添和代，大浦まり子他：高齢化が進行している団地の健康教室の意義，香川県立保健医療大学紀要，第4巻，69-75，2007.
12）魚里明子，森田智子，小出水寿英：P市県民交流広場参加者の保健行動と健康意識の実態調査，関西看護医療大学紀要，第5巻，第1号，28-36，2013.
13）健康運動実践指導者　養成用テキスト．東京，南江堂.
14）蔵本文乃，中谷啓子，岩屋裕美：地域住民の学習ニードに即した公開講座のあり方に関する研究　内容分析による健康に関する学習ニードの検討を通して，東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集21号，23-35，2012.
15）菱沼典子，石川道子，高橋恵子他：看護大学が市民に開いた健康情報サービススポットの広報活動，聖路加看護学会誌，11巻1号，76-82，2007.

Sutdy Report

Factual analysis for having interests in health promotion and habituation of physical exercising

Makoto TSUKUDA　Akihito KOJIMA　Mizuho Ii　Reiko ISHINO

Kansai University of Health Sciences Faculty of Nursing

Abstract

Purpose: The purpose of this study is identifying the causes of lack of exercise and making concrete public health promotion plan for adult.

Method: In this study, we divided the interviewees into two groups: Group A: people aged from 20 to 49 (n=6) and Group B: people aged from 50 to 60 (n=7). Taking the dictation of the interviewees, we carried out "Focus Group Interview, FGI," to each group. We analyzed the data extracted from the interviews using Berelson's content analysis method.

Results: We classified the answers from the group A into four categories: motivation to start exercise, importance of exercise, factors of physical exercise habituation, and health-conscious lifestyle. This group shows physical exercise habituation requires the condition of having enough time available and people working together. From the answers of group B, we extracted six categories: exercise in their daily life, awareness of reduction in physical strength, motivation to start exercise, factors of physical exercise habituation, importance of exercise, and health-conscious lifestyle. This group shows awareness of their recent reduction in physical strength although they try to have exercise in daily life.

Consideration: For establishing and keeping habitual exercise, it would be important for the people to satisfy their needs about the following issues: sense of belonging to a community, existence of family and friends, enough time to spare for physical exercise, desire for habituation of physical exercise, and realizing the result of exercise.

To support their habitual exercise, we should provide information and active supports for them, in cooperation with the local administrative organ, and feedback the results about the activity to the residents.

Key Word：interests in health promotion, habituation of physical exercising, cooperating with local community, Focus Group Interview

平成25年度　関西医療大学大学院保健医療学科　保健医療学専攻修士論文

本年度は、関西医療大学大学院院保健医療学科、保健医療学専攻の第II期修了生7名を送り出すこととなりました。以下に示すように、専攻分野はさまざまですが、各々の大学生が充実した論文を発表することが出来ました。これらの修士論文は2013年度関西医療大学大学院修士論文集として出版され、本学図書館において閲覧可能です。

関西医療大学大学院　平成25年度大学院保健医療学科　修士論文（保健医療学専攻）一覧

学位	修了生	修士論文・副題	主査
第11号	植　村　祐　一	「古医書からみた交会穴についての考察」	近　藤　哲　哉
第12号	織　田　育　代	「顔の筋肉に対する等尺性運動が及ぼすアンチエイジング効果－フェイシャルエクササイズの客観的評価－」	樫　葉　　均
第13号	片　岡　　新	「合谷穴への経穴刺激理学療法の抑制テクニックが母指球筋、短母指外転筋に対応した脊髄神経機能に与える影響－F波を用いた検討－」	坂　口　俊　二
第14号	髙　橋　　護	「集毛鍼刺激が脊髄前角細胞の興奮性に与える影響－刺激部位による違い－」	木　村　研　一
第15号	髙　橋　優　基	「聴覚刺激の刺激間隔の変化に対するリズムの予測が筋電図反応時間に及ぼす影響」	深　澤　洋　滋
第16号	前　田　剛　伸	「手指対立運動の運動イメージが上肢脊髄神経機能の興奮性に及ぼす影響－イメージ想起能力を用いた検討－」	谷　口　　亘
第17号	山　本　吉　則	「運動頻度の違いが体性感覚機能に及ぼす影響について－短潜時体性感覚誘発電位を用いた検討－」	大　島　　稔

平成25年度　関西医療大学附属保健医療施設の活動状況について

附属保健医療施設の基本理念

私たちの診療所・施術所は、統合理念のもと、

1．心身一如、“こころ”と“からだ”を元気にする全人的な医療
2．「未病」から難病までの治療とケアの探究
3．安心で、安全なチーム医療と地域連携の実現
4．幅広い保健医療の知識を持ち、人にやさしい学生の育成

をめざします。

本学は平成25年4月から大学の保健医療学部に臨床検査学科が新設され、保健医療学部はり灸・スポーツトレーナー学科、理学療法学科、ヘルスプロモーション整復学科の3学科と合わせて、4学科へ、保健看護学部看護学科と併せて2学部5学科とまさにメディカル・プロフェッショナル総合大学としてふさわしく、大幅に改組・改編されました。大学院は保健医療学研究科保健医療学専攻（修士課程）として新たに第2期修了生7名を送りだしました。

このような大学の急速な進歩のなかで、本学附属保健医療施設は、地域医療機関として地域住民の医療および健康増進に貢献すること、一方で、東洋と西洋医療の融合を中心とした学部生、大学院生、卒後研修員などの臨床教育、研究センターそして卒後研修の場として、また、専門医療職従事者や臨床研究者の育成の拠点として発展することが求められています。平成23年4月以降、附属診療所、附属鍼灸治療所・サテライト和歌山鍼灸治療所および附属接骨院の全施設をまとめて関西医療大学附属保健医療施設として統合され、東洋医療と西洋医療との調和を図るべくお互いに連携して医療、臨床教育・研修ならびに研究ができるセンターとして、更に充実発展してきました。

今後も、本学の建学の精神「社会に役立つ道に生き抜く奉仕の精神」（本学創始者武田武雄）を忘れることなく、地域の住民の皆様方に安心して利用して頂ける保健医療施設の充実を目指して努力致したいと考えています。

Ⅰ．附属診療所の活動

（1）診療活動の現況

附属診療所（1階）は、一般診療所（内科、神経内科、外科、整形外科、皮膚科、心療内科、精神科、リハビリテーション科、漢方外来、婦人科、禁煙外来）、2階は鍼灸治療所（鍼灸治療科）として、地域医療に貢献してきました。

附属診療所では、西洋医学を中心に、従来から神経難病や慢性期疾患のリハビリテーションや漢方・鍼治療にも重点を置き、アルツハイマー病、パーキンソン病、脳血管障害など老年期慢性神経疾患にも積極的に取り組んでいます。メタボリックシンドロームとしての関連疾患：肥満、睡眠時無呼吸症候群、高血圧症、糖尿病、慢性腎臓病（chronic kidney disease：CKD）、さらに、関節・運動器疾患やスポーツ障害、それに伴う慢性疼痛など、それぞれの専門医が高度な医学知識をもって、診断．治療ならびにリハビリテーションに取り組み、地域医療への貢献を目指しています。

また、東洋医学に関しては、総合診療科として漢方外来を設け、漢方エキス剤を中心に治療を行っております。ジストニアに対しては、西洋医療の神経内科医、理学療法士、そして東洋医療の鍼灸師が連携した東洋、西洋一体の臨床研究チームをつくり、全国から来られる患者さんに対応しております。その他、企業検診、熊取町と提携した脳ドック、肺炎球菌ワクチン接種などにも取り組み、また、糖尿病外来、禁煙外来、ものわすれ外来など特殊外来も専門医により行われています。

（2）教育・研修活動

はり灸・スポーツトレーナー学科の4年次の学生は、附属診療所実習Ⅰ，Ⅱにおいて、医師の診療行為（臨床検査を含む）を見修し、運動器疾患や神経疾患などにみられる慢性疼痛に対する鍼灸治療の適応と禁忌を判断する能力を高め、また、医の倫理についても学ぶことを目的としています。それには、高齢者の背景にある多臓器疾患を見落とさない医学的素養と医療機関と連携し強調できる能力を身に着けられるよう配慮しています。またその際、当日の担当者の指示に従い、白衣、上履きを着用し、清潔な身なりなど患者と接する際の医療従事者としてのマナーや医の倫理についても学べるよう指導しています。患者さんに対する挨拶や応答が適切にできるよう厳しく指導しています。

同様に、理学療法学科や保健看護学科の学生につ

いても、各指導教員のもとで、臨床現場で患者さんと直接接することで、面接技術や医療技術を学習し、意欲的に取り組めるよう臨床実習が組まれています。

臨床研修に関しては、大学院生や研修員としての臨床研究や卒後研修を積極的に推進するため、研究員・研修員制度を運用しています。

（3）診療体制の充実と地域連携

診療所事務室に地域医療連携室を置き、地域医療機関とも連携を深め、地域住民の健康増進に役立つことを願い、本学医療施設の発展に努めています。一方、熊取町には、本学以外に京大原子炉実験所、大阪体育大学ならびに大阪観光大学の四つの大学があり、大学間の連携した取り組みの中で、京大原子炉実験所で開発された癌に対するホウソ補足療法（BNCT）が、極めて選択的に癌細胞のみを破壊する斬新な治療法として注目を集めています。京大をはじめ、文部科学省、大阪府、熊取町など産官学の連携で加速器を設置して、全国に広める計画が進行しており、本学も医療系大学として学生の講義に取り入れ、教員も含め学習に取り組むなど、地域の医療機関としての協力を積極的に進めています。原子炉の職員の見学会や治療実験への診療所医師の見学参加が計画されています。

Ⅱ．附属鍼灸治療所・サテライト和歌山鍼灸治療所

（1）活動の現況

附属鍼灸治療所では、各曜日に担当鍼灸師を配し従来の鍼灸施術を初め、現今の医療機器を用いた新しい施術方法を行い、多様化している症状に対応できる施術を提供しています。また、サテライト鍼灸治療所和歌山に於きましても、大学附属鍼灸治療所と同様の施術水準を保持しつつ第1、3土曜に限定したレディース専科を設置し、婦人科領域並びに美容鍼灸においては、デリケートな精神面でのカウンセリングも行っています。また、ライフスタイル、とりわけ食生活（食養）の改善指導をはじめアロマを用いた補完・代替医療を併用したトータルな施術を提供しています。

（2）教育・研修活動

教育活動では、最終学年に至るまでの3年間で培われた、知識・技術の総括として鍼灸臨床の現場を体験させています。施術前に医療面接を実際に行わせることで、コミュニケーションをどのようにすれば、患者様とのラポールが形成できるのかを実地訓練しています。さらに、鍼灸の適応・不適応疾患の判別も研修させ、多様化している症状を東洋医学の見地からどのように理解し、施術に結びつけていくのか等を学べるよう指導しています。そのためには、鍼灸臨床に望まれる教育の効果を向上させる目的で適切な教員配置を行っています。大学院生の臨床実習の場としても、自主性を尊重しつつ、指導教員による適切な指導を、現役学生同様に行っています。

臨床研修においては、本学既卒者や他の大学．養成施設校の既卒者のみならず、さらにJICAを通じてブラジル、アルゼンチン等諸外国からの鍼灸臨床研修生を幅広く受け入れ、担当教員による充実した指導が行われています。

（3）治療体制

日本古来の鍼灸施術方法である『はり』『きゅう』に止まらず、様々な鍼灸仕様の現代的な低周波治療器、低出力レーザー、種々の温熱刺激装置などを配置し、卒業生が就職先の治療院で直ぐに扱えるように指導しています。その際は、最新の機器を用いた施術のオペレーションの治療体制を採用しています。

Ⅲ．接骨院

（1）沿革と活動の現況

附属接骨院は関西医療大学保健医療施設の一つとして平成23年2月に開設され、2年が経過しました。地域住民の健康増進に主眼を置き、通常の接骨院としての業務範囲である外傷の治療だけでなく、その後のフォローや予防ということで運動指導の資格（健康運動指導士・健康運動実践指導者）を持ったスタッフによる運動指導も積極的に導入して、トータルに健康増進を図れる施設として活動しております。その努力もあり、大学周辺の地域住民の方々に徐々に本院の活動が認知されてきたと考えています。

開設時から一貫して、できるだけ患者様に「自ら身体を治す」という意識を高めていただくため、マッサージなどの徒手療法や物理療法だけの施術で

終わることなく、積極的に運動療法を取り入れ、患者さんが能動的に施術に参加できるスタイルをとっています。

肩こり、腰痛予防体操など健康教室を定期的に開催し、地域住民と連携をはかり利用者の拡大に努めております。

（2）教育・研修活動

附属接骨院ではヘルスプロモーション整復学科4年次に実施される臨床実習を受け入れています。カリキュラムでの時間数が少ない（年間45時間）ため、2～3名1グループで実施し、一般の患者さんに対して受付から問診、施術プラン（主に運動療法）の作成など段階を経て指導していきます。特に本学科では健康運動実践指導者やスポーツプログラマーなどの資格も取得できることより、附属接骨院での施術スタイルは将来的にそれを活かせるようなものを提示しています

また、大学院生の実習の受け入れや次年度からは卒後臨床研修施設の認可を受け、研修生の受け入れも可能となり、よりニーズにあった教育・研修施設にすることを心がけています。

（3）診療体制

地域に密着した接骨院であるために、できるだけ多くの患者さんに対して施術の機会があるように受付時間は9時から18時30分まで（土曜日は12時まで）、予約なしで接骨院専属スタッフ1名が中心となって、常時1～3名体制で施術を行っています。平成26年度より診療時間、体制を変更の予定です。詳しくはホームページを参照してください。

平成24年度より運動（エクササイズ）指導を本格導入し、運動指導の資格保持者を中心に通常の施術とは別（保険適応外、実費、予約制）に、地域の健康増進にも寄与しています。平成26年度も引き続き運動指導を計画的に行っていきます。

平成25年度　人文・自然科学ユニット研究活動状況

A．構成メンバー

中村　正信、亀　　節子、吉田　仁志、王　　財源、中吉　隆之

B．研究活動の概要

平成24年度より開始された王　財源准教授を研究代表者とする共同研究（研究課題名：中医哲学思想にみる生命観の文献的研究　鍼灸美容における「美」意識について）が、平成25年度末で終了した。

本研究は、古代実践医学の集大成で「気」の思想を基盤として構築された『黄帝内経』に記される従来の理論体系をさらに昇華させ、そして「美」を創り出すための実践医学として、古代文献にみる「美」意識を始めとする、鍼灸による「美」の実践方法とその理論を、先人らの文献資料に基づいて客観的に明らかにし、中国伝統医学に基づく古典医学理論と、美容における「美」の創出方法との関係を考察することで、古代中国医学における「美」の宇宙観や世界観の一端を明らかにするとともに、東洋医学を基盤とした鍼灸美容理論の構築や臨床実践等、今後の鍼灸学が果たすべき役割について提言した。

C．研究業績

1．著書・原著

王　財源，大形　徹：鍼灸美容にみえる「美」意識についての考察，全日本鍼灸学会誌，63（2），123-131，2013.

王　財源，中吉　隆之，遠藤　宏：七表八裏九道脈における数（數）脈の検討，関西医療大学紀要，7，1-7，2013.

中吉　隆之：国家試験問題から学ぶ臨床の要点，東洋医学臨床論第9回，医道の日，72（9），160-161，2013.

2．総　説

Kame, S. : Signification de la ≪Leçon sur Tchouang-tseu≫ au Japon, Acupuncture & Moxibustion, 12（1），73-75，2013.

3．学術講演・学会発表

王　財源：中国伝統医学における鍼灸美容の文献的検討，大阪府立大学人文学会，大阪，2013．5

王　財源：中国明朝期の針手技“焼山火”と“透天涼”の文献的検討，第6回日本中医学会学術総会，大阪，2013．5

王　財源，大形　徹：中国伝統医学における鍼灸美容の文献的検討―『黄帝内経』にみえる「美」―，第62回全日本鍼灸学会学術大会，福岡，2013．6

王　財源：中国医学に基づいた鍼灸美容の実際，第65回日本良導絡自律神経学会学術大会，沖縄，2013．10

中吉　隆之，王　財源，坂本　辰徳：七表八裏九道の脈の文献的検討　なぜ祖脈である「数脈」が含まれていないのか，第62回全日本鍼灸学会学術大会，福岡，2013．6

平成25年度　基礎医学ユニット研究活動状況

A．構成メンバー

内田　靖之、大島　　稔、大西　基代、樫葉　　均、東家　一雄、戸田　静男、深澤　洋滋（五十音順）

B．研究活動の概要

本ユニットは研究の専門領域が互いに異なる教員で構成されているため、今年度も個々の教員が既に確立している研究テーマと研究活動を尊重するという方針に基づいて研究を行った。

C．研究業績

1．著　書

松原勝美、和泉克典、大島稔、澤田規（編）：柔道整復師国家試験 過去問題＋要点テキスト<2014年版>　第1版　久美出版　2013年発行　p. 1-491

2．総　説

特になし

3．原　著

Kiguchi N1, Kobayashi Y, Kadowaki Y, Fukazawa Y, Saika F, Kishioka S.: Vascular endothelial growth factor signaling in injured nerves underlies peripheral sensitization in neuropathic pain. J Neurochem. 2013 Nov 21. doi: 10.1111/jnc. 12614.

Okamoto M, Yamaoka M, Takei M, Ando T, Taniguchi S, Ishii I, Tohya K, Ishizaki T, Niki I, Kimura T. : Endogenous hydrogen sulfide protects pancreatic beta-cells from a high-fat diet-induced glucotoxicity and prevents the development of type 2 diabetes. Biochem Biophys Res Commun. 2013 Dec 13; 442（3-4）：227-33. doi: .1016/j.bbrc. 2013. 11. 023.

植村祐一、戸田静男：『鍼灸甲乙経』からみた交会穴についての考察、関西医療大学紀要、2013，7：8-16

4．学会発表

橋本佑香、新谷摩奈美、北川洋志、百合邦子、木村研一、坂口俊二、増田研一、内田靖之：アロマオイル吸引が自律神経活動と皮膚電気刺激閾値に及ぼす影響―心拍変動解析と皮膚感覚の主観的評価―、第62回全日本鍼灸学会学術大会（福岡）、2013．6

内田靖之、加藤淳司、増田研一、吉村雅文、下河内洋平、島洋祐：大学生サッカー選手におけるフィジカル要素の傾向――一部リーグ所属選手とユニバーシアード候補選手の比較―、第24回日本臨床スポーツ医学会学術集会（熊本）、2013．10

樫葉均、清行康邦：サブスタンスPとエンケファリンに応答する脊髄後角ニューロン、第62回全日本鍼灸学会学術大会（福岡）、2013．6

梅本英司、白忠彬、蔡林君、竹田彰、東家一雄、駒井豊、Punniyakoti T. Veeraveedu、秦枝里奈、杉浦悠毅、末松誠、奥平真一、青木淳賢、宮坂昌之：オートタキシン／リゾホスファチジン酸は、リンパ節高内皮細静脈の基底膜におけるリンパ球の通過を制御する、第37回日本リンパ学会総会（福岡）、2013．6

戸田静男：『鍼灸阿是要穴』からの是要穴、奇穴、経穴の意義についての考察（第四報）、第64回日本東洋医学会学術総会（鹿児島）、2013．6

植村祐一、戸田静男：古医書からみた交会穴についての考察、第62回全日本鍼灸学会学術大会（福岡）、2013．6

5．報告、その他

若山育郎、石崎直人、斉藤宗則、鶴浩幸、深澤洋滋：2012 WFAS鍼灸国際シンポジウム参加報告、全日本鍼灸学会誌　2013，62（2）：132-140

深澤洋滋：国試から学ぶ臨床の要点　第7回、医道の日本、2013，72（7）：168-169

深澤洋滋：2013年度WFAS総会および学術大会開催、医道の日本、2014，73（1）：170

6．科研費

樫葉均（研究代表者）、大島稔、内田靖之：平成23-25年度文科省科学研究費補助金（基盤研究C　継続）（H23-H25年度：507万円）、研究課題名：末梢神経障害による下行性疼痛抑制系の変調と神経因性疼痛

平成25年度　臨床医学ユニット研究活動状況

A．構成メンバー

吉益　文夫、吉田　宗平、郭　　哲次、紀平　為子、黒岩　共一、近藤　哲哉、中峯　寛和、山本　博司、谷口　　亘、遠藤　　宏、鍋田　理恵、池藤　仁美、百合　邦子

B．ユニットの研究活動について

Ⅰ．神経変性疾患におけるROS因性疼痛メカニズムの解析（谷口）

フリーラジカルに代表される活性酸素種（Reactive Oxygen Species :ROS）は生体防御反応などにおいて重要な働きをする必要不可欠なものである。一方、その過剰な生成は生体に様々な病的状況をもたらす。近年、ROSは難治性の神経障害性疼痛にも関与していると種々の研究が報告している。我々は、ROSは脊髄膠様質細胞の興奮性シナプス伝達を過剰に増強させることをラット脊髄スライスにパッチクランプ法を用いて明らかにした（Nishio, Neuroscience 2013）。さらにその機序は脊髄膠様質細胞に入力している一次感覚神経中枢端に存在するTRPV1・TRPA1チャネルを活性化し、グルタミン酸の遊離を増強することであることも明らかにした。このようなROSによる脊髄後角の興奮性シナプス伝達の増強作用は最終的に神経可塑的変化や中枢性の痛覚過敏を引き起こすと考えられる。しかし、実際の神経障害性疼痛の原因がROSが脊髄後角における神経可塑的変化を導いた結果かどうかは不明である。そこで本年度は神経障害性疼痛モデルラットを作成し、in vivo パッチクランプ法を適用し、神経障害性疼痛とROSの因果関係を解析した。神経障害性疼痛モデルには第5腰神経を結紮したSNLモデルを作成し、処置後1週間後に実験に用いた。SNLモデル群は自発性の興奮性シナプス後電流（sEPSC）の頻度・振幅の平均値がともにshamモデル群と比べて、有意に上昇していた。さらにこのsEPSCの増強はTRPA1選択的拮抗薬を灌流投与することで抑制できることが明らかになった。一方、スライス実験ではROSのEPSC増強効果を抑制できたROS scavengerの一種であるPBNを灌流投与してみたが、sEPSCを抑制できなかった。そこでSNLモデル作成時に、髄腔内に浸透圧ポンプを用いて持続的にPBNを注入する群を作成し、sEPSCを記録した。その結果、この群は無処置のSNLモデル群と比較して、sEPSCの頻度・振幅の平均値が有意に低下していることが判明した。以上の結果から、末梢神経障害がおこると脊髄後角でROSの過剰生成が起こり、これがTRPA1チャネルを活性化することで脊髄後角の神経可塑性を引き起こすことが示唆された。一方、神経障害性疼痛が完成してしまった段階ではROSはすでに濃度が低下しているか、あるいはTRPA1の活性化が恒常的になっているためにROSを除去してもsEPSCの抑制を認めないのではないかと推察された。本研究結果から、脊髄後角におけるROSは末梢神経障害性疼痛の発生機序の一因であると考えられた。またROS scavengerの早期投与は末梢神経障害性疼痛の予防、TRPA1選択的拮抗薬の投与は治療薬として有望であると考えられた。

Ⅱ．痛みの臨床研究

1．耳体鍼の鎮痛メカニズムの解明（吉田）
―パーキンソン病患者の腰痛に対する耳介療法の有効性について―

パーキンソン病患者さんは痛み閾値が低く、そのため多くの痛みを有している。パーキンソン病における痛みの頻度は、ガイドラインでは、“軽いものも含めると約半数のパーキンソン病患者でみられ、強い症状は数％の症例にみられる”とされているが、これまでの報告では38～83％まで、多くの研究結果が存在する。ことに2000年以降、約400症例以上の検討が4つ報告されているが、そのデータからは、約60～70％のパーキンソン病患者に痛みが存在すると推察される。とある。また、痛みをパーキンソン病に関連したもの（PD pain indirect）では、主に骨関節炎による下肢の痛みが多く、Non-PD painでは腰痛が多いことが指摘されている。（武田篤．ガイドラインサポートハンドブック　パーキンソン病：医薬ジャーナル：2011．pp161-164.）。

一方耳鍼の作用には痛み緩和がある。耳介への侵害刺激は、古代エジプトに発祥起源をもつ伝承医療である。主に腰痛や歯の鎮痛を目的に使用されてきた。現在臨床研究においても癌性疼痛、片頭痛などといった様々な疼痛への耳介療法での介入がみうけられ、慢性腰 痛(Hunter RF, McDonoughSM,Bradbury I, et al:Exercise and Auricular Acupuncture for Chronic Low-Back Pain: A Feasibility Randomized-controlled

Trial.Clin J Pain. 2012 Mar-Apr; 28 (3): 259-67. Wang SM, DezinnoP, LinEC, etal. : Auricular acupuncture as a treatment for pregnant women who have low back and posterior pelvic pain:a pilot study.Am J Obstet Gynecol. 2009 Sep ; 201 (3): 271. e1-9. Epub 2009 Jun 26. etc.) に関しても幾つかの報告がみられる。

耳鍼に関しては以前より検討をおこなってきた。**Yuri K, and Yoshida S**: Open trial of ear acupuncture for sleep disturbances of nurses working night shifts – Assessment of sleep /wake patterns using a wrist actigraphy, Int Integrative Med, 2013, 1, 10. **Yoshida S**, Sakamura T: Wrist-actigraphic estimation of factors influencing on the sleep efficacy and average effectiveness for daily performance of the ten males, complaining of sleeplessness. The Bulletin of Kansai University of Health Sciences , 2008, 2: 67-73.

今回の研究ではパーキンソン病患者さんの抱える痛みのうち、腰痛に焦点を絞り、耳介療法前後での痛み閾値の変化を検証する。対象はパーキンソン病と診断され、現在神経内科に通院している者。定期的に通院が可能な者でパーキンソン病以外の重篤な疾患を有していない者とする。主観的評価としてJOACMEQ（腰痛評価：日本整形外科学会）、ADL-SIAS-UPDRS統合調査票、客観的評価としてPain Vision（閾値変化）、アクティグラフ（AMI：行動計）を用いて評価を行っていく。

現在、本学診療所に通院中のパーキンソン患者さんに「パーキンソン病患者の腰痛に対する耳鍼療法の有効性について」の臨床研究の主旨説明を行い、自主的参加を募っている。逐次、クロスオーバー試験への導入を図って行く方向で検討している。研究場所は、鍼灸治療所治療室の16、17番の大学院実習共有の部屋を利用して行う予定である。

２．痛みの心身医学（近藤）

研究の倫理審査を申請したが、鍼灸治療に伴う事故が起こった場合の対応を明記する指示があり、保険について検討中である。共同研究者の池藤や田中研修鍼灸師が現在柔整鍼灸協同組合の斡旋で加入しているあいおいニッセイ同和損保のイＡ型保険は、自宅治療所を契約場所にしている場合、そのままでは本学での事故に対応できないが、出張治療を行うという形で対応できないか問い合わせ中である。なお、日本治療協会の会員になることによる賠償責任保険では、治療費の対価として施術する場合でなければ補償されず、謝礼を払って行う本研究には適用されないことが判明した。

臨床研究中の事故に対応する保険としては下記のものがある。

[1]医療行為が原因な場合、[2]はり、きゅう、あん摩・マッサージ・指圧が原因な場合、[3]その他の場合の3つに大別され、[1]に対しては、被保険者（補償の対象者）は医療行為を行う者となる医師賠償責任保険で対応できる。[2]に対しては、はり、きゅう、あん摩・マッサージ・指圧行為を行う者が被保険者（補償の対象者）となるはり師、きゅう師、あん摩・マッサージ・指圧師賠償責任保険で対応できる。これは、はり師、きゅう師、あん摩・マッサージ・指圧の業務中の事故につき保険金を支払う保険であり、有償・無償を問わない。上記[1]、[2]以外の場合、つまり研究者の指示ミス、計画ミスによる損害は、臨床研究賠償責任保険で対応できる。これの被保険者は本臨床研究に関わる研究者ならびに医療機関である。本研究においては団体経由で[2]に加入することで十分だと考えられるが、[3]の必要性についても引き続き検討を行う。

熊取町健康課には研究の趣旨を既に説明した。その結果、被験者を熊取町の長生会で募集する予定となった。100名程度は集まることが予想されている。この募集は、用いる保険が決定し次第、開始する予定である。

Ⅲ．痛みの疫学研究―地域住民の慢性疼痛疾患と酸化ストレス（紀平）

大島健診の概要

１．研究目的

紀伊半島南部では1950-1960年代にALSの多発が認められたが、最近は発症年齢の高齢化や発症率が他地域の2-3倍程度に低下するなど疫学的変化が認められている。これらの変化に環境・生活習慣など外的要因の関与が推察されるが、その具体的な内容は必ずしも明らかではない。本研究では紀伊半島南部大島においてALS発症頻度の低下と関連して1960年代と現在とで生活・食習慣にどのような変化が認められたかを検討した。

２．研究方法

本年度は、紀伊半島南部の大島地区住民および対照地区住民（紀伊半島北部山間部など）を対象とした住民健診結果、頭髪元素分析結果および生活・食習慣の

変化に関する自記式アンケート結果を解析した。さらに当地域の食品、生産物水（山水、飲用水）を採取し、その元素分析を三重県環境保全事業団に依頼し測定した。

倫理面への配慮について、生体試料採取や臨床・個人情報収集に際して倫理的側面に充分配慮し、文書を用いた説明と本人の自由意志による同意を得てから実施した。本研究は関西医療大学倫理審査委員会で承認を得た（10-03）。

３．研究結果のまとめと考察

本研究への参加者は大島地区71名（男性15名、女性56名、平均年齢76.2 ± 8.2歳）、対照地区10名であった。

食習慣のアンケート調査では、大島住民、対照地区住民ともに1960年代に比較して近年は食品流通の広域化、食生活の西欧化、野菜サラダの摂取頻度の増加が認められた。本アンケート結果と健診結果の検討から、「野菜サラダをよく食べる」と回答した住民は、身体測定結果と認知症検査で高得点を示した（各々 $p<0.05$）。食生活の欧米化・多様化により、抗酸化物質やビタミン類の摂取量の増加や干物など過酸化脂質の制限がこれらに関与したと推察された。

毛髪中の金属含量と生活・食習慣の関連では、化学処理のない頭髪の放射化分析を実施し、生活習慣のアンケート結果との関連を分析した。K-ALS患者の頭髪中にVとMnの高値を認めた（各 $p < 0.05$）。頭髪中VやMn値はAl値と正相関し，漬け物摂取や畑仕事の頻度と関連が認められた（$p < 0.05$）。本地域ALS患者ではこれら遷移金属による酸化的ストレス増大の関与が推察された。

2013年秋に収集したK地域の米，天草，ひじき，ウツボ揚げ煮，切り干し大根，鯨皮，唐辛子，オクラ，シシトウ，なす漬け物，キュウリ漬け物の11品目についてV，Al，Ca，Mg，FeおよびZn含量を測定した。分析は三重県環境保全事業団に依頼し、食品衛生検査指針（理化学編　厚生労働省監修　2005）に基づきﾏｲｸﾛｳｪｰﾌﾞ加熱分解-ICP発光分析法を実施した。K地域の上記食品11品目の内，ひじきや天草中のV含量が高い値を示した。

４．結　論

紀伊半島串本地域のALS患者頭髪中に遷移金属であるVやMnの高値を認め，これら金属元素による酸化的ストレスの増大が推察された。飲用水中のCa含量が極めて低い環境下で畑仕事や海産物摂取の頻度が高い生活・食習慣と関連してVやMnが体内に蓄積した可能性が考えられた。

Ｃ．構成メンバーの業績

（中峯の平成25年10月以降の業績は除く。）

１．著書・原著等

鈴木俊明，米田浩久，谷埜予士次，高崎恭輔，谷万喜子，鬼形周恵子，吉田隆紀，文野佳文，浦上さゆり，若山育郎，**吉田宗平**：経穴刺激理学療法の効果に関する基礎的検討―尺沢への抑制手技が母指球筋のＦ波および自律神経機能に与える影響―，理学療法学，2013, 40, 136-137

Jonathan K.Foster (2009)／**郭　哲次**（訳）（2013）：記憶（MEMORY . A very short introduction）、星和書店、東京 2013

T Kihira, K Okamoto, **S Yoshida**, et al: Environmental Characteristics and Oxidative Stress of Inhabitants and Patients with Amyotrophic Lateral Sclerosis in a High-incidence Area on the Kii Peninsula, Japan, Internal Medicine, 2013, 52, 1479-1486

Kiyohara C, Miyake Y et al. Collaborators (40) **Kihira T**, et al: MDR1 C3435T polymorphism and interaction with environmental factors in risk of Parkinson's disease: a case-control study in Japan, Drug Metab Pharmacokinet, 2013, 28, 138-43

T Kihira, I Sakurai, **S Yoshida**, I Wakayama, K Takamiya, Y Nakano, R Okumura, S Wada, K Iwai, K Okamoto, Y Kokubo and S Kuzuhara: Neutron activation analysis for trace elements in scalp hair of patients with ALS, KUR report, 2013,

紀平為子，櫻井威織，**吉田宗平**，若山育郎，高宮幸一，中野幸廣，奥村良，和田幸子，岩井恵子，岡本和士，小久保康昌，葛原茂樹：放射化分析による多発地ALSの毛髪中元素濃度定量-第2報-，放射化分析研究会，2013, 69-71

Kondo T, Yanagida M, Kame S: Traditional Chinese Patterns in Psychosomatic and Psychiatric Medicine, International Journal of Integrative Medicine, 2013, 1(15), 81-94

Kondo T, Kawamoto M: Acupuncture and moxibustion

for stress-related disorders, Biophychosocial Medicine, 2014, 8(1), 7

中峯寛和: 病因．悪性リンパ腫，血液9（新しい診断と治療のABC 79）．畠 清彦編．最新医学 別冊．最新医学社，大阪市，2013, pp. 50-59（8月）

Miyagawa F, Fukumoto T, Yurugi S, **Nakamine H**, Asada H: CD8+ primary cutaneous peripheral T-cell lymphoma in an 18-year-old woman, J Dermatol, 2013, 40, 571-572

Suzuki Y, Yoshida T, Wang G, Aoki T, Katayama T, Miyamoto S, Miyazaki K, Iwabuchi K, Danbara M, Nakayama M, Horie H, **Nakamine H**, Sato Y, Nakamura N, Niitsu N: Incidence and clinical significance of aberrant T-cell marker expression in diffuse large B-cell lymphoma cells, Acta Haematol, 2013, 130, 230-237

谷口亘，吉田宗人，中塚映政:【慢性疼痛と原因療法】P2X 受容体を介した慢性疼痛メカニズムと鎮痛，臨床整形外科，2013, 48(12), 1169-1174

谷口亘，中塚映政: 第2章　痛みのメカニズムと最新治療1, 痛みのメカニズム「先端医療シリーズ44　臨床医のための最新整形外科」，2013, 51-54, 先端医療技術研究所

谷口亘，中塚映政: 1章総論 5. 炎症痛のメカニズム　痛みのScience ＆Practice シリーズ2「痛みの薬物治療」，2013, 58-66, 文光堂

Nishio N, **Taniguchi W**, Sugimura YK, Takiguchi N, Yamanaka M, Kiyoyuki Y, Yamada H, Miyazaki N, Yoshida M, Nakatsuka T: Reactive oxygen species enhance excitatory synaptic transmission in rat spinal dorsal horn neurons by activating TRPA1 and TRPV1 channels, Neuroscience, 2013, 247, 201-212

百合邦子: 国家試験から学ぶ臨床の要点東洋医学臨床論第5回/坂川慎二: 医道の日本 VOL. 72, NO5. 2013, 東京，医道の日本社，2013, 164-165

２．研究班報告書等

小西哲郎，藤田麻衣子，園部正信，上野聡，楠進，藤村晴俊，永井伸彦，中野智，挟間敬憲,松永秀典，**吉田宗平**，船川格: 平成24年度近畿地区におけるスモン患者の検診結果，厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）スモンに関する調査研究，平成24年度　総括・分担研究報告書，2013, 49-52

吉田宗平，**紀平為子**，鈴木俊明，中吉隆之: 和歌山県スモン患者における日常生活動作（Baethel index）の長期推移と背景因子について，厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）スモンに関する調査研究，平成24年度　総括・分担研究報告書，2013, 144-148

吉田宗平，鈴木俊明，中吉隆之: 立位で中殿筋のトレーニングが歩行機能の改善を認めたスモン患者について，厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）スモンに関する調査研究，平成24年度　総括・分担研究報告書，2013, 196-198

紀平為子，**吉田宗平**，梶本賀義，石口宏，廣西昌也，坂本繁，小久保康昌，葛原茂樹，辻省次: C9ORF72遺伝子の異常伸張を有する紀伊ALS症例の臨床的特徴について，厚生労働科学研究費補助金　難治性疾患等克服研究事業　三重県南部に多発する家族性認知症-パーキンソン症候群 発症因子の探索と治療介入研究班　平成24年度　総括・分担研究報告書　平成25年3月，24-26

紀平為子，岡本和士，**吉田宗平**，江上いすず，岩井恵子，和田幸子，小久保康昌，葛原茂樹: 紀伊半島南部ALS多発地域における生活・食習慣の変化に関する検討，厚生労働科学研究費補助金　難治性疾患等克服研究事業　三重県南部に多発する家族性認知症-パーキンソン症候群 発症因子の探索と治療介入研究班　平成24年度　総括・分担研究報告書　平成25年3月，33-36

吉田宗平，**紀平為子**，尾野精一，小久保康昌，葛原茂樹，石浦浩之，辻省次: C9orf72 expansionを伴った紀伊ALSの一自験例の臨床・疫学的特徴について，厚生労働科学研究費補助金　難治性疾患等克服研究事業　三重県南部に多発する家族性認知症-パーキンソン症候群 発症因子の探索と治療介入研究班　平成24年度　総括・分担研究報告書　平成25年3月，27-29

岡本和士，**紀平為子**，江上いすず，小久保康昌，葛原茂樹: 紀伊半島南部ALS多発地帯における栄養摂取量の経時的変化に関する検討，厚生労働科学研究費補助金　難

治性疾患等克服研究事業　三重県南部に多発する家族性認知症-パーキンソン症候群 発症因子の探索と治療介入研究班　平成24年度　総括・分担研究報告書　平成25年3月, 37-40

紀平為子, 村田顕也, 溝口功一, 伊東秀文: 和歌山県における在宅人工呼吸器使用患者と神経難病患者の災害対策に関する検討, 希少性難治性疾患患者に関する医療の向上及び患者支援のあり方に関する研究班　平成24年度　総括・分担研究報告書　平成25年3月, 289-291

３．学術講演・学会発表

（中峯の平成25年10月以降の業績は除く。）

吉田宗平, **紀平為子**, 上田高志, 上林雄史郎, 八瀬善郎: GuamALS/PDC mixed caseの疫学像の変遷と疾病学的意義の再評価, 第54回日本神経学会学術大会, 東京, 2013, 5

紀平為子, 岡本和士, **吉田宗平**, 江上いすず, 岩井恵子, 和田幸子, 小久保康昌, 葛原茂樹: 紀伊半島南部ALS多発地域における生活・食習慣の変化に関する検討, 第54回日本神経学会学術大会, 東京, 2013, 5

鈴木俊明, 山下彰, 文野住文, 鬼形周恵子, 谷万喜子, 浦上さゆり, 若山育郎, **吉田宗平**, 才藤栄一, 藤原哲司: 脳血管障害片麻痺患者の筋緊張亢進の要因に関する誘発筋電図のよる検討, 第54回日本神経学会学術大会, 東京, 2013, 5

鈴木俊明, 谷万喜子, 田中健一, 大崎美香, 高橋譲, **吉田宗平**: 難治性の頸部ジストニア患者に対する頸部深層筋への鍼治療効果―上頭斜筋、下頭斜筋への置鍼による検討―, 第62回全日本鍼灸学会学術大会, 福岡, 2013, 6

田中健一, 谷万喜子, 鈴木俊明, **吉田宗平**: 頸部ジストニア対する鍼治療とハンガー反射の効果　頸部回旋筋の表面筋電図を用いての検討, 第62回全日本鍼灸学会学術大会, 福岡, 2013, 6

鈴木俊明, 鬼形周恵子, 米田浩久, 文野住文, 谷万喜子, 浦上さゆり, **吉田宗平**: パーキンソン病の体幹傾斜の原因は、中殿筋、多裂筋、腸肋筋にある。―組織硬度計による検討―, 第7回　パーキンソン病・運動障害疾患コングレンス, 東京, 2013, 10

鈴木俊明, 文野住文, 鬼形周恵子, 谷万喜子, 浦上さゆり, **吉田宗平**, 才藤栄一, 藤原哲司: 脳血管障害片麻痺患者の非麻痺側上肢脊髄神経機能の特徴―H波出現様式の変化、およびF波波形による検討―, 第43回日本臨床神経生理学会学術大会, 高知, 2013, 11

Yoshida S, Ueda T, Uebayashi Y, **Kihira T**, Yase Y: Reappraisal of the nosological significance of ALS-PDC mixed cases on Guam, 24th international symposium on ALS/MND, Milan, Italy, 2013, 12

Suzuki T, Tani M, Inoue H, Wakayama I, **Yoshida S**, A novel method of acupuncture on writer's cramp, Second international congress on treatment of Dystonia,　Hannover, Germany, 2013, 5

Tameko Kihira, Iori Sakurai, **Sohei Yoshida**, et al: Transitional metal in scalp hair and lifestyle of ALS patients and residents in the Kii Peninsula, Japan –the second report–, 24rd International symposium on ALS/MND, Milan, Italy, 2013, 12

川島基子, 吉野孝, 江上いすず, 岡本和士, 藤原奈佳子, 石川豊美, **紀平為子**, 入江真行, 伊井みず穂: Web上のレシピ情報を用いて自動生成した栄養計算用料理データの分析, 平成25年度情報処理学会関西支部大会, 大阪, 2013, 9

川島基子, 吉野孝, 江上いすず, 岡本和士, 藤原奈佳子, 石川豊美, **紀平為子**, 入江真行, 伊井みず穂: 栄養指導システムのための料理データ作成支援システムの開発, 第33回医療情報学連合大会, 神戸, 2013, 11

岩井恵子, 大橋純子, 伊井みず穂, 岡本和士, **紀平為子**: 超限界集落における住民の生活実態について（第一報）－生活の現状と主観的幸福感－, 日本看護科学学会, 大阪, 2013, 12

伊井みず穂, 岩井恵子, 大橋純子, 岡本和士, **紀平為子**: 超限界集落における住民の生活実態について（第2報）, 日本看護科学学会, 大阪, 2013, 12

近藤哲哉: 音楽性幻聴の一症例, 日本東洋医学会関西支部例会, 京都, 2013, 10

中峯寛和: 検査入門．細胞形質（免疫染色、フローサイトメトリー），第6回若手医師のためのリンパ腫セミナー，第53回日本リンパ網内系学会総会，京都市，2013, 5

國冨あかね，小谷槙一，右京直哉，直川匡晴，小野一雄，**中峯寛和**: 急性骨髄性白血病発症時に高齢者EBV関連びまん性大細胞型 B 細胞非ホジキンリンパ腫を認めた一例，第53回日本リンパ網内系学会総会，京都市，2013, 5

中峯寛和，山川光徳，吉野正: Langerhans細胞肉腫（LCS）からみた樹状細胞腫瘍および類縁疾患鑑別のためのアウトライン，第102回日本病理学会総会，札幌市，2013, 6

石田英和，和田勝也，清水誠治，小西登，**中峯寛和**: 消化管に発生したびまん性大細胞型B細胞性リンパ腫の臨床病理学的検討，第102回日本病理学会総会，札幌市，2013, 6.

中峯寛和，榎本泰典，森田剛平: CD5陽性B細胞とリンパ腫，第28回悪性リンパ腫治療研究会，岡山市，2013, 4

Taniguchi W, Nishio N, Takiguchi N, Yamanaka M, Kiyoyuki Y, Sakurai Y, Abe T, Mine N, Miyazaki N, Yoshida M, Nakatsuka T: Activation of TRPV1 channels is involved in knee osteoarthritis pain -in vivo patch-clamp analysis-, 43rd Annual Meeting of Society for Neuroscience, San Diego, 2013, 11

Abe T, **Taniguchi W**, Miyazaki N, Mine N, Takiguchi N, Yamanaka M, Yoshida M, Nakatsuka T: Patch-clamp analysis of anti-spasticity effect by baclofen in spinal ventral horn neurons, 43rd Annual Meeting of Society for Neuroscience, San Diego, 2013, 11

Kiyoyuki Y, Yamanaka H, Kobayashi K, **Taniguchi W**, Nishio N, Okubo M, Nakatsuka T, Noguchi K: Leukotriene enhances NMDA induced inward currents of dorsal horn neurons in spinal cord of rats after peripheral nerve injury, 43rd Annual Meeting of Society for Neuroscience, San Diego, 2013, 11

櫻井悠加，**谷口亘**: 神経障害性疼痛モデルラットに対する鍼刺激の鎮痛機序-in vivoパッチクランプ法による解析-，第62回全日本鍼灸学会学術大会，福岡，2013, 6

谷口亘，瀧口登，山中学，西尾尚子，吉田宗人，中塚映政: TRPV1は変形性膝関節症を増強する-in vivoパッチクランプ法を用いた解析-，第11回整形外科痛みを語る会，郡山，2013, 7

谷口亘，瀧口登，山中学，西尾尚子，清行康邦，櫻井悠加，吉田宗人，中塚映政: TRPV1チャネルを介した変形性膝関節症性疼痛-in vivo パッチクランプ法を用いた解析-，第35回日本疼痛学会，大宮，2013, 7

清行康邦，山中博樹，小林希実子，**谷口亘**，西尾尚子，大久保正道，中塚映政，野口光一: ロイコトリエンは末梢神経損傷後に脊髄後角ニューロンのＮＭＤＡ受容体の反応性を増加させる，第35回日本疼痛学会，大宮，2013, 7

谷口亘，瀧口登，山中学，西尾尚子，峰巨，阿部唯一，宮崎展行，吉田宗人，中塚映政: TRPV1チャネルは変形性膝関節症性疼痛を増強する-in vivoパッチクランプ法を用いた解析-，第28回日本整形外科学会基礎学術集会，千葉，2013, 10

阿部唯一，中塚映政，**谷口亘**，瀧口登，峰巨，山中学，宮崎展行，吉田宗人: 脊髄前角細胞に対するバクロフェンの抗痙縮メカニズム－patch ‐ clamp法による解析－，第28回日本整形外科学会基礎学術集会，千葉，2013, 10

谷口亘，杉村弥恵，山中学，西尾尚子，曽根勝真弓，吉田宗人，中塚映政: 情動中枢の帯状回は脊髄後角に下行性疼痛賦活系を形成する，第6回日本運動器疼痛学会，神戸，2013, 12

清行康邦，山中博樹，小林希美子，**谷口亘**，大久保正道，中塚映政，野口光一: ロイコトリエンは末梢神経損傷後に脊髄後角ニューロンのNMDA受容体の反応性を増加させる，第6回日本運動器疼痛学会，神戸，2013, 12

西尾尚子，**谷口亘**，三宅悠介，清行康邦，山中学，曽根勝真弓，阿部唯一，瀧口登，吉田宗人，中塚映政: ラット脊髄膠様質ニューロンの興奮性シナプス伝達に及ぼすCGRPの作用，第35回脊髄機能診断研究会，東京，2014, 02

阿部唯一，**谷口亘**，峰巨，山中学，曽根勝真弓，西尾尚子，宮崎展行，中塚映政，吉田宗人: 脊髄前角細胞におけるバクロフェンの抗痙縮メカニズム－patch ‐ clamp法によ

る解析－, 第35回脊髄機能診断研究会, 東京, 2014, 02

小島賢久, 江川雅人, 野口栄太郎, **鍋田理恵**, 笹岡知子, 鍋田智之: 臨床鍼灸師と鍼灸師養成施設教員の実技評価に関する検討, 第62回全日本鍼灸学会学術大会, 福岡, 2013, 6

百合邦子, 坂口俊二, **鍋田理恵**, 久下浩史, 若山育郎: 若年女性の冷え症に対する温筒灸治療の検討―膝陽関（ＧＢ33）と三陰交（ＳＰ6）との比較―, 第62回（社）全日本鍼灸学会学術大会（九州大会）, 福岡市, 2013, 6

４．社会活動・その他

（中峯の平成25年10月以降の業績は除く。）

紀平為子, **吉田宗平**, 他: C9ORF72遺伝子の異常伸長を有する紀伊ALS2症例の臨床的特徴について, 厚生労働科学研究費補助金　難治性疾患等克服研究事業　三重県南部に多発する家族性認知症-パーキンソン症候群 発症因子の探索と治療介入研究班　平成24年度班会議　平成25年1月5日, 愛知県産業労働センター

紀平為子, 岡本和士, **吉田宗平**, 江上いすず, 岩井恵子, 和田幸子, 小久保康昌, 葛原茂樹: 紀伊半島南部ALS多発地域における生活・食習慣の変化に関する検討, 厚生労働科学研究費補助金　難治性疾患等克服研究事業　三重県南部に多発する家族性認知症-パーキンソン症候群 発症因子の探索と治療介入研究班　平成24年度班会議　平成25年1月5日, 愛知県産業労働センター

岡本和士, **紀平為子**, 江上いすず, 小久保康昌, 葛原茂樹.紀伊半島南部ALS多発地帯における栄養摂取量の経時的変化に関する検討　厚生労働科学研究費補助金　難治性疾患等克服研究事業　三重県南部に多発する家族性認知症-パーキンソン症候群 発症因子の探索と治療介入研究班 平成24年度班会議, 平成25年1月5日, 愛知県産業労働センター

吉田宗平, **紀平為子**, 尾野精一, 小久保康昌, 葛原茂樹, 石浦浩之, 辻省次: C9orf72 expansionを伴った紀伊ALSの一自験例の臨床・疫学的特徴について, 厚生労働科学研究費補助金　難治性疾患等克服研究事業　三重県南部に多発する家族性認知症-パーキンソン症候群 発症因子の探索と治療介入研究班　平成24年度班会議, 平成25年1月5日, 愛知県産業労働センター

伊東秀文, 村田顕也, **紀平為子**, 浜野幸雄, 西嶋和代, 植木隼人: 和歌山県における在宅人工呼吸器使用神経難病患者の実態と非常用電源確保, 希少性難治性疾患患者に関する医療の向上及び患者支援のあり方に関する研究班会議, 平成25年12月12日, ＪＡ共済ビルカンファレンスホール

紀平為子: 平成24年度特定疾患医療相談会「防災対策について考えよう-災害・緊急時に備えて」, 和歌山市保健所, 平成25年1月19日

紀平為子: パーキンソン病関連疾患の療養生活について, 平成24年度難病医療相談事業　岩出保健所, 平成25年1月21日

紀平為子: 串本町健康相談「健康相談」, 平成25年3月4日, 田並公民館, 有田公民館, 江田公民館

紀平為子: パーキンソン病の最近の話題. 泉友会（パーキンソン病友の会）. 平成25年8月26日, 熊取交流センター煉瓦館

紀平為子: 紀伊半島南部の神経疾患と酸化的ストレス, 第1回南伊勢町公開講座, 2013年10月13日, 南伊勢町民文化会館, 三重県

近藤哲哉: 和歌山産業保健推進連絡事務所特別相談員, 第10期あん摩マッサージ指圧師、はり師及びきゅう師国家試験委員, 日本東洋医学会和歌山県部会事務局長, ハートフル漢方研究会世話人

中峯寛和: 他領域に比較したリンパ腫および関連疾患の診断学的特徴.「悪性リンパ腫診断学アップデート. 反応性病変からみたリンパ腫および類縁疾患の鑑別」, 第16回日本血液病理研究会セミナー, 京都市, 2013, 5

中峯寛和: 原発性中枢神経系リンパ腫-追加発言. 広島赤十字・原爆病院Lymphoma Summer Conference, 2013年7月27日, 広島市

中峯寛和: 理系研究者のデータ認識について： 悪性リンパ腫病理診断学の認識論的考察から（退任記念講演）, 第22回関西医療大学 研究交流会, 2013年8月19日, 大阪府, 泉南郡

中峯寛和: 悪性リンパ腫症例の診断解説と中央診断
◦日本病理学会病理診断コンサルテーションシステム（コンサルタント）
・期間：2001年12月1日 - 2015年3月31日
◦悪性リンパ腫治療研究会（病理コメンテーター）
・第28回（2013年4月20日，岡山市）
◦JINMLフォーラム・スライドセミナー（病理コメンテーター）
・第16回（2013年9月28日，東京都）
◦広島赤十字・原爆病院Lymphoma Summer Conference
・2013年7月27日，広島市
投稿原稿査読
・Pathol Int（日本病理学会雑誌）：1編（2回，第2, 3稿）

鍋田理恵:
はり師・きゅう師の養成における臨床実習前評価に関するワークショップ開催　平成25年8月23日（金）～24日（土）
主催：鍋田智之、小島賢久、江川雅人、野口栄太郎、鍋田理恵、笹岡知子
場所：森ノ宮医療大学、コスモスクエア国際交流センター
内容：日本学術振興会　科学研究費助成金　平成23年～25年　基盤研究（C）　課題番号：23501123　に関する経緯報告および模擬臨床実習評価の実施と検討

鍋田理恵: 平成26年2月19日　日本学術振興会　科学研究費助成金　平成23年～25年　基盤研究（C）　課題番号：23501123　に関する最終報告会

百合邦子, **吉田宗平**: パーキンソン病患者の腰痛にたいする耳介療法の検討, 奨励研究, 平成25年度

近藤哲哉: 職場のメンタル不調者の実態と対応事例，和歌山産業保健推進連絡事務所平成25年度第6回産業医等研修会, 和歌山, 2013, 8

近藤哲哉: 漢方が効果的だった数例，日本東洋医学学会専門医制度委員会和歌山地区教育講演会，和歌山，2013, 12

近藤哲哉: 新型うつ病の理解と職場の対応，和歌山産業保健推進連絡事務所平成25年度第6回産業医等研修会，和歌山, 2014, 2

近藤哲哉: あん摩マッサージ指圧師、はり師及びきゅう師国家試験委員会[方針決定及び出題依頼会議]，東京，2013, 7

平成25年度　鍼灸学ユニット研究活動状況

1．ユニットメンバー

錦織　綾彦，楳田　高士，川本　正純，吉備　　登，坂口　俊二，木村　研一，戸村　太郎，山﨑　寿也，北川　洋志

2．平成24年度活動報告

以下の各テーマに沿って，個人およびグループ研究（学外との共同研究含む）を行った。

＜楳田高士＞

1．鍼灸臨床でクリーンニードル鍼を用いて細菌学的安全性について検討してきた。その結果について26年に開催される全日本鍼灸学会愛媛大会で発表予定である。

2．鍼灸治療について，関西医療大学附属鍼灸治療所および近畿大学医学部附属病院疼痛制御センターで行ってきた鍼灸治療について「私のこだわりの治療法」というタイトルで執筆中である。今年度中に鍼灸臨床実習の教育に生かせるように参考文献を多くして完成させる予定である。

＜吉備　登＞

死期の迫った病人の良導絡測定をおこない，生前から死後にかけてのノイロメトリー測定結果を第65回日本良導絡自律神経学会学術大会で発表した。

＜坂口俊二＞

1．「若年女性の冷え症に対する温筒灸治療の検討－膝陽関（GB33）と三陰交（SP6）との比較研究－」については，若年女性の冷え症に対する膝陽関と三陰交への温筒灸治療は，何れも冷えを悪化させることなく，随伴愁訴を改善させることが示唆された。また，効果の発現時期や治療効果の持続について部位差が示唆された。本結果は，日本温泉気候物理医学会雑誌に受理された（第77巻3号［2014年5月末発刊］に掲載予定）。

2．「若年女性冷え症者の新たな評価指標の下肢血管反応異常の有無に対する妥当性の検討」については，若年女性を対象にした研究で，「冷え症」調査用問診票（寺澤変法）から下肢血管反応異常の有無を80％以上の精度で判別することが示唆された。本結果は，Biomedical THERMOLOGY 33 (2), 2013に掲載された。

3．月経随伴症状に対する鍼灸治療の効果の研究に関して，月経随伴症状に対する鍼灸治療は，短期的には婦人科疾患を有さない方が効果的であるが，婦人科疾患を有していても継続的に治療を行うことで，MDQの「痛み」の漸次減少や「水分貯留」，「行動の変化」などに効果のみられることが示唆された。本結果は，全日本鍼灸学会雑誌63 (4), 2013に掲載された。

＜木村研一＞

1．鍼刺激による下肢血流と筋交感神経活動への影響（文科省科研費（基盤C）研究課題番号：24590905 研究代表者）。

昨年度は安静時において足三里穴への鍼刺激と偽鍼刺激による筋交感神経活動への影響に関する実験を行った。現在も実験中である。今年度は新たに局所冷却時における実験を行う予定である。

2．低周波鍼通電刺激が筋酸素動態に及ぼす影響

異なる周波数の低周波鍼通電刺激が筋酸素動態に及ぼす影響について近赤外線分光法を用いた実験を行っている。現在も実験中である。

＜山﨑寿也＞

1．「延髄孤束核へのタンパク質直接導入法によるNOS（nNOS，eNOS）導入が意識下ラットの循環に及ぼす影響についての研究」に関して現在実験継続中である。

2．「関西医療大学での鍼灸実習時におけるリスクマネジメントについて～その取り組みと現状について～」は平成25年度全日本鍼灸学会学術大会で発表した。

3．「関西医療大学での鍼灸実習時の技術向上に対する取組み～計測カードを用いて～」を平成26年度全日本鍼灸学会学術大会で発表予定である。

＜北川洋志＞

1．トリガーポイント鍼刺激が及ぼす心血管系自律神経機能の研究

前脛骨筋中に存在するトリガーポイントへの鍼刺激は心臓迷走神経活動の指標と言われるHF成分を一過性に増加させた。以上の結果は“Spectral analysis of heart rate variability during trigger point acupuncture.”(Kitagawa Y, Kimura K, Yoshida S)と

して“Acupuncture in Med”に掲載された。

2．前脛骨筋以外の筋でも鍼刺激を行って反応性の違いの検討し，他の筋でも前脛骨筋と同様に心臓迷走神経活動の指標と言われるHF成分を一過性に増加させた。本結果は第63回全日本鍼灸学会学術大会で発表の予定である。

3．研究業績

1．著　書

楳田高士：鍼灸治療　森本昌宏編　肩こりの臨床　231-237　2013　克誠堂出版

高木久代，木村研一，西村甲，高木健．東洋医学で英語を学ぶ　第1版．医歯薬出版．2013

2．原　著

Kimura K, Takeuchi H, Yuri K, Wakayama I. Effects of nitric oxide synthase inhibition on cutaneous vasodilation in response to acupuncture stimulation in humans. Acupuncture in Med. 31. 74-80. 2013

Kitagawa Y, Kimura K, Yoshida S. Spectral analysis of heart rate variability during trigger point acupuncture. Acupuncture in Med. 32. 273-80. 2014

Tomura T, Yoshimasu K, Fukumoto J, Takemura S, Sakaguchi S, Miyai N, et al. Validity of a diagnostic scale for acupuncture: application of the item response theory to the five viscera score. Evid Based Complemen Alternat Med. Article ID 928089, 11 pages2013.

Hidefumi Waki, Sabine Gouraud, Mohammad Bhuiyan, Miwa Takagishi, Toshiya Yamazaki, Akira Kohsaka, and Masanobu Maeda. Transcriptome of the NTS in exercise-trained spontaneously hypertensive rats: implications for NTS function and plasticity in regulating blood pressure. Physiol Genomics. 45 (1) 58-67. 2013. 1

木村研一，若山育郎．鍼刺激や電子温灸による皮膚血流増加反応と一酸化窒素の関与．自律神経．50. 284-7. 2013

坂口俊二，久下浩史，竹田太郎，宮嵜潤二，小島賢久，森 英俊．判別分析による若年女性冷え症者の心身医学的特性．漢方と最新治療．22 (1)：252-9. 2013

中村真理，長崎絵美，米山 奏，坂口俊二．月経随伴症状に対する鍼灸治療の効果．全日鍼灸会誌．63 (4)：252-9. 2013

坂口俊二，久下浩史，森　英俊．若年女性冷え症者の起立試験による下肢血管反応異常の有無を冷え症に関連する自覚症状から予測できるか？．Biomed Thermol. 33 (2)：47-51. 2013

坂口俊二，久下浩史，森　英俊．若年女性冷え症の自律神経活動動態．自律神経．51 (1)：23-7. 2013

坂口俊二．国家試験問題から学ぶ 臨床の要点 (1). 医道の日．72 (1)：226-7. 2013

坂口俊二．あの技に名前をつけよう．医道の日．72 (2)：10-7. 2013

山﨑寿也．国家試験から学ぶ臨床の要点（3）．医道の日本．72 (3)：168-169. 2013.

3．学会発表

楳田高士，青野由紀：Real Time PCR法による鍼体付着C型肝炎ウイルスの定量について．第62回全日本鍼灸学会学術大会．2013. 6. 福岡

吉備　登，遠藤　宏，王　財源．生前から死後にかけてのノイロメトリー．第65回日本良導絡自律神経学会学術大会．2013. 6.　浦添市

Kimura K, Takeuchi H, Yuri K, Wakayama I. Nitric oxide synthase inhibition attenuates cutaneous vasodilation during warm moxibustion-like thermal stimulation in human. Society for Acupuncture Reaearch Conference. Ann Arbor, USA. 2013. 4

Kimura K, Takeuchi H, Yuri K, Wakayama I. Effects of nitric oxide synthase inhibition on cutaneous vasodilation in response to acupuncture stimulation in humans. 8th World Conference on Acupuncture. Sydney, Australia. 2013. 11

石田和也, 中村健, 木村研一, 高橋紀代, 神埜奈美, 田島文博. アイスパック時の交感神経活動と下肢血流. 第40回日本生体電気・物理刺激研究会. 京都. 2013. 3

北川洋志, 木村研一, 吉田宗平. トリガーポイントへの鍼刺激による自律神経活動の変化　心拍変動スペクトル解析を用いた検討. 第62回全日本鍼灸学会学術大会. 2013. 6. 福岡

中村真理, 坂口俊二. 後ろ向き調査により月経随伴症状に対する鍼灸治療の効果-婦人科疾患の有無による比較検討-. 第64回日本東洋医学会学術総会. 2013. 6. 鹿児島

坂口俊二, 久下浩史, 森 英俊. 若年女性の体位変換試験（起立試験）による下肢血管反応異常の有無を冷え症に関連する自覚症状から予測できるか？. 日本サーモロジー学会第30回大会. 2013. 6. 茨城

坂口俊二. 冷え症の診断におけるサーモグラフィの有用性－体位変換負荷試験（起立試験）による下肢血管反応からみた冷え症判定の有用性－. 第30回日本サーモロジー学会シンポジウム. つくば市. 2013. 6

池上典子, 辻 涼太, 久下浩史, 坂口俊二, 竹田太郎, 宮嵜潤二ら. 冷え症状尺度と月経随伴症状との関係性について. 第62回全日本鍼灸学会学術大会. 2013. 6. 福岡

中村真理, 張　照仙, 長崎絵美, 米山 奏, 坂口俊二. 後ろ向き調査による月経随伴症状に対する鍼灸治療の効果婦人科疾患を有する患者に着目した検討. 第62回全日本鍼灸学会学術大会. 2013. 6. 福岡

辻 涼太, 小島賢久, 池上典子, 久下浩史, 坂口俊二, 森 英俊. 女性の冷え症状に関する因子の検討 冷え・腰痛・月経症状の関係性について. 第62回全日本鍼灸学会学術大会. 2013. 6. 福岡

坂口俊二, 久下浩史, 戸村多郎, 若山育郎. 若年女性の冷え症に対する円皮鍼によるセルフケアの効果. 第62回全日本鍼灸学会学術大会. 2013. 6. 福岡

百合邦子, 坂口俊二, 鍋田理恵, 久下浩史, 若山育郎. 若年女性の冷え症に対する温筒灸治療の効果 膝陽関（GB33）と三陰交（SP6）との比較. 第62回全日本鍼灸学会学術大会. 2013. 6. 福岡

久下浩史, 宮嵜潤二, 坂口俊二, 佐々木和郎, 森 英俊. 日常生活活動を指標とした肩こり質問紙の作成. 第62回全日本鍼灸学会学術大会. 2013. 6. 福岡

戸村多郎, 坂口俊二, 中井一彦. 性・年代からみた五臓スコアによる証の特徴. 第62回全日本鍼灸学会学術大会. 2013. 6. 福岡

岩井元気, 坂口俊二. 前向きコホート研究による若年女性冷え症者の身体症状の検討. 第62回全日本鍼灸学会学術大会. 2013. 6. 福岡

橋本佑香, 新谷摩奈美, 北川洋志, 百合邦子, 木村研一, 坂口俊二ら. アロマオイル吸引が自律神経活動と皮膚電気刺激閾値に及ぼす影響-心拍変動解析と皮膚感覚の主観的評価-. 第62回全日本鍼灸学会学術大会. 2013. 6. 福岡

宮嵜潤二, 久下浩史, 坂口俊二, 佐々木和郎, 森 英俊. 日常生活活動を指標とした肩こりと調査紙の作成-肩痛と肩こりの被験者間関係と肩こり調査紙の再現性について-. 第49回東洋医学とペインクリニック研究会. 2013. 7. 大阪

山﨑寿他, 北川洋志, 坂口俊二, 楳田高士. 関西医療大学での鍼灸実習時におけるリスクマネジメントについてその取り組みと現状について. 第62回全日本鍼灸学会学術大会. 2013. 6. 福岡

山﨑寿也, Partha Das, 前田正信. ラット延髄孤束核へのタンパク質直接導入における慢性期での循環動態への影響. 第106回近畿生理談話会. 2013. 11. 奈良

４．その他

楳田高士. 長寿と健康. 熊取町ゆうゆう大学「はつらつ世代講座」. 熊取町. 2013. 8

楳田高士. リスク管理（あん摩マッサージ指圧師対象）25年度認定保険鍼灸マッサージ師専門講習会. 大阪府鍼灸マッサージ師会. 大阪市. 2013. 9

楳田高士. リスク管理（鍼灸師対象）25年度認定保険鍼灸マッサージ師専門講習会. 大阪府鍼灸マッサージ師会. 大阪市. 2013. 9

楳田高士. リスク管理（あん摩マッサージ指圧師・鍼灸師対象）25年度認定保険鍼灸マッサージ師専門講習会. 大阪府鍼灸マッサージ師会. 大阪市. 2014. 3

吉備　登. 良導絡治療の理論と実技. 関西運動器生涯研究会. 大阪市. 2014. 2

坂口俊二. 知熱感度測定に基づく皮内鍼による背部兪穴調整法（赤羽氏法）. 倉敷芸術科学大学生命科学部健康医療学科 特別講義. 岡山市. 2013. 6

坂口俊二. 夏の不調を乗り切るためのツボ刺激活用法. 熊取町公開講座. 熊取町. 2013. 7

坂口俊二. スポーツジムで心も体もリフレッシュセミナー. 警察共済組合和歌山県支部主催 健康づくりセミナー. 海南市. 2013. 11

坂口俊二. 手軽にできるツボ刺激－美と健康のために－. 第19回滋賀県看護学会特別企画. 草津市. 2013. 12

坂口俊二. 経穴部位国際標準化への歩みと今後の経穴研究. 大阪府鍼灸マッサージ師会平成25年度生涯研修会. 大阪市. 2014. 2

坂口俊二. 未病と養生. 平成25年度熊取ゆうゆう大学 ゆうゆう楽部「地域活動入門講座」. 熊取町. 2014. 2

坂口俊二. 冷え症に対する正しい知識と鍼灸治療. 全日本鍼灸学会関東支部認定A講座. 東京都. 2013. 5

坂口俊二. 知熱感度測定に基づく皮内鍼による背部兪穴調整法（赤羽氏法）. 倉敷芸術科学大学生命科学部健康医療学科 特別講義. 岡山市. 2013. 6

坂口俊二. 夏の不調を乗り切るためのツボ刺激活用法. 熊取町公開講座. 熊取町. 2013. 7

坂口俊二. スポーツジムで心も体もリフレッシュセミナー. 警察共済組合和歌山県支部主催 健康づくりセミナー. 海南市. 2013. 11

坂口俊二. 手軽にできるツボ刺激－美と健康のために－. 第19回滋賀県看護学会特別企画. 草津市. 2013. 12

坂口俊二. 経穴部位国際標準化への歩みと今後の経穴研究. 大阪府鍼灸マッサージ師会平成25年度生涯研修会. 大阪市. 2014. 2

坂口俊二. 未病と養生. 平成25年度熊取ゆうゆう大学 ゆうゆう楽部「地域活動入門講座」. 熊取町. 2014. 2

木村研一, 石田和也, 高橋紀代, 田島文博: 鍼刺激が下肢血流に及ぼす影響と筋交感神経活動の役割に関する研究 文科省科学研究費補助金（基盤研究C）平成24年～26年度

平成25年度　スポーツトレーナー学ユニット研究活動状況

1．ユニットメンバー

増田　研一、辻　　和哉、中尾　哲也、内田　靖之、山口　由美子

2．平成25年度活動報告

本ユニットの構成メンバーは学内外のスポーツ現場に出て活動する機会が多いこともあり、様々なトレーニング方法やコンディショニングの手法を指導もしくは実践する場合が多い。それらに関してできる限りの客観的なエヴィデンスをスポーツ現場にフィードバックすることを目的にして、主に下記の研究活動を継続して行っている。

- テーピングや各種物理療法など、スポーツ現場に於ける保存治療／コンディショニングの手法に関して、その効果発現のメカニズムを客観的に把握することを目的として様々なパラメーターを用いて検討すること。
- 予防医学的な観点から、様々なカテゴリーに於ける種々のスポーツ傷害の疫学的な調査を継続して、現場にフィードバックする試み。
- 高齢者の転倒予防などに繋がる積極的な運動療法や、その継続を目的とした各種コンディショニング方法の効果の検討。
- 種々のトレーニング方法やパフォーマンスに関して効果的な筋活動や禁忌となる事などを様々なパラメーターを用いて検討すること。

3．研究業績

学会／研究会発表

増田研一・他：慢性の足関節症状に対する低出力レーザーの効果～重心動揺性を指標にして～，第23回関西臨床スポーツ医・科学研究会，大阪，2013年6月

中尾哲也，増田研一・他：肩関節屈伸角度の違いが肩関節外転および内旋可動域に与える影響，第68回日本体力医学会，東京，2013年9月

中尾哲也・他：呼吸と運動のタイミング，第68回日本体力医学会，東京，2013年9月

中尾哲也・他：皮膚吸引による筋膜リリースが肩関節可動域に及ぼす影響，第68回日本体力医学会，東京，2013年9月

平成25年度　理学療法学ユニット研究活動報告

A．理学療法学ユニットの全体活動状況

1．平成25年度構成メンバー

鈴木　俊明、谷埜予士次、米田　浩久、吉田　隆紀、谷　万喜子、鬼形周恵子、文野　住文

2．研究計画ならびに研究費の申請と執行の経過

今年度の研究テーマは、

1）理学療法評価および治療法に関する神経生理学的・生体力学的研究
2）理学療法と鍼灸医学の考えを組み合わせた新しい治療法の開発と、その効果に関する神経生理学的研究
3）運動学習、運動イメージに関する神経生理学的研究
4）神経疾患に対する鍼治療効果に関する基礎および臨床研究

である。各メンバーが専門領域での研究を実施することができた。

平成25年度は、社団法人日本理学療法士協会から25万円の研究助成を受けた。

B．理学療法学ユニットの個人研究活動状況

（主に、平成25年度著書、論文等、学会報告、講演会など）

原　著

吉田隆紀、鈴木俊明：足関節捻挫後のパフォーマンス低下に対する新しい治療戦略　―捻挫後に生じる機能的不安定性に対する経皮的電気刺激の効果について，Sportsmed，149, 28-30, 2013

山下　彰、鈴木俊明、文野住文：健常者におけるヒラメ筋のH波，F波出現様式，理療科，28, 205-208, 2013

山本吉則、嘉戸直樹、鈴木俊明：手指反復運動の頻度が体性感覚誘発電位に及ぼす影響，理療科，28, 257-260, 2013

高橋優基、藤原　聡、鈴木俊明　他：意識的には認識できない小さなリズムの変化が予測に基づく反応運動に及ぼす影響，理療科，28, 249-252, 2013

山下　彰、鈴木俊明、文野住文：脳血管障害片麻痺患者における下肢のH波、F波出現様式，理療科，28, 563-567, 2013

佐々木英文、文野住文、鈴木俊明　他：母指屈曲運動の動作イメージが脊髄神経機能の興奮性に与える影響，理療科，28, 673-676, 2013

鈴木俊明、若山育郎、吉田宗平　他：経穴刺激理学療法の効果に関する基礎的検討―尺沢への抑制手技が母指球筋のF波および自律神経機能に与える影響―，理学療法学，40, 136-137, 2013

由留木裕子、鈴木俊明：ラベンダーの香りが上肢脊髄神経の興奮性に与える影響，理学療法学，40, 96-100, 2013

前田剛伸、嘉戸直樹、鈴木俊明：単純な手指の対立運動の運動イメージが上肢脊髄神経機能の興奮性に与える影響，理学療法学，40, 303-306, 2013

大川真美、森原　徹、鈴木俊明　他：上肢挙上不能な腱板広範囲断裂保存症例へのリハビリテーションアプローチへの検討，総合リハ，41, 863-867, 2013

三浦雄一郎、福島秀晃、鈴木俊明　他：前腕肢位が肩関節外旋運動に与える影響，総合リハ，41, 1037-1044, 2013

早田　荘、早田恵乃、鈴木俊明　他：肘関節肢位が肩関節外旋運動に及ぼす影響―超音波画像診断装置を用いた検討―，理学療法学，2013, 28, 731-734

井尻朋人、高木綾一、鈴木俊明：肩甲骨周囲筋における筋活動開始の順序性に関する研究，理学療法学，28, 783-786, 2013

鈴木俊明、文野住文、鬼形周恵子　他：運動イメージと脊髄神経機能，関西理学，13, 1-9, 2013

大沼俊博、谷埜予士次、鈴木俊明　他：体幹研究と理学療法，関西理学，13, 11-22, 2013

弓永久哲、山田勝真、鈴木俊明：他動的文字識別における上肢脊髄神経機能の興奮性の変化，関西理学，13, 59-64, 2013

池澤秀起、井尻朋人、鈴木俊明　他：腹臥位での下肢空間保持が非空間保持側の僧帽筋下部線維の筋活動に与える影響，関西理学，13, 65-71, 2013

大中礼香、野口翔平、鈴木俊明　他：パーキンソン病症例における側方体重移動時の体幹筋の筋活動パターンの検討，関西理学，13, 77-86, 2013

二五田美沙、早田恵乃、鈴木俊明　他：体幹筋の筋緊張低下により座位にて転倒傾向を認めた脳梗塞後左片麻痺患者に対する理学療法，関西理学，13, 95-101, 2013

楠　貴光、早田　荘、鈴木俊明　他：洗濯物干し動作において右肩関節前面に疼痛を認めた右上腕骨近位部骨折後患者に対する理学療法，関西理学，13, 111-120, 2013

伊藤　陸、貝尻　望、鈴木俊明　他：麻痺側上肢での包丁操作において食材の切断が困難であった脳梗塞後右片麻痺患者に対する理学療法，関西理学，13, 121-128, 2013

松本明彦、津江正樹、鈴木俊明　他：右上肢による排泄後の清拭動作が困難であった腰部脊柱管狭窄症にともなう腰椎後方固定術後患者への理学療法，関西理学，13, 126-136, 2013

吉田宗平、鈴木俊明、中吉隆之：立位で中殿筋のトレーニングが歩行機能の改善を認めたスモン患者について、厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）スモンに関する調査研究，平成24年度　総括・分担研究報告書，196-198, 2013

大沼俊博、渡邊裕文、鈴木俊明　他：立位時の体重側方移動と腹斜筋硬度の関係，生体応用計測，4, 49-53, 2013

Suzuki T, Bunnno Y, Onigata C, et al: Excitability of Spinal Neural Function during Several Motor Imagery Tasks Involving Isometric Opponens Pollicis Activity,NeuroRehabilitation, 33, 171-176, 2013

Suzuki T, Tani M, Onigata C, et al: Combination of Physical and Acupuncture Therapy: Acupoint Stimulation Physical Therapy (ASPT), International Integrative Medicine, 1, 115-118, 2013

Suzuki T, Bunnno Y, Onigata C,et al: Excitability of Spinal Neurons During a Short Period of Relaxation Imagery The Open General and Medicine Jornal, 6, 1-5, 2014

学会発表

由留木裕子、鈴木俊明、岩月宏泰：アロマテラピーの経験の違いが上肢脊髄神経機能の興奮性に与える影響，第48回日本理学療法学術大会，愛知，2013. 5

松井滉平、文野住文、鈴木俊明　他：最大収縮後の弛緩を利用したリラックスイメージが脊髄神経機能の興奮性に与える影響，第48回日本理学療法学術大会，愛知，2013. 5

米田浩久、實光　遼、鈴木俊明　他：分習法による課題志向型トレーニングは全習法による学習よりも学習効果を高めることが可能か？―学習時と検定時の投球結果による比較―，第48回日本理学療法学術大会，愛知，2013. 5

文野住文、鬼形周恵子、鈴木俊明　他：等尺性収縮を用いた母指対立運動の運動イメージ収縮強度が脊髄神経機能の興奮性に与える影響―10, 30, 50, 70%収縮強度における比較―，第48回日本理学療法学術大会，愛知，2013. 5

嘉戸直樹、伊藤正憲、鈴木俊明　他：上肢随意運動の適応学習の過程における対側上肢脊髄神経機能の興奮性の変化，第48回日本理学療法学術大会，愛知，2013. 5

實光　遼、米田浩久、鈴木俊明　他：バルーン上肢位座位保持での非利き手による下手投げ投球課題を基にした運動学習方法の違いによる体幹筋筋活動と総軌跡長の検討，第48回日本理学療法学術大会，愛知，2013. 5

高橋優基、藤原　聡、鈴木俊明　他：意識的には認識できない小さなリズムの変化が予測に基づく反応運動に及ぼす影響―基本間隔を延長したパターンによる検討―，

第48回日本理学療法学術大会，愛知，2013. 5

前田剛伸、嘉戸直樹、鈴木俊明：複雑性の異なる手指対立運動の運動イメージが上肢脊髄神経機能の興奮性に与える影響について，第48回日本理学療法学術大会，愛知，2013. 5

池澤秀起、高木綾一、鈴木俊明：腹臥位での下肢空間保持に対する抵抗負荷が肩甲骨周囲筋の筋活動に与える影響―下肢空間保持側と反対側の僧帽筋下部線維の筋活動に着目して―，第48回日本理学療法学術大会，愛知，2013. 5

鵜野亜矢、文野住文、鈴木俊明　他：座位姿勢の骨盤前後傾では後傾位の方が筋緊張が高い―組織硬度計による検討―，第48回日本理学療法学術大会，愛知，2013. 5

吉岡芳泰、谷埜予士次、鈴木俊明：膝伸展課題直後の等速性膝屈曲トルクとハムストリングスの筋活動，第48回日本理学療法学術大会，愛知，2013. 5

堀　大樹、米田浩久、鈴木俊明　他：抗精神病薬投与による維持期統合失調症患者の運動機能に及ぼす影響について，第48回日本理学療法学術大会，愛知，2013. 5

高木綾一、鈴木俊明、喜馬通博　他：セラピストの従業員満足度調査に関する報告，第48回日本理学療法学術大会，愛知，2013. 5

鈴木俊明、若山育郎、吉田宗平　他：脳血管障害片麻痺患者の筋緊張亢進の要因に関する誘発筋電図のよる検討，第54回日本神経学会学術大会，東京，2013. 5

鈴木俊明、谷　万喜子、吉田宗平　他：難治性の頸部ジストニア患者に対する頸部深層筋への鍼治療効果―上頭斜筋、下頭斜筋への置鍼による検討―，第62回全日本鍼灸学会学術大会，福岡，2013. 6

田中健一、鈴木俊明、吉田宗平　他：頸部ジストニア対する鍼治療とハンガー反射の効果　頸部回旋筋の表面筋電図を用いての検討，第62回全日本鍼灸学会学術大会，福岡，2013. 6

八坂純子、鈴木俊明：郄門穴への経穴刺激理学療法　短母指外転筋F波への影響，第62回全日本鍼灸学会学術大会，福岡，2013. 6

髙橋　護、谷　万喜子、鈴木俊明：築賓穴への2分間の集毛鍼刺激がヒラメ筋のH波に与える影響，第62回全日本鍼灸学会学術大会，福岡，2013. 6

片岡　新、鈴木俊明：合谷穴の経穴刺激理学療法が母指球筋の脊髄神経機構に与える影響―抑制テクニックF波における検討―，第62回全日本鍼灸学会学術大会，福岡，2013. 6

後藤勇太、谷　万喜子、鈴木俊明　他：ヒラメ筋筋腹への集毛鍼刺激がヒラメ筋H波に与える影響，第62回全日本鍼灸学会学術大会，福岡，2013. 6

鈴木俊明：短時間のリラックスイメージが脊髄神経機能の興奮性に与える影響―1分間，2分間での比較検討―，第50回日本リハビリテーション医学会学術集会，東京，2013. 6

鈴木俊明、文野住文、米田浩久　他：脳血管障害片麻痺患者における麻痺側母指球筋の筋緊張抑制方法に関する一考察―母指球筋の筋緊張に高度亢進を認めた一症例―，第25回大阪府理学療法学術大会，大阪，2013. 6

渡辺健太、井尻朋人、鈴木俊明　他：座面の高さの違いによる車椅子両下肢駆動における体幹・下肢筋活動について―足関節底屈位での駆動の分析―，第25回　大阪府理学療法学術大会，大阪，2013. 6

池田裕介、高木綾一、鈴木俊明：起立歩行動作と立ち上がり動作における殿部離床前の体幹運動と体幹筋活動の比較，第25回大阪府理学療法学術大会，大阪，2013. 6

野口翔平、岩淵順也、鈴木俊明　他：立位における一側下肢への側方体重移動時の体幹筋の筋活動パターンについて―多裂筋・最長筋・腸肋筋に着目して―，第25回大阪府理学療法学術大会，大阪，2013. 6

立石大樹、光田尚代、鈴木俊明　他：階段昇降動作と片脚スクワットの制御降下における下肢の筋活動の比較―大内転筋の筋活動に着目して―，第25回大阪府理学療法学術大会，大阪，2013. 6

北井大地、高木綾一、鈴木俊明：独歩の右遊脚初期に

おいて右前方への不安定性を生じた右大腿骨転子部骨折の一症例，第25回大阪府理学療法学術大会，大阪，2013. 6

實光　遼、高木綾一、鈴木俊明：端座位姿勢の改善により立ち上がり時の安定性向上を認めた腰椎圧迫骨折後方固定術術後患者の一症例，第25回大阪府理学療法学術大会，大阪，2013. 6

阿部祐里、高木綾一、鈴木俊明：右下肢降段動作にて右足底接地時に後方への転倒傾向を認めた第一腰椎圧迫骨折の一症例，第25回大阪府理学療法学術大会，大阪，2013. 6

川島康裕、高木綾一、鈴木俊明：足底感覚に基づく重心移動練習によりすくみ足の改善が見られたパーキンソン病の一症例，第25回大阪府理学療法学術大会，大阪，2013. 6

岩崎博史、高木綾一、鈴木俊明：麻痺側立脚中期から後期に股関節伸展、足関節背屈運動が減少し、歩行速度が低下した右被殻出血の一症例，第25回大阪府理学療法学術大会，大阪，2013. 6

大中礼香、井上隆文、鈴木俊明　他：パーキンソン病症例における側方体重移動時の体幹筋の筋活動パターンについて，第25回大阪府理学療法学術大会，大阪，2013. 6

大沼俊博、谷埜予士次、鈴木俊明　他：立位での踵部および前足部荷重における腹斜筋、多裂筋の筋活動について，第3回日本ボバース研究会学術大会，東京，2013. 7

山下　彰、鈴木俊明：下肢の誘発筋電図は脳血管障害片麻痺患者における痙縮と筋短縮を鑑別する指標になりうるか？，第3回日本ボバース研究会学術大会，東京，2013. 7

渡邊裕文、谷埜予士次、鈴木俊明　他：座位での側方リーチ動作における圧中心（COP）の変化と内腹斜筋の筋活動について，第3回日本ボバース研究会学術大会，東京，2013. 7

井尻朋人、高木綾一、鈴木俊明：肩関節内外旋角度の違いによる肩関節周囲筋活動の変化，第10回肩の運動機能研究会，京都，2013. 9. 27-28

鈴木俊明、鬼形周恵子、吉田宗平　他：パーキンソン病の体幹傾斜の原因は、中殿筋、多裂筋、腸肋筋にある。―組織硬度計による検討―，第7回　パーキンソン病・運動障害疾患コングレンス，東京，2013. 10

三浦雄一郎、福島秀晃、鈴木俊明　他：上肢側方リーチ動作における肩甲帯周囲筋の筋活動の特徴，第24回日本臨床スポーツ医学会学術集会，熊本，2013. 10

鈴木俊明、文野住文、鬼形周恵子　他：連続したリラックスイメージが脊髄神経機能の興奮性に与える影響，第53回近畿理学療法学術大会，京都，2013. 11

森井佑実、貝尻　望、鈴木俊明　他：端座位での胸腰部回旋角度の変化が腰部多裂筋、最長筋、腸肋筋の筋電図積分値に与える影響，第53回近畿理学療法学術大会，京都，2013. 11

末廣健児、鈴木俊明：視覚での運動観察の有無が脊髄神経機能の興奮性に及ぼす影響―F波に基づく検討―，第53回近畿理学療法学術大会，京都，2013. 11

伊藤　陸、貝尻　望、鈴木俊明　他：立位でのステップ肢位保持における支持側大殿筋上部線維と下部線維の筋電図積分値について，第53回近畿理学療法学術大会，京都，2013. 11

水口真希、谷　万喜子、鈴木俊明　他：尺沢穴・孔最穴への二点同時刺激による経穴刺激理学療法が母指球筋F波に与える影響―促通手技による検討―，第53回近畿理学療法学術大会，京都，2013. 11

松本明彦、楠　貴光、鈴木俊明　他：肩関節水平屈曲・伸展角度変化が上腕二頭筋と上腕三頭筋長頭の筋電図積分値相対値に及ぼす影響，第53回近畿理学療法学術大会，京都，2013. 11

池澤秀起、高木綾一、鈴木俊明：腹臥位での下肢空間保持における肩関節外転角度の変化が肩甲骨周囲筋の筋活動に与える影響，第53回近畿理学療法学術大会，京都，2013. 11

池田幸司、大沼俊博、鈴木俊明　他：端座位での側方

リーチ動作時におけるリーチ中殿筋、大腿筋膜張筋、大殿筋上部線維の筋活動順序に検する検討，第53回近畿理学療法学術大会，京都，2013. 11

高森絵斗、文野住文、鈴木俊明　他：麻痺側母指球筋に筋緊張亢進を呈した脳血管障害片麻痺患者に対する尺沢穴への経穴刺激理学療法の効果―刺激時間3分がF波に及ぼす影響―，第53回近畿理学療法学術大会，京都，2013. 11

橋谷裕太郎、早田　荘、鈴木俊明　他：立位での膝関節屈曲保持課題における内側広筋・外側広筋の筋活動及び膝蓋骨前額面上回旋角度変化量との相関について，第53回近畿理学療法学術大会，京都，2013. 11

二五田美沙、早田恵乃、鈴木俊明　他：端座位での側方体重移動保持における移動側股関節内転筋の筋電図積分値について，第53回近畿理学療法学術大会，京都，2013. 11

岡本雄大、佐々木元勝、鈴木俊明　他：立位における一側下肢への側方体重移動時のCOP変化と移動側足関節周囲筋の筋活動パターンについて，第53回近畿理学療法学術大会，京都，2013. 11

山口　彩、高木綾一、鈴木俊明：歩行中の方向転換における筋活動について―体幹・股関節に着目して―，第53回近畿理学療法学術大会，京都，2013. 11

吉田隆紀、谷埜予士次、鈴木俊明　他：足関節捻挫後の腓骨筋群トレーニング方法の検討―健常者のStar excursion balance test 中の下腿筋群の筋活動に着目して―，第53回近畿理学療法学術大会，京都，2013. 11

大沼俊博、渡邊裕文、鈴木俊明：立位での一側下肢への側方体重移動保持における多裂筋、最長筋、腸肋筋の筋硬度について，第53回近畿理学療法学術大会，京都，2013. 11

國枝秀樹、末廣健児、鈴木俊明　他：立位での前足部荷重における多裂筋、最長筋、腸肋筋の筋活動について，第53回近畿理学療法学術大会，京都，2013. 11

鈴木俊明、谷　万喜子、吉田宗平　他：脳血管障害片麻痺患者の非麻痺側上肢脊髄神経機能の特徴―H波出現様式の変化、およびF波波形による検討―，第43回日本臨床神経生理学会学術大会，高知，2013. 11

谷埜予士次、鈴木俊明：内側広筋斜頭および長頭に対応する伸張反射弓の興奮性についての検討，第43回日本臨床神経生理学会学術大会，高知，2013. 11

由留木裕子、岩月宏泰、鈴木俊明：ラベンダーの香りは上肢脊髄神経機能の興奮性を低下させる―F波による検討―，第43回日本臨床神経生理学会学術大会，高知，2013. 11

山本吉則、嘉戸直樹、鈴木俊明：非周期的な手指反復運動が短潜時体性感覚誘発電位に及ぼす影響，第43回日本臨床神経生理学会学術大会，高知，2013. 11

川島康裕、高木綾一、鈴木俊明：注意の学習療法と二重課題訓練により歩行時の躓きが改善した脳血管障害の一症例，リハビリテーション・ケア合同研究大会，千葉，2013. 11. 22-23

木下拓真、高木綾一、鈴木俊明：Panasonic社製デジタルミラーを用いて外部刺激による動作学習を図り歩行速度が改善した視床出血の一症例，リハビリテーション・ケア合同研究大会，千葉，2013. 11. 22-23

大崎美香、谷　万喜子、鈴木俊明　他：頚部右側屈・左回旋に着目し鍼治療一回により改善がみられた頚部ジストニアの一症例，平成25年度（公社）全日本鍼灸学会第33回近畿支部学術集会，大阪，2013. 11

髙橋　護、谷　万喜子、鈴木俊明　他：歩行時に右膝の疼痛に対して、鍼治療を用い歩行速度の改善がみられた一症例，平成25年度（公社）全日本鍼灸学会第33回近畿支部学術集会，大阪，2013. 11

生田啓記、谷　万喜子、鈴木俊明　他：太白への鍼刺激が膝関節伸展運動時における大腿四頭筋の筋機能に与える影響，平成25年度（公社）全日本鍼灸学会第33回近畿支部学術集会，大阪，2013. 11

佐々木英文、鈴木俊明：母趾屈曲運動の運動イメージが脊髄神経機能の興奮性に与える影響―木片を母趾にて把持することによる検討―，第22回日本柔道整復接骨医学会学術大会，東京，2013. 11

溝端直人、佐々木英文、鈴木俊明　他：母趾屈曲運動の運動イメージが脊髄神経機能の興奮性に与える影響―固有受容器の関連性について―，第22回日本柔道整復接骨医学会学術大会，東京，2013. 11

鈴木俊明：リラックスイメージ直後の脊髄神経機能の興奮性は増加する，第5回日本ニューロリハビリテーション学会学術集会，東京，2014, 2

国際学会

Suzuki T, Wakayama I, Yoshida S, et al：A novel method of acupuncture on writer's cramp, SECOND INTERNATIONAL CONGRESS ON TREATMENT OF DYSTONIA, Hannover, Germany, 2013. 5

Bunnno Y, Iwatsuki H, Suzuki T, et al：Excitability of spinal neural function during motor imagery of muscle contraction at different contraction strengths, The 6th Asia-Western Pacific Region Congress of the World Confederation for Physical Therapy & The 12th International Congress of Asia Confederation for Physical Therapy, Taiwan, 2013. 9

Tanino Y, Suzuki T：T wave in vastus medialis obliquus and vastus medialis longus muscles, The 6th Asia-Western Pacific Region Congress of the World Confederation for Physical Therapy & The 12th International Congress of Asia Confederation for Physical Therapy, Taiwan, 2013. 9

Yamashita A, Suzuki T, Bunnno Y：Characteristic appearances of H-reflex and F-wave of the soleus muscle under increasing stimulus intensity, The 6th Asia-Western Pacific Region Congress of the World Confederation for Physical Therapy & The 12th International Congress of Asia Confederation for Physical Therapy, Taiwan, 2013. 9

Yoshioka Y, Tanino Y, Suzuki T：Knee flexion torque and hamstrings activity immediately after knee extension at various angular velocities, The 6th Asia-Western Pacific Region Congress of the World Confederation for Physical Therapy & The 12th International Congress of Asia Confederation for Physical Therapy, Taiwan, 2013. 9

Suzuki T, Onigata C, Tani M, et al：Excitability of spinal neural function under relaxation imagery for two minutes, The 6th Asia-Western Pacific Region Congress of the World Confederation for Physical Therapy & The 12th International Congress of Asia Confederation for Physical Therapy, Taiwan, 2013. 9

Yurugi Y, Suzuki T, Iwatsuki H：Effects of lavender oil aroma on the spinal motor neurons innervating the upper extremities, The 6th Asia-Western Pacific Region Congress of the World Confederation for Physical Therapy & The 12th International Congress of Asia Confederation for Physical Therapy, Taiwan, 2013. 9

Taduhara Y, Takagi R, Suzuki T：Gait stabilization with amelioration of somatosensory extinction phenomenon: a case report of a patient, The 6th Asia-Western Pacific Region Congress of the World Confederation for Physical Therapy & The 12th International Congress of Asia Confederation for Physical Therapy, Taiwan, 2013. 9

Yoshida T, Tanino Y, Suzuki T：The effects of transcutaneous electrical nerve stimulation in relation to instability following ankle joint sprain , The 6th Asia-Western Pacific Region Congress of the World Confederation for Physical Therapy & The 12th International Congress of Asia Confederation for Physical Therapy, Taiwan, 2013. 9

Kishi S, Yoshida M, Suzuki T, et al：The rehabilitation program in sports players after lumbar discectomy (med method), The 6th Asia-Western Pacific Region Congress of the World Confederation for Physical Therapy & The 12th International Congress of Asia Confederation for Physical Therapy, Taiwan, 2013. 9

その他

鈴木俊明：運動（理学療法）とイメージ
東京臨床理学療法研究会．東京．2013. 9. 28

鈴木俊明：体幹機能とその運動療法―腹筋群、背筋群と

いう時代は終わった―　第31回東北理学療法学術大会．福島．2013. 11. 30

坂口俊二、谷　万喜子：「手軽にできるツボ刺激」―美と健康のために―　平成25年度（第19回）滋賀県看護学会．滋賀．2013. 12. 13

平成25年度　ヘルスプロモーション・整復学ユニット研究活動状況

A．構成メンバー

武田　大輔、津田　和志、畑村　育次、金井　成行、五十嵐　純、相澤　慎太、牛島　詳力、尾原　弘恭、高岸　美和、井口　　理、山原　正美、畑島　紀昭、桐月　健太

B．研究の計画と概要

平成22年4月1日から共同研究推進委員会のもとで、ヘルスプロモーション・整復学ユニットとしてユニット組みをして活動を開始。

（ヘルスプロモーションの分野）

ヘルスプロモーションの分野は多岐にわたるが、本ユニットでは、一つは、静的な状態の継続や、運動や動きなどの動的な影響や、物理的刺激が、体に及ぼす様々な生理的な変化・効果についての研究を行っていく。さらに、ヘルスプロモーション全般にかかわる分子生物学的な研究も加えて活動を行っていく。

（柔道整復の分野）

柔道整復は、業として古来より日本にある施術体系の一つである。業としての柔道整復は現状伝統的手法で骨折・脱臼・打撲・軟部組織等の処置を行ってきている。また柔道（柔術）を起源とするので運動器の損傷や動きについての理解にたけている。しかし、未だ研究機関も少なく、施術論理の解明は多くあるとは言えない。そこで、本分野では、これら伝統的に行われてきている施術について基礎的・臨床的・教育的な面での研究と運動器についての研究の構築を行いつつある。

上記についてヘルスプロモーションと柔道整復についての研究（下記）を単独もしくは組み合わせて行っていく方向性をもって進めていく。

（研究内容・結果について）

1．パソコン制御による自動操作、定量的な測定条件及び加圧（筋硬度）時と除圧（復元率）時の筋肉の変化が評価できる筋弾力評価装置を用いて肩こりと磁気治療の効果について検討した。検査項目は、磁気治療器装着前後の自覚症状（VAS)、僧帽筋上部の筋硬度及び復元率を測定した結果、磁気治療48時間後にVASが有意に改善し、筋硬度も減少する傾向がみられた。しかし、復元率には、有意な変化が認められなかった。VASと筋硬度は、パラレルな関係であると考えられたが、復元率においては更なる検討が必要であることが示唆された。

2．高血圧によるchronic kidney disease（CKD）と微小循環障害との関連を、細胞膜機能異常や酸化ストレス、内皮機能不全を中心に検討した。高血圧患者の赤血球膜fluidity（microviscosityのreciprocal value）を電子スピン共鳴法にて測定すると、高血圧患者の赤血球膜fluidityは正常血圧群に比し低下（膜microviscosityが悪化）し、estimated glomerular filtration rate（eGFR）が低いほど膜fluidityの減少度は大であった。General risk factorを補正後も、eGFRは膜fluidityの独立した予測因子と考えられた。また、eGFRと膜fluidityの低下は酸化ストレスの増加や血漿nitric oxide（NO）代謝産物の減少と有意に相関した。これらの成績は、腎機能低下が酸化ストレスや内皮機能不全を介して、赤血球膜のrheologic behavior異常や微小循環障害を惹起する可能性を示唆するものと考えられる。以上から、高血圧によるCKDは膜機能調節に重要な役割を果たし、腎硬化症に関連する血管内分泌因子の調和異常が心血管病変の成因に一部関与すると考えられる。

3．多嚢胞性卵巣症（Polycystic Ovary Syndrome, PCOS）において、モデルマウスを作製し卵巣内環境ホルモンの異常がどのように卵母細胞成熟に関与するのかをセロトニンを中心に組織学的および分子生物学的に検討している。

多嚢胞性卵巣症（Polycystic Ovary Syndrome, PCOS）は、月経異常, 多嚢胞性卵巣, 血中男性ホルモン高値またはLH基礎値高値かつFSH基礎値正常を満たす疾患で、体内環境ホルモンの異常で生じるが原因の詳細な解明はされていない。多嚢胞性卵巣（ＰＣＯ）はストレスや内分泌攪乱物質等の環境ホルモンや体内環境ホルモンの乱れなど多因子の影響で、下垂体、卵巣機能の障害を来たしステロイドホルモンの産生異常が病因となっていることが予想されるが、その原因や病態生理は複雑でいまだ明らかにされていない。そこで我々はステロイドホルモン

の一種であるアンドロゲンをマウスに投与しＰＣＯを作製し、その卵巣内環境ホルモンの異常がどのように卵母細胞成熟に関与するのかをセロトニンを中心に組織学的および分子生物学的に検討している。

4．足関節捻挫は再発するものが多く、様々な後遺症を後遺する外傷の一つである。そのため、急性期は固より受傷後の生活においてQOLを低下させる原因の一つであると考えられている。足関節捻挫後遺症の中で最も多いのが慢性足関節不安定症（CAI）であり、これは足関節捻挫後の長期に渡って足関節に不安定感を訴えるものをいう。これまでCAI郡と健常群を区別する方法に関する研究は数多く行われてきたが、何れの方法も両者を明確に区別できずコンセンサスは得られていない。そこで、床条件を足関節中立位と底屈位、安定した床面と不安定な床面においてSingle leg balance task（eye open）を行った。試技中の足関節速度を足関節動揺性の指標として、被験者を捻挫回数の違いにより郡分けし各床条件における矢状面・水平面・前額面上における足関節の動揺性を検証した。その結果、水平面上において捻挫回数が多い郡では足関節底屈位で床面を不安定にした場合にのみ有意に足関節の動揺性が増加した。また、矢状面や前額面においても足関節底屈位で不安定な床面で有意に足関節の動揺性が増加する結果を得た。即ち、足関節捻挫予防やCAIの動揺性評価のために行う片脚立ち系のバランスタスクは、足関節底屈位で不安定な床面上で行う必要があることが示唆された。

5．運動が体に及ぼす影響について、平成25年度は、五十嵐・相澤研究員が、看護学ユニットと共同的な研究の実施を行った。

6．動的・静的な影響や物理刺激に関する研究については、昨年同様基礎的な研究を進めた。

C．研究費獲得状況

25年度（競争的研究資金）

(1) 平成23、24、25年度科学研究費補助金　基盤研究（C）代表　津田和志（継続）
細胞膜機能と骨代謝動態からみたメタボリックシンドロームの病態生理（研究課題番号：23590901）

(2) 科学研究費補助金　基盤研究（C）代表　畑村育次
アンドロゲン誘導マウス多嚢胞性卵巣における卵母細胞成熟の基礎的研究
2013年度：1560千円（直接経費：1200千円，間接経費：360千円）
研究課題番号：24592492

(3) 産学連携研究費　ピップ株式会社　代表　金井成行
静磁場の生理学的影響及び臨床有用性に関する研究（副テーマ：肩こりに対する磁気治療器の効果―筋弾力による評価―）
2014年度：3000千円

D．研究業績

原　著・その他

谷口典正，金井成行　静磁場によるヒト正中神経に対する感覚神経伝達速度に及ぼす影響，慢性疼痛誌，2013. 32 (1), 165-9

Tsuda K: Chronic kidney disease predicts impaired membrane microviscosity of red blood cells in hypertensive and normotensive subjects. an electron spin resonance study. *Int Heart J*. 2013; 54: 154-159.

Tsuda K, Nautiyal M, Chappell MC, Diz DI: Angiotensin-(1-7) and bradykinin in baroreceptor reflex sensitivity in hypertension. *Hypertension*. 2013; 61: e19-20.

Tsuda K, Carter JR, Fu Q, Minson MT, Joyner MJ: Roles of sex steroid hormones and nitric oxide in the regulation of sympathetic nerve activity in women. *Hypertension*. 2013; 61: e36-37.

Tsuda K, Brambilla P, Antolini L, Street ME, Giussani M, Galbiati S, Valsecchi MG, Stella A, Zucchotti GV, Bernasconi S, Genovsi S: Low serum adiponectin levels and endothelial dysfunction in childhood hypertension. *Am J Hypertens*. 2013; 26: 717-718.

Tsuda K: Hyperhomocysteinemia and oxidative stress levels are associated with impaired membrane fluidity of red blood cells in hypertensive and normotensive men:an electron spin resonance investigation. *Int J Clin Med*. 2013; 4: 58-65.

Tsuda K, Pena-Silva RA, Faraci FM, Heistad DD: Letter regarding article,Impact of ACE2 deficiency and oxidative stress on cerebrovascular function with aging. *Stroke*. 2013; 44: e34-35.

Tsuda K, Xing W, Ji L, Li Y, Gao F, Yan W, Liu P, Sun L, Tao L, Zhang H: Hypoadiponectinemia and endogenous nitric oxide synthase inhibitor in hypertension. *Hypertension*. 2013; 62: e4-5.

Tsuda K, Staalso JM, Romner B, Olsen NV: Letter regarding article, Low plasma arginine:asymmetric dimethylarginine ratios predict mortality after intracranial aneurysm rupture. *Stroke*. 2013; 44: e92-93.

Tsuda K, Vargic J, Ferrario M: Angiotensin-(1-7) in the central nervous system regulation of blood pressure and renin-angiotensin system. *Am J Hypertens*. 2013; 26: 1174-1175.

Tsuda K, Ye ZU, Li DP, Pan HL: Glutamate receptors and presympathetic neuronal hyperactivity of the central nervous system in hypertension. *Hypertension*. 2013; 62: e33-34.

Tsuda K: Chronic kidney disease and membrane microviscosity in hypertension -an electron spin resonance study-. *J Jpn Coll Angiol*. 2013; 53: 179-183.

Tsuda K, Ovbiagele B, Kidwell CS: Letter regarding article, Association of chronic kidney disease with cerebral microbleeds in patients with primary intracerebral hemorrhage. *Stroke*. 2013; 44: e231-232.

学会発表（シンポジウム、Featured Research Session）

津田和志：細胞膜機能からみた高血圧の血管内皮障害とAdipokineによる調節機構 -電子スピン共鳴法を用いた検討-.
第54回日本脈管学会総会シンポジウム．2013年10月，東京.

Tsuda K: Resistin predicts impaired membrane microviscosity of red blood cells and microcirculatory dysfunction in hypertensive men: an electron spin resonance study.
Featured Research Sessions at the 77th Annual Scientific Meeting of the Japanese Circulation Society. March, 2013, Tokyo, Japan.

（一般演題）

Kanai S, Taniguchi N:Evaluation of Neck and Shoulder Stiffness on Muscle Meter, 4th nwac2013 World Anesthesia Convention, Bangkok, Thailand, 2013. 4

谷口典正，金井成行:肩こりの評価―筋弾力による客観的検討―，第86回日本産業衛生学会，松山，2013. 5

谷口典正，金井成行:磁気によるヒト正中神経に及ぼす影響，第43回日本臨床神経生理学会学術大会，高知，2013. 11

織田育代，金井成行，谷口典正:頬のたるみに対する等尺性運動によるアンチエイジング効果，第18回日本顔学会，仙台，2013. 11

Kanai S:Effect of oriental medicine on metabolic diseases, The 5th International Conference on Fixed Combination in the Treatment of Hypertension, Dyslipidemia and Diabetes Mellitus, Bangkok, Thailand, 2013. 11

谷口典正，金井成行:肩こりに対する筋弾性評価―磁気治療―，第43回日本慢性疼痛学会,横浜、2014. 2

Tsuda K: Cystatin C predicts membrane microviscosity of red blood cells and microcirculatory dysfunction in hypertension -an electron spin resonance study.
The 77th Annual Scientific Meeting of the Japanese Circulation Society. March, 2013, Tokyo, Japan.

Tsuda K: Resistin is associated with chronic kidney disease (CKD) and microcirculatory dysfunction in hypertensive subjects. The 36th Annual Scientific Meeting of the Japanese Society of Hypertension. October, 2013, Osaka, Japan.

井口理，井川貴裕，國部雅大，渡邊有実，内田靖之，下河内洋平，足関節内反捻挫予防のバランストレーニング

を効果的に行うための足関節肢位と床条件の検討，第2回日本トレーニング指導学会大会，東京，2013. 12

その他

牛島詳力:テーピング講習会（一般会員向け基礎），NPO法人JATAC全国活動報告会，宝塚医療大学，2013. 7

牛島詳力:テーピング講習会（一般会員向け基礎），NPO法人JATAC全国本部講習会，大阪市，2013. 12

牛島詳力:テーピング実技，堺市地域スポーツ指導者養成講座，堺市，2014. 2

牛島詳力，川畑浩久，菊池優子，小林直行，佐藤木綿子ら，（監訳：大谷素明），エビデンスに基づく疾患別クリニカルマッサージ―評価と治療（書籍翻訳），丸善出版（東京）発行年：2014，2014. 2

牛島詳力，久保田和稔，松下美穂，芳原雅司:シンポジウム：Compass ～道を示す・共に進む～，第17回学生トレーナーの集い，武庫川女子大学，2014. 3

平成25年度　臨床検査学ユニット研究活動状況

1．ユニットメンバー

若山　育郎、市村　輝義、花井　　淳、鍵弥　朋子、竹田　知広

2．平成25年度活動報告

以下の各テーマに沿って、個人およびグループ研究（学外との共同研究含む）を行った。

＜若山育郎＞

- 腰痛に対する鍼治療効果についてのシステマティックレビュー
  論文「腰痛患者に対する鍼治療－日本で実施されたRCTのシステマティックレビュー－」が全日本鍼灸学会雑誌に掲載された。（著者：下市善紀、春木淳二、若山育郎）。
- 全日本鍼灸学会学術大会の発表論文の出版バイアスに関する研究
  昨年より継続中（共同研究者：下市善紀、植村祐一）
- 各疾患の診療ガイドラインおける鍼灸のEBMに関する研究
  様々な疾患の診療ガイドラインにおいて鍼灸治療が取り上げられているかどうかを調査し、EBMに基づいた記載であるかを確認する作業を開始した。
- 病院で鍼灸を行うためにはどのようなアプローチが必要かについての研究
  論文「病院医療における鍼灸－鍼灸師が病院で鍼灸を行うために」が日本東洋医学雑誌に受理された。（著者：若山育郎、形井秀一、山口　智、篠原昭二、山下　仁、小松秀人）

＜市村輝義＞

- 認知症（予防）の診断と臨床検査に関する研究
  認知症診断のための臨床検査（アミロイドβ，リン酸化タウ，頸動脈エコー，光トポグラフィーなど）の有用性について確認し、認知症専門臨床検査技師（認知症予防学会）の教育を開始した。

＜花井　淳＞

- NTT西日本大阪病院病理科で診断した4例の稀有症例の病理学的検索
  「臨床的に前立腺癌を疑った高PSA血症を伴う一例」を第18回泌尿器腫瘍フォーラム（市立堺病院）で発表（共同研究者：小嶋啓子）
  「上行結腸に発症した炎症性筋線維芽細胞性腫瘍の一例」を第103回日本病理学会総会（平成26年4月23日）で発表予定。
  「消化管のundifferentiated sarcomaの一例（極めて稀）」及び「少数の癌細胞を被包するpseudoinflammatory tumor の一例（新しい病態の腫瘍）」について学会発表を視野に免疫組織学的に検索中である。

＜鍵弥朋子＞

- 胃粘膜の粘液分泌と食品中成分の影響、ピロリ菌感染の関係についての研究
  培養細胞を用いて実験継続中である。

＜竹田知広＞

- 血友病インヒビター新規免疫寛容療法の研究
  論文「Repression of factor VIII inhibitor development with apoptotic factor VIII-expressing embryonic stem cells」をHematology Reportsに投稿した（奈良県立医科大学小児科との共同研究）。
- 蕁麻疹の病態と血液凝固の関わりについての研究
  第25回中国四国臨床アレルギー研究会、第65回日本皮膚科学会西部支部学術大会で報告した。（広島大学皮膚科との共同研究）
- 喘息の病態と血小板についての研究
  American Academy of Asthma Allergy and Immunology年次総会にて報告した。
  （国立成育医療研究センター研究所　免疫・アレルギー研究部との共同研究）

3．研究業績

著　書

市村輝義．2.生理機能検査　脳波．狩野元成，鈴木敏恵，今井正，三村邦裕（編）．臨床検査臨地実習マニュアル第3版．東京．医歯薬出版．2013: 17-25.

市村輝義．病院の臨床検査と臨床検査技師の役割．北村清吉（編）．臨地実習ノート2版．東京．医歯薬出版．2014: 12-16.

原　著

若山育郎．慢性痛－鍼治療のエビデンスと医鍼連携の重要性．大鍼師会ジャーナル「響」．2013. 187号：2-4.

若山育郎，西川節子，森山健三．座談会－急性期の漢方

治療．薬事日報．2013; 第11299号.

黒須幸男，**若山育郎**，高澤直美，東郷俊宏，津谷喜一郎．特別座談会　WFAS25周年　これまでの歩みと課題を考える（前編）．医道の日本．2013; 72(10): 151-161.

黒須幸男，**若山育郎**，高澤直美，東郷俊宏，津谷喜一郎．特別座談会　WFAS25周年　これまでの歩みと課題を考える（後編）．医道の日本．2013; 72(11): 163-172.

若山育郎，石崎直人，斉藤宗則，鶴　浩幸，深澤洋滋．2012 WFAS鍼灸国際シンポジウム参加報告．全日本鍼灸学会雑誌．2013; 63(2): 132-140.

下市善紀，春木淳二，**若山育郎**．腰痛患者に対する鍼治療－日本で実施されたRCTのシステマティックレビュー－．全日本鍼灸学会雑誌．2013; 64(1): 37-53.

若山育郎，石崎直人，斉藤宗則，鶴　浩幸，深澤洋滋．2016WFAS鍼灸国際シンポジウムの東京招致が決定－2013WFASオーストラリア・シドニー総会学術大会参加報告．全日本鍼灸学会雑誌．2013; 64(1): 65-75.

市村輝義．研究室／学校紹介―関西医療大学―．臨床検査学教育．2013; 5(2): 109-111.

Sakurai Y, Kasuda S, Tatsumi K, **Takeda T**, Kato J, et al. Repression of factor VIII inhibitor development with apoptotic factor VIII-expressing embryonic stem cells. Hematol Rep. 2013; 5(2): 30-3.

Yoshida S, Sakurai Y, **Takeda T**, Fukuda K. Changes in BAFF/APRIL levels in a 2-year-old girl with Kawasaki disease unresponsive to intravenous immunoglobulin therapy. J Investigational Allergology and Clinical Immunology. 2013; 23: 52-3.

発　表

花井淳，小嶋啓子．臨床的に前立腺癌を疑った高PSA血症を伴う一例．第18回泌尿器腫瘍フォーラム．市立堺病院．堺市．2013. 12.

森桶聡，高萩俊輔，柳瀬雄輝，秀道広，櫻井嘉彦，**竹田知広**ら．蕁麻疹・血管性浮腫と血液凝固系の関わり．第25回中国四国臨床アレルギー研究会．岡山．2013. 9.

石川智朗，鈴木博，櫻井嘉彦，**竹田知広**，古川福実，金澤伸雄ら．大脳基底核の石灰化を契機に診断された中條・西村症候群の1例．第23回日本小児リウマチ学会総会・学術集会．埼玉．2013. 10.

森桶聡，高萩俊輔，柳瀬雄輝，秀道広，櫻井嘉彦，**竹田知広**ら．慢性蕁麻疹の病態と血液凝固の関わり．第65回日本皮膚科学会西部支部学術大会．鹿児島．2013. 11.

Takeda T, Unno H, Morita H, Saito H, Matsumoto K, Matsuda A. Platelets constitutively express interleukin-33 protein. American Academy of Asthma Allergy and Immunology Annual Meeting. San Diego. USA. 2014. 2.

その他

若山育郎．日本鍼灸の内憂外患．平成25年度全日本鍼灸学会近畿学術集会．明治東洋医学院専門学校．大阪．2013. 11.

Wakayama I. History and the Future of K-J Collaboration. K-CTC Traditional Korean Medicine Clinical Trial Symposium. Kyung Hee University Hospital, Seoul, Korea. 2013. 12.

若山育郎．パーキンソン病の東洋医学的治療について．難病講演会．東大阪市保健所．東大阪市．2014. 3.

市村輝義．認知症ということ－認知症の基礎知識．一般社団法人奈良県健康生きがいづくり協議会認知症予防講座．奈良市．2013. 3.

市村輝義．医療の中で科学を駆使する「臨床検査」．第8回高校生のための大学フェア大阪．大阪市．2013. 7

市村輝義．認知症ということ－認知症の基礎知識．一般社団法人奈良県健康生きがいづくり協議会認知症予防講座．奈良市．2013. 11.

平成25年度　基礎看護学ユニット研究活動状況

A．構成メンバー

辻　幸代、中納　美智保、和田　幸子、浅霧　博美、永井　芳子、松下　直子、山根木　貴美代

B．研究の計画と概要

このユニットは、看護ケアの開発や改良に寄与する研究、あるいは、看護基礎教育への貢献を目的とした看護技術に関する基礎研究を研究課題としている。本年度は、昨年度より継続して実施している足浴および湿性温罨法がもたらす生体への影響について研究した。基礎的な実験を行うための研究環境が十分でないこともあり、成果が少ないことが課題である。平成26年度は、研究環境を整え、研究活動を活発化したいと考えている。

C．研究業績

著　書

天賀谷隆，生井明浩，辻幸代他：2014年度版准看護師試験問題集，医学書院，2013. 4. 15，基礎看護9-10

原　著

山根木貴美代，松下直子，中納美智保，辻幸代：成人女性を対象とした足浴後の皮膚水分量の変化，日本看護学会論文集，看護教育，43号，19-21，2013

中納美智保，松下直子，山根木貴美代，辻幸代：後頸部への湿性温罨法による体温の変化―青年期女性と壮年期女性の比較，日本看護学会論文集，看護教育，43号，11-14，2013

和田幸子，平尾恭子，弓田洋子，大橋純子，森永聡美，岩井惠子：社会参加高齢者における健康観と保健行動とは何か．日本生活支援学会誌，2014，3号，7-15

学会発表

中納美智保，松下直子，山根木貴美代，永井芳子，辻幸代：足浴がもたらす肩部の温度・血流・筋硬度の変化，第44回日本看護学会-看護総合-学術集会．別府，2013. 9

中納美智保，辻幸代：後頸部への湿性温罨法が腹部の皮膚温と皮膚血流量に与える影響，第33回日本看護科学学会学術集会，大阪，2013. 12

その他

辻幸代：看護部研修会「看護研究」，奈良県立医科大学附属病院，2013. 5. 11，6. 22

辻幸代：奈良県看護協会研修会「新人看護職員研修（実地指導者研修）」，奈良県看護研修センター，2013. 5. 17

辻幸代：奈良県看護協会研修会「看護研究の基礎」，奈良県看護研修センター，2013. 5. 21，5. 31

辻幸代：認定看護管理者教育課程ファーストレベル「看護情報論」，奈良県看護研修センター，2013. 7. 26，8. 7

辻幸代：保健師助産師看護師実習指導者講習会「看護基礎教育の今後の方向性」，和歌山県県民文化会館，2013. 7. 31

辻幸代：キャリア開発ラダーレベルⅡ・Ⅲ研修「指導に活かすコミュニケーション」，日本赤十字社和歌山医療センター，2013. 11. 9

辻幸代：看護研究指導，西奈良中央病院，2013. 4 ～ 11

辻幸代：看護研究指導，済生会中和病院，2013. 5 ～ 12

和田幸子：大阪府保健師助産師看護師実習指導者講習「基礎・成人・老年看護学実習」2013. 6. 13，10. 23，2014. 2. 5

和田幸子：介護職員テーマ別技術向上研修「介護過程の展開方法」和歌山県介護普及センター，2013. 6. 25

和田幸子：第44回日本看護管理学会－看護管理－学術集会抄録査読委員，2013. 9. 19-20.

中納美智保：第44回日本看護管理学会－看護管理－学術集会抄録査読委員，2013. 9. 19-20.

平成25年度　臨床看護学ユニット研究活動状況

A．構成メンバー

石野レイ子、井村　弥生、板東　正巳、北得美佐子、築田　　誠、兒嶋　章仁、伊井みず穂、大石　悟郎、山田　　忍

B．研究活動の概要

1．研究執行の経過

ユニットの研究は、個人研究、共同研究、科研費採択による研究である。

共同研究としては「術後患者における観察能力習熟への教育方法の検討」をテーマに、平成25年度～28年度の3年間の予定で、研究活動を実践している。

科研費採択による研究は、科研研究補助費（挑戦的萌芽研究）課題番号23660051,（石野レイ子）平成23年～25年採択の研究を継続実践した。

2．臨床看護学ユニット研究、勉強会及び研究の活動

①平成25年度　第1回　臨床看護学ユニット勉強会

日時：平成25年4月23日　10時～12時

場所：5号館5階　会議室

内容：心理的変化とアクテイブトレサーについて

②研究活動（実験調査）

日時：平成25年8月26日～9月6日、10月30日～11月11日

内容：術後観察時の看護師および看護学生の視線調査

C．研究業績

著　書

井村弥生，編集：小山敦代、池西静江、森美香：まとめてわかる看護概論　災害看護担当　27-32，メディカ出版，2013.

論　文

井村弥生，平澤久一，林朱美他：看護学生の一次救命処置演習の実施による意識の変化－配置投影とテキストマイニングによる演習の前後の比較－，関西医療大学紀要　第7号，23-33，2013.

伊井みず穂，石野レイ子：慢性的な健康障害を持つ生活者に対する学生のイメージの変化，関西医療大学紀要 vol.7，17-22，2013.

学会発表

- Reiko Ishino，Keiko Iwai，Mizuho Ii，Erina Yabe，Akihito kojima: Consideration of the support program for keeping on physical activity for adults, ICN 25th, Melbourne, 2013. 5，P090S

- Misako Kitae：The Impact of Nursing Support on Decision Making Among Advanced Cancer Patients Receiving Outpatient Chemotherapy，ICN 25th，Melbourne，2013. 5

北得美佐子，井住暁世，福井亜希子：外来化学療法に移行する進行がん患者の意思決定に必要な医療者の支援について～質問紙調査票の自由記載から見えたもの～第18回日本緩和医療学会，横浜，2013. 6

福井亜希子，北得美佐子，井住暁世：外来化学療法室に通院する進行がん患者の社会・経済的問題に関する一考察，第18回日本緩和医療学会，横浜，2013. 6

竹内裕美，北得美佐子：臨床研修導入の有無による教育担当者の『新人看護師の見方』に関する特徴，日本看護管理学会学術集会，東京，2013. 7

井村弥生：看護学生の食事摂取と食認識の状況　実習期間中と実習期間外での比較，日本看護研究学会第39回学術集会，秋田，2013. 8.

田口豊恵，中森美希，井村弥生他：胃癌患者のために開腹術を受けた高齢者の睡眠評価：アクチウォッチと起床時睡眠感調査票からの分析，日本看護研究学会第39回学術集会，秋田，2013. 8

竹内裕美，北得美佐子：中小病院における新人看護師臨床研修導入における教育担当者の課題，第44回日本看護学会「看護管理」学術集会，大阪，2013. 9

井住暁世，北得美佐子：外来化学療法を受けるがん患者のセルフマネジメント能力に影響する退院時看護支援の分析と在り方の検討，第44 回日本看護学会「成人看護Ⅰ」学術集会，和歌山，2013. 10

石野レイ子，伊井みず穂，兒嶋章仁，岩井恵子：成人の運動習慣を継続するための支援プログラムの検討―支援プログラム参加者の事前調査と3ヶ月後の評価―，第33回日本看護科学学会学術集会，大阪，2013. 12. 6

北得美佐子：ポート留置入院後外来化学療法を受ける進行がん患者の意思決定に影響する看護支援の分析，第33回日本看護科学学会学術集会，大阪，2013. 12

井村弥生，兒嶋章仁：心肺蘇生法演習の教育効果，テキストマイニングによる分析，第33回日本看護科学学会学術集会，大阪，2013. 12

兒嶋章仁，築田誠，伊井みず穂，石野レイ子：青・壮年期の健康づくりへの関心と運動習慣確立の関連要因の検討，第33回日本看護科学学会学術集会，大阪，2013. 12

鹿島英子，岩井恵子，伊井みず穂，兒嶋章仁，築田誠，井村弥生他：高齢者SP（Simulated　Patient）の養成と課題，第33回日本看護科学学会学術集会，大阪，2013. 12

伊井みず穂，岩井恵子，大橋純子，岡本和士，紀平為子：超限界集落における住民の生活実態について（第2報）―地域包括ケアシステムの現状―，第33回日本看護科学学会，大阪，2013.

その他

石野レイ子，井村弥生，北得美佐子：社会医療法人　生長会　キャリアラダー研修Ⅲ「看護研究」講師　2013. 6 ～ 2014. 1

板東正己：日本精神保健看護学会　第23回学術集会実行委員　京都テルサ　2013. 6. 15

井村弥生：第14回済生会富田林病院二次救命処置コース　インストラクター，2013. 7

板東正己：関西精神力動看護研究会　うつ病が増えた原因と最近のうつ病（新型うつ病（仮））について　クレオ大阪南　2013. 9. 21，11. 16

板東正己：和歌山県立耐久高等学校　出張講義　看護・医療系大学・短期大学・専門学校の違い，看護・医療系の仕事に就くための適性　2013. 4. 22

板東正己：和歌山県立笠田高等学校　出張講義　看護師の適性・業務について，2013. 5. 7

北得美佐子：帝塚山学院高等学校 出張講義　看護師への道，看護とは，2013. 5. 25

北得美佐子：END of Life Nursing Education Consortium, ELNEC Trainer課程修了，2013. 8. 3-4

北得美佐子：第28回日本がん看護学会学術集会　抄録査読委員，2014. 2

北得美佐子：第28回日本がん看護学会学術集会　一般口演第55群「緩和ケア3」座長，2014. 2. 9

科研費採択による研究

石野レイ子，岩井恵子，伊井みず穂，吉田宗平，五十嵐純，相澤慎太：成人の運動習慣を継続するための支援モデルの開発，科研研究補助費（挑戦的萌芽研究）課題番号23660051，平成23 ～ 25年度

築田　誠，兒嶋章仁：人工呼吸器装着患者への呼吸器ケアの視点とその判断について，平成24年度関西医療大学奨励研究

築田　誠，兒嶋章仁，川島孝太，福田敦子，宮脇郁子：人工呼吸器ケアの質の向上と安全のためのケアプロセス・チェックリストの開発，平成25年度 日本光電循環器病研究助成

北得美佐子，野田京（㈱GCI），石井京子（大阪人間科学大学大学院），森田達也（聖隷三方原病院），宮下光令（東北大学大学院）：ホスピス・緩和ケア病棟の遺族ケアに関する研究，日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団研究事業，遺族によるホスピス・緩和ケアの質の評価に関する研究（J-HOPE3）分担研究，2013 ～ 2018

平成25年度　生涯発達看護学ユニット研究活動状況

A．構成メンバー

田中　静枝、平尾　恭子、津島　和美、室谷　牧子、家曽　美里、小原　裕子、濱田亜意子

B．共同研究の概要

テーマ「乳児家庭全戸訪問事業の課題と支援に関する研究」

概要：乳児家庭全戸訪問事業は生後4か月までの児童のいる家庭を訪問し、母子の心身状況の把握を行い、子育てに関する情報提供や必要な支援等を実施するものであり児童虐待及びその予備軍のスクリーニングの意味を持つ重大な政策である。

しかし、全戸訪問を実施している市町村には格差があり、訪問者も看護職等の専門職以外に母子保健推進員や民生委員、子育て経験者等様々で、要支援家庭のアセスメントや実際の支援においても違いがある等、効果的な訪問が行われていないことが課題としてあげられる。そこで、本研究では、大阪府と和歌山県における乳児家庭全戸訪問事業の実態および課題を明らかにするため、乳児家庭全戸訪問事業を行う市町村担当課の職員および母子保健推進員、4か月児の保護者を対象に質問紙調査を行い、乳児家庭全戸訪問事業の課題と養育者の事業に対するニーズおよび乳児期早期に必要な支援内容を検討する。

進捗状況：質問紙の作成が終了し、発送段階にある。

C．研究費獲得状況

平成25、26年度学術研究助成基金助成金　若手研究B　代表　家曽美里

適時かつ十分な医療アクセスに向けた、乳幼児を育てる女性の受診行動と関連事象の解明

D．研究業績

著　書

室谷牧子：今後の認知症支援を考える，成人病と生活習慣病，43(7), 891-985

室谷牧子，黒田研二，水上然，森岡朋子，佐瀬美恵子，田中園代：地域における認知症の人と家族の支援～地域包括支援センターと諸機関との連携をめざして～、大阪ガスグループ福祉財団助成研究グループ（代表黒田研二），分筆担当，大阪，2013. 4

原著論文

田中静枝，池内佳子：Hands-offテクニックによる母乳育児支援の効果，母性衛生　2013，vol. 54, No254巻2号

学会発表

田中静枝：看護学生への母乳育児教育「母乳育児の探求」の実践報告，第28回日本母乳哺育学会，長野県，2013. 9

田中静枝：Hands-offテクニックによる母乳育児支援の効果その2－Hands-offテクニックによる母乳育児支援実施前後の看護スタッフの認識調査より－第54回日本母性衛生学会総会・学術集会，埼玉大宮，2013. 10

津島和美，濱田亜意子：看護学生の講義にアートを利用して，アートミーツケア学会2013年度，石川，2013. 11

室谷牧子，金森純子，山階康子：看護学生が展開した認知症高齢者のパーソンセンタードケアの実践，第14回日本認知症ケア学会，福岡，2013, 6

室谷牧子，森岡朋子，佐瀬美恵子，水上然，田中園代，黒田研二，：地域づくりに役立つ認知症支援事例検討会のススメ，2013年度日本認知症ケア学会関西地域大会，大阪，2013, 7

上田佳世，大寺祥佑，家曽美里，中山健夫：日本の院内助産における低リスク出産に対する医療の質指標（Quality Indicators）の開発：ガイドラインに基づくエビデンス・レビューと修正デルファイ法を用いて，10th G－l－N CONFERENCE San Francisco，アメリカ合衆国・カリフォルニア州サンフランシスコ，2013. 8

その他

室谷牧子：認知症の人の支援を考える，Ｓコープ職員研修会，堺市，2013. 7

室谷牧子，竹内裕，佐瀬美恵子，三宅眞理：自分らしく

生きる～若年性認知症について気ままに語ろう～，若年性認知症支援ネットワーク・認知症ケア研究会拡大研究交流会，堺市，2013. 10

室谷牧子：認知症を正しく理解しよう，堺市北区デイサービス連絡会研修会，堺市，2013. 11

室谷牧子：これからの認知症ケアを考える，堺市北区介護支援専門員研修会，堺市，2013. 11

室谷牧子：認知症の正しい理解と家族へのメッセージ，施設利用認知症家族研修会，堺市，2013. 11

室谷牧子：認知症の人と家族の支援から地域づくりへ，シルバーボランティア研究会，大阪市，2013. 12

津島和美：アートワークショップ、河内長野市立子ども・子育て総合センター、2013. 6

津島和美：アートワークショップ、ファミリーサポートセンター北支部主催、大阪市北区、2013. 12

田中静枝：第1回大阪看護学会演題査読

平尾恭子：関西医療大学紀要査読　2013

家曽美里：ピアレビュー , Journal of Human Lactation, 2013. 9

家曽美里：ピアレビュー , Journal of Human Lactation, 2013. 3

平成25年度　地域・老年看護学ユニット研究活動状況

A．構成メンバー

岩井　惠子、増田　惠美、大橋　純子、鹿島　英子
吉本　和樹、森永　聡美、吉村　牧子

B．研究活動

1．研究費執行状況

地域・老年看護学ユニットとして、「SP参加型看護教育システムの構築」（平成25～26年度）が採択された。

2．共同研究の概要

我々は、平成24年度熊取町との協働事業で、第1期くまとりSP（Simulated Patient）を養成し、SP参加型演習を取り入れた。その結果、学生の学びにつながる一定の効果を確認した。

そこでさらに、「SP対象者および大学を取り巻く地域」、「臨地実習施設」、「看護学生を育てる大学」の3方向に効果的な影響を及ぼすことのできるプログラムシステムの構築をめざし、活動を開始した（図1）。

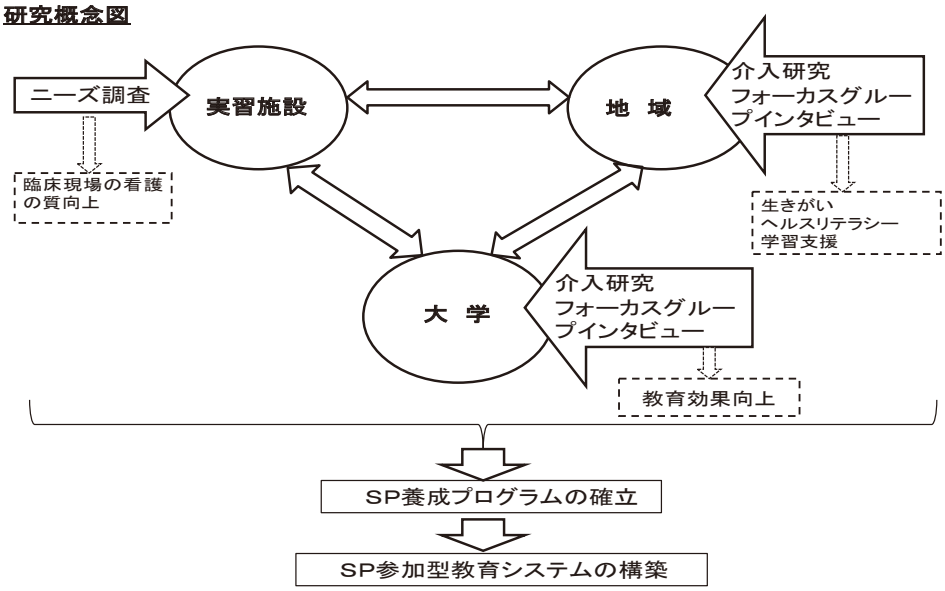

図1　SP参加型教育システム構築の概念図

3．活動内容

2013年度　活動状況

	月　日	曜日	内　　容
1	4月24日	水	SP研究会
2	5月22日	水	SP研究会
3	6月20日	木	SP研究会
4	7月18日	木	SP研究会
5	9月18日	水	SP研究会
6	9月4日	金	SP参加型演習　2年生老年看護方法論（公開授業）
7	10月18日	金	SP研究会
8	11月7日	木	FGI（SP対象）
9	11月20日	水	SP研究会
10	12月1日	土	第33回日本看護科学学会にてポスター発表
11	12月18日	水	SP研究会
12	1月23日	木	SP研究会
13			SP参加型演習　1年生ライフスタイル看護論
14	2月12日	水	SP研究会
15			第2期くまとりSP養成開始
16	3月12日	水	SP研究会
17	3月15日	土	実習施設（病院、高齢者施設）へのPR

４．平成25年度研究結果

平成25年度は、SP参加型演習の効果を分析するために、SPに対してFGI（Focus Group Interview）を行った。その結果、図2に示すように、13名養成したうち現在活動を継続しているのは8名であり、「人生経験を活かし人の役に立ちたい」、「学生と交流することで活力を得たい」などの思い（価値観）をもって参加した方が、現在継続できている要因ではないかと考えた（第33回日本看護科学学会にて報告）。

くまとりSPに対しては、月1回の研究会を継続し、演技や学生へのフィードバック力の向上を図っており、その成果も現れてきている。

また、今後幅広い分野でSPによる演習を行うため、第2期くまとりSPの養成を開始した。

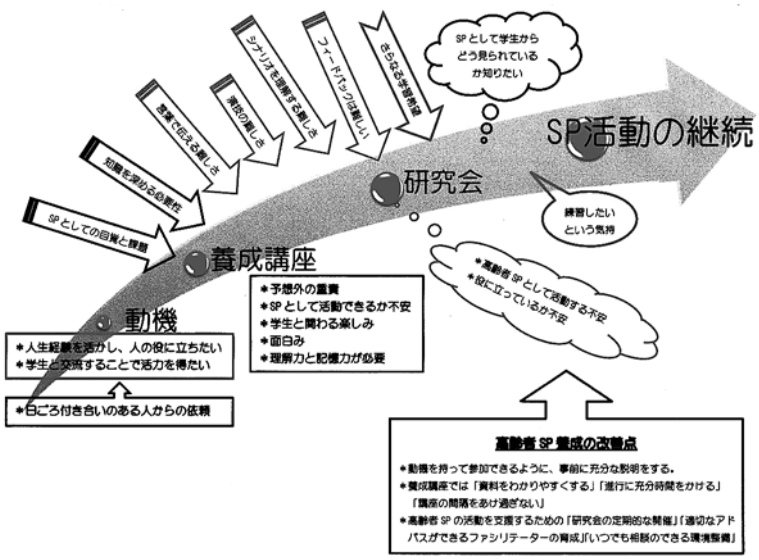

図2　SP養成のプロセス
（第33回日本看護科学学会ポスター発表より）

C．研究業績

１．著　書

岩井惠子他：「介護福祉士養成テキスト第2巻 介護の基本／介護過程」川井太加子・野中ますみ編，初版，P155-164　P225-236，法律文化社　平成26年（2014）．

岩井惠子他：「介護福祉士養成テキスト第3巻 コミュニケーション技術／生活支援技術Ⅰ・Ⅱ」中村明美・岩井惠子・井上千津子編初版，P53-60　P110-135，法律文化社　平成26年（2014）．

２．原　著

Ohashi Junko: Analytical Model / Emotional Intelligence Quotient and QOL in Mothers with Infants in Japan, Journal of Rural Medicine(8). 205－211. 2013. 12

３．学会発表

岩井惠子・板倉勲子・紀平為子 他：過疎の島で生活する高齢者の主観的幸福感に関連する要因－検診に参加した高齢者への意識調査－，日本老年看護学会第18回学術集会，大阪市，平成25年6月（2013）．

岩井惠子・伊井みず穂・紀平為子 他：超限界集落における住民の生活実態について（第1報）－生活の現状と主観的幸福感－，第33回日本看護科学学会学術集会，大阪市，平成25年12月（2013）．

伊井みず穂・岩井惠子・紀平為子 他：超限界集落における住民の生活実態について（第2報）－地域包括システムの現状－，第33回日本看護科学学会学術集会，大阪市，平成25年12月（2013）．

鹿島英子・岩井惠子・伊井みず穂 他：高齢者SP（Simulated Patient）の養成と課題，第33回日本看護科学学会学術集会，大阪市，平成25年12月（2013）．

Reiko Ishino, Keiko Iwai, Mizuho Ii, et al：Consideration of the support program for keeping on physical

activity for adults, International Council of Nurses 25th Quadrennial Congress, Australia, 2013.

４．その他

岩井惠子：大阪府保健師助産師看護師実習指導者講習会講師，大阪府看護協会，2013年6・10月2014年2月.

大橋純子：大阪労災病院師長補佐育成研修会講師，2014年3月.

大橋純子：第33回日本看護科学学会学術集会実行委員，2013年12月.

大橋純子：第33回日本看護科学学会査読委員，2013年6月

大橋純子：保健師コーチング研修会講師，京都市保健福祉局，2013年10月.

大橋純子：新人看護職員教育担当者研修講師，大阪府看護協会，2013年6月.

岩井惠子：超限界集落で生活をする高齢者の生活実態と保健医療的支援に関する研究．科研費（挑戦的萌芽）、平成24～26年.

大橋純子：ストレス軽減を目的としたコーチングプログラムの開発に関する研究，科研費（基盤C），平成25年～27年.

平成24年度　関西医療大学　動物実験に関する現況調査票

Ⅰ．動物実験に関する組織

機関長	職名　学長	氏名　吉益　文夫	
事務担当者	職名　学務係	氏名　松尾　沙矢香	
同　連絡先	TEL 072-453-8251	FAX　072-453-0276	e-mail matsuo@kansai.ac.jp
動物実験委員会 委員長	職名　教授	氏名　樫葉　均	
同　委員	職名　教授	氏名　中峯　寛和	
同　委員	職名　教授	氏名　吉田　仁志	
同　委員	職名　准教授	氏名　大西　基代	
同　委員	職名　講師	氏名　深澤　洋滋	

Ⅱ．機関における動物実験の概要

1．動物実験を行う主たる研究分野

■　医歯薬学分野　　□　畜産・獣医学分野
□　生物科学分野　　□　理工学分野
□　その他（　　）

2．年度ごとに使用した実験動物の種類と概数

動　物　種	概　　数				
	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度
マウス	100	134	67	63	44
遺伝子改変マウス	—	—	25	10	4
ラット	18	457	709	1018	646
ウシガエル*1	6	0	6	6	6

3．年度ごとの承認された動物実験計画数

動物実験計画数	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度
	12件	10件	9件	7件	6件

４．年度ごとの動物実験に関する教育訓練の受講者数

教育訓練受講者数	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24度
	8人	8人	6人	4人	5人

５．実験動物飼養保管施設の現況

施設の名称	管理者の職・氏名	実験動物管理者の職・氏名 （関連資格・経験年数）	動物種	最大飼養頭数 （概数）
動物実験センター	教授・樫葉均	教授・樫葉均*2 （医学博士、経験年数：動物実験を始めて27年）	マウス ラット ウシガエル	120 60 3

６．特記事項
（動物実験に関連した、機関の特徴や特殊事情）

関西医療大学・動物実験センターの特殊事情

本学における動物飼養施設は動物実験センター、1施設のみである。ここ数年、使用する年間の動物数も1000匹程度であり、きわめて小さな施設である。これまで、実験動物の搬入、飼養、保管に関しては、それぞれの動物実験責任者（動物実験計画書を提出した者）が責任を持って行うこととし、動物実験センターの管理・維持等についても、動物実験責任者と動物実験センター長がお互いに協調しながら運営に努めている。

「*1」：本来、「ウシガエル」は実験動物に含まれないが、本学動物実験委員会では「ウシガエル」についても他の実験動物と同様に取り扱っている。

「*2」：本学の「動物実験規定」において、動物実験センター主任が実験動物管理者の任に当たることが定められている。実験動物管理者は獣医の資格を有する者、もしくはこれに準ずる者が適切であると考えられるが、本学にはこれに相当する者がいない。平成23年度、本学動物実験委員会は動物実験センター長がこれを兼任することを決めた。

平成24年度　関西医療大学　動物実験に関する自己点検・評価報告書

Ⅰ．規程及び体制等の整備状況

1．機関内規程

1）評価結果

■　基本指針に適合する機関内規程が定められている。

□　機関内規程は定められているが、一部に改善すべき点がある。

□　機関内規程が定められていない。

2）自己点検の対象とした資料

「動物実験規程」

「動物実験センター規程」

「動物実験委員会規程」

3）評価結果の判断理由（改善すべき点があれば、明記する。）

本学は、文部科学省が策定した「研究機関等における動物実験等の実施に関する基本指針」等に則し機関内規定を適正に定めている。

4）改善の方針、達成予定時期

特に改善すべき点は無いと考えている。

2．動物実験委員会

1）評価結果

■　基本指針に適合する動物実験委員会が置かれている。

□　動物実験委員会は置かれているが、一部に改善すべき点がある。

□　動物実験委員会は置かれていない。

2）自己点検の対象とした資料

「動物実験委員会規程」

3）評価結果の判断理由（改善すべき点があれば、明記する。）

「動物実験委員会規程」に則し、本学は動物実験委員会（委員長含め全5名）を適正に設置している。

4）改善の方針、達成予定時期

特に改善すべき点は無いと考えている。

３．動物実験の実施体制

（動物実験計画書の立案、審査、承認、結果報告の実施体制が定められているか？）

１）評価結果

■　基本指針に適合し、動物実験の実施体制が定められている。

□　動物実験の実施体制が定められているが、一部に改善すべき点がある。

□　動物実験の実施体制が定められていない。

２）自己点検の対象とした資料

「動物実験規程」

３）評価結果の判断理由（改善すべき点があれば、明記する。）

「動物実験規程」において動物実験計画書の立案、審査、承認、結果報告等の手続きが定められている。それぞれの書類の様式も整えられており、動物実験の実施体制が適正に整備されている。

４）改善の方針、達成予定時期

特に改善すべき点は無いと考えている。

４．安全管理に注意を要する動物実験の実施体制

（遺伝子組換え動物実験、感染動物実験等の実施体制が定められているか？）

１）評価結果

■　基本指針に適合し、安全管理に注意を要する動物実験の実施体制が定められている。

□　安全管理に注意を要する動物実験の実施体制が定められているが、一部に改善すべき点がある。

□　安全管理に注意を要する動物実験の実施体制が定められていない。

□　該当する動物実験は、行われていない。

２）自己点検の対象とした資料

「遺伝子組換え実験等安全管理規程」

「遺伝子組換え実験等安全委員会規程」

３）評価結果の判断理由（改善すべき点があれば、明記する。）

本学は「遺伝子組換え実験等安全管理規程」および「遺伝子組換え実験等安全委員会規程」により、遺伝子組換え実験等安全委員会を設置し、遺伝子組換え動物実験、感染動物実験等の実施体制を整えている。

4）改善の方針、達成予定時期

特に改善すべき点は無いと考えている。

5．実験動物の飼養保管の体制

（機関内における実験動物の飼養保管施設が把握され、各施設に実験動物管理者が置かれているか？）

1）評価結果

□　基本指針や実験動物飼養保管基準に適合し、適正な飼養保管の体制である。

■　概ね良好であるが、一部に改善すべき点がある。

□　多くの改善すべき問題がある。

2）自己点検の対象とした資料

「動物実験規程」

「動物実験センター規程」

3）評価結果の判断理由（改善すべき点や問題があれば、明記する。）

本学において、動物を飼養する保管施設は「実験動物センター」1施設のみで、これ以外の施設等で実験動物は飼養されていない。「動物実験規程」により管理者は「動物実験センター長」と定められている。実験動物管理者は「動物実験センター主任」がこれにあたることが定められているが、平成22年度まで不在であった。平成23年度、動物実験委員会では、動物実験センター長が動物実験センター主任（実験動物管理者）を兼務することを決めた。

4）改善の方針、達成予定時期

実験動物管理者は獣医の資格を有する者、もしくはこれに準ずる者が適切であると考えられるが、本学にはこれに適した者がいない。よって本学では動物実験センター長が実験動物管理者を兼務している。現在、動物実験センター長は実験動物管理者の素養を高める努力をしているところである。

6．その他

（動物実験の実施体制において、特記すべき取り組み及びその点検・評価結果）

特に記載事項はありません。

Ⅱ．実施状況

1．動物実験委員会

（動物実験委員会は、機関内規程に定めた機能を果たしているか？）

1）評価結果

■　基本指針に適合し、適正に機能している。

□　概ね良好であるが、一部に改善すべき点がある。

□　多くの改善すべき問題がある。

2）自己点検の対象とした資料

動物実験委員会議事録

動物実験委員会に提出された以下の資料

動物実験計画承認申請書

動物実験計画書

動物実験実施報告書

動物実験センター利用者講習会資料

自己点検報告書・評価報告書（本報告書）および現況調査票

3）評価結果の判断理由（改善すべき点や問題があれば、明記する。）

①動物実験計画の審査を行っている。

②動物実験計画の立案に関して、助言・指導を行っている。

③動物実験センターの管理・保管を行っている。

④動物実験センター利用者講習会（教育訓練を含む）を開催している。

⑤動物実験に関する自己点検報告書・評価報告書および動物実験に関する現況調査票を作成している。

⑥その他、動物実験の適正な実施のために必要な活動を行っている。

（以上、これらの主な活動は議事録に記載されている。）

4）改善の方針、達成予定時期

特に改善すべき点は無いと考えている。

2．動物実験の実施状況

（動物実験計画書の立案、審査、承認、結果報告が実施されているか？）

1）評価結果

□　基本指針や実験動物飼養保管基準に適合し、適正な飼養保管の体制である。

■　概ね良好であるが、一部に改善すべき点がある。

□　多くの改善すべき問題がある。

2）自己点検の対象とした資料

動物実験委員会議事録

動物実験委員会に提出された以下の資料

動物実験計画承認申請書

動物実験計画書

動物実験実施報告書

3）評価結果の判断理由（改善すべき点や問題があれば、明記する。）

①平成24年度、動物実験委員会に提出された「動物実験計画書」は計6件であり、審査の結果、6件が承認された。

②このうち6件の「動物実験実施報告書」が提出されている（平成25年10月現在）。

③実験計画の立案についても適宜指導を行っている。

4）改善の方針、達成予定時期
特に改善すべき点は無いと考えている。

3．安全管理を要する動物実験の実施状況

（当該実験が安全に実施されているか？）

1）評価結果
■ 基本指針に適合し、当該実験が適正に実施されている。
□ 概ね良好であるが、一部に改善すべき点がある。
□ 多くの改善すべき問題がある。
□ 該当する動物実験は、行われていない。

2）自己点検の対象とした資料
動物実験実施報告書
遺伝子組換え実験等安全管理規程

3）評価結果の判断理由（改善すべき点や問題があれば、明記する。）
動物実験委員会は動物実験計画の審査の段階で、危険性を有する薬剤の使用や実験実施者の健康管理等について注意を喚起し、実験の実施についても安全管理に努めている。これまで、実験による事故や健康被害についての報告は受けていない。
本学では、「動物実験規定」とは別に「遺伝子組換え実験等安全管理規程」を定めており、遺伝子組み換え動物を取り扱いに関しては、この規定に基づき遺伝子組換え実験等安全管理委員会の審査を経なければならない。遺伝子組み換え動物の拡散防止については、両委員会がこれに努めている。

4）改善の方針、達成予定時期
特に改善すべき点は無いと考えている。

4．実験動物の飼養保管状況

（実験動物管理者の活動は適切か？　飼養保管は飼養保管手順書等により適正に実施されているか？）

1）評価結果
□ 基本指針や実験動物飼養保管基準に適合し、適正に実施されている。
■ 概ね良好であるが、一部に改善すべき点がある。
□ 多くの改善すべき問題がある。

2）自己点検の対象とした資料
「動物実験規程」
「動物実験センター、施設利用の手引」

3）評価結果の判断理由（改善すべき点や問題があれば、明記する。）

「動物実験規程」および「動物実験センター、施設利用の手引」において飼養保管手順等が案内されており、これに従って、実験計画を遂行するそれぞれの実験実施者が適正な飼養保管に努めている。これまで、実験動物の搬入、飼養、保管に関しては、それぞれの動物実験責任者（動物実験計画書を提出した者）が責任を持って行うこととし、これを動物実験センター長が管理してきたところである。

4）改善の方針、達成予定時期

上で述べたように実験動物管理者は獣医の資格を有する者、もしくはこれに準ずる者が適切であると考えられるが、本学にはこれに適した者がいない。よって本学では動物実験センター長が実験動物管理者を兼務している。現在、動物実験センター長は実験動物管理者の素養を高める努力をしているところである。

5．施設等の維持管理の状況

（機関内の飼養保管施設は適正な維持管理が実施されているか？　修理等の必要な施設や設備に、改善計画は立てられているか?）

1）評価結果

□　基本指針や実験動物飼養保管基準に適合し、適正に維持管理されている。
■　概ね良好であるが、一部に改善すべき点がある。
□　多くの改善すべき問題がある。

2）自己点検の対象とした資料

備品チェックリスト（大学事務局・総務課）

3）評価結果の判断理由（改善すべき点や問題があれば、明記する。）

動物実験センターにおける備品等のチェックは、毎年、行っている。空調等に関わる設備についても定期的な点検が実施されており、不具合や故障が発生した場合はその都度対処している。よって改善計画は立てていない。平成24年度、一部、空調設備を修理したところである。

4）改善の方針、達成予定時期

当該センターは開設されてから二十数年の月日が過ぎている。この老朽化の問題については、学校法人関西医療学園全体の問題であり、将来構想の一環として取り組みたいと考えている。

6．教育訓練の実施状況

（実験動物管理者、動物実験実施者、飼養者等に対する教育訓練を実施しているか？）

1）評価結果

■　基本指針や実験動物飼養保管基準に適合し、適正に実施されている。

□　概ね良好であるが、一部に改善すべき点がある。

□　多くの改善すべき問題がある。

2）自己点検の対象とした資料

「動物実験センター、施設利用の手引」

動物実験センター利用者講習会資料

「実験動物購入申請書」

3）評価結果の判断理由（改善すべき点や問題があれば、明記する。）

毎年、教育訓練を含む動物実験センター利用者講習会を開催しており、受講者には「センター登録番号」を発行している。講師は動物実験センター長（教授・樫葉均）が務めている。動物実験センター長は、より充実した「教育訓練」を実施できるように、その素養を高めるべく努力をしているところである。

4）改善の方針、達成予定時期

特に改善すべき点は無いと考えている。

7．自己点検・評価、情報公開

（基本指針への適合性に関する自己点検・評価、関連事項の情報公開を実施しているか？）

1）評価結果

■　基本指針や実験動物飼養保管基準に適合し、適正に実施されている。

□　概ね良好であるが、一部に改善すべき点がある。

□　多くの改善すべき問題がある。

2）自己点検の対象とした資料

「動物実験に関する自己点検報告書・評価報告書」（本報告書）

「動物実験に関する現況調査票」

3）評価結果の判断理由（改善すべき点や問題があれば、明記する。）

「動物実験に関する自己点検報告書・評価報告書」および「動物実験に関する現況調査票」は作成されており、これを裏付ける基本的な資料も揃っている。これらの報告書については、「関西医療大学紀要」や本学ホームページにおいて情報公開している。

4）改善の方針、達成予定時期

特に改善すべき点は無いと考えている。

８．その他

（動物実験の実施状況において、機関特有の点検・評価事項及びその結果）

本学における動物飼養施設は動物実験センター、1施設のみである。ここ数年、年間当たりの実験計画数は10件程度であり、使用する年間の動物数も少ない（年間約1000匹）。このような小さい規模の施設なので、専任の職員等は配置されていない。これまで、実験動物の搬入、飼養、保管に関しては、それぞれの動物実験責任者（動物実験計画書を提出した者）が責任を持って行うこととし、これを動物実験センター長が管理してきたところである。このような実験を行う者とそれを管理する者はお互いの立場を理解し、良好な関係を築いてきた。本学におけるこのような関係は、将来にわたって維持・発展させたいと考えている。

編集後記

昨今、様々な報道が目まぐるしく飛び交い、3か月も経過すると、大きく報道された事件も十分な検証がなされないまま次々と忘れ去られてゆく時代となりました。

しかし、今年は、大学や研究機関にとって重大な事件が起こりました。今年2014年は、理研の研究者の刺激惹起性多機能獲得細胞（STAP細胞）作製の偉業という幕開けにはじまり、2月には、一転、論文不正の疑義が浮上し、その半年を越えて、最終的には論文の撤回、さらには、極めて優秀な研究者の自殺という不幸な結末にいたる事態となりました。そして、世界を巻き込み、少数の人々をスケープゴートにして、この問題は終結にいたろうとしています。

報道では様々な識者の意見に焦点が当てられてきました。しかし、結果的に焦点がぼやけて、本来の問題は何かということが十分に検証されたのか疑問が残ります。また、この問題は、様々な方面に波及し、大学の博士論文内容の見直しに始まり、博士論文作成から受理に至る経緯に焦点が当たってきていますが、論文の作成やそのモラルは今更改めて語る問題ではないかと思われます。モラルを下げてきた理由は何なのでしょうか。本来の問題は何なのでしょうか。こうしたことが起こる背景の一部に、質より量、業績数に偏重した本末転倒の、自転車操業的業績至上主義があると云われています。これは本来立派な研究能力を秘めた後進の若い優秀な研究者の芽を摘んでしまうこととともなりかねません。

関西医療大学紀要は、良識ある皆様のお力添えを頂きながら、これまで同様に、良心的な質に裏付けされた研究業績を発信して行きたいと、編集委員一同、願っております。

編集担当　郭　哲次

関西医療大学紀要　Vol. 8

2014年12月30日　発行

発行者　関西医療大学
〒590-0482　大阪府泉南郡熊取町若葉2丁目11番1号
（編集代表者　吉田宗平）

印刷所　富士紙工業株式会社
〒547-0034　大阪市平野区背戸口3丁目8番6号